熊本県文化財調査報告　第38集

生産遺跡基本調査報告書 I

—製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所—

1979

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第38集

生産遺跡基本調査報告書 I

—製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所—

1 9 7 9

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第38集

「生産遺跡基本調査報告書Ⅰ」　正　誤　表

頁	行	誤	正
表　紙		石　器　製　作　所	石　器　製　作　跡
本文目次	8	石　器　製　作　遺　跡	石　器　製　作　跡
挿図目次	3	1/50,000	1/50,000
2	25	大　仁　田　仁　義	大　仁　田　喜　義
〃	25	横　尾　泰　則	横　尾　泰　宏
8	1	製　塩　遺　跡　一　覧　表	製　塩　遺　跡　一　覧　表
〃	13	製　鉄　遺　跡　一　覧　表	製　鉄　遺　跡　一　覧　表
11	18	域　　平	城　　平
14	13	大　郎　迫　遺　跡	太　郎　迫　遺　跡
17	24	大仁田仁義・横尾泰則	大仁田喜義・横尾泰宏
27	15	横　尾　泰　則　氏	横　尾　泰　宏　氏
〃	18	大　仁　田　仁　義　氏	大　仁　田　喜　義　氏
52(第８表)	地区名	Ⅰ　―　10	Ⅰ　―　1
〃	〃	Ⅰ　―　1	Ⅰ　―　10
57	26～27	九州電力株力株式会社	九　州　電　力　株　式　会　社
62	26	基　部　と　東　西　に	基　部　を　東　西　に
72	9	丕　　ん　　だ	歪　　ん　　だ
75	7	宇　土　市　上　網　田　町	宇　土　市　網　田　町
〃	18	字　土　半　島	宇　土　半　島
76	29	両　　側　　に	西　　側　　に
103	8	詳　　略	詳　　細
104	14―15	芦　北　屋　茂　平　寺	芦　北　屋　茂　平　次
図版　31	タイトル		ふいごの羽口　1・2 神合遺跡　3～9 高塚遺跡

序　　文

熊本県教育委員会では、県内各地に分布する文化財の基礎資料の整備・充実を図るため、遺跡分布調査を中心に地域や種別を限って基礎的な調査を進めております。

これまでに、装飾古墳総合調査（48～49年度)、中世城跡調査(50～52年度)、菊池川流域文化財調査(50～52年度)、条里制調査(50～51年度)などが一応終結し、その成果は、熊本県文化財調査報告として刊行してきました。

生産遺跡基本調査もこれらと一連の事業として計画したもので、53～54年度の2カ年にわたり、県下に所在する製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作遺跡(53年度)、須恵器窯跡・瓦窯跡・近世陶磁器窯跡(54年度)について基礎調査を実施するものです。

これらの生産遺跡は、山間部や丘陵・海浜に立地するものが多く、地表における標識物もほとんど見られないところから、ややもすると文化財という認識に欠ける面もありがちですが、当時の社会・経済を理解するうえできわめて重要な文化財といえましょう。

調査にあたり、文化庁をはじめ関係市町村教育委員会、専門調査員、調査協力者など、多くの方々の協力を受け、調査が円滑に遂行できましたことに対してここに厚くお礼を申しあげます。

本書がより多くの人に活用され、文化財保護の一助ともなれば幸いです。

昭和54年3月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の概要

Ⅰ　調査に至る経違……1

Ⅱ　調査の組織……2

Ⅲ　調査の概要……3

第Ⅱ章　遺跡の分布

Ⅰ　製塩遺跡……5

Ⅱ　製鉄遺跡……5

Ⅲ　石器製作遺跡……7

第Ⅲ章　発掘調査の記録

Ⅰ　出来町遺跡……16

Ⅱ　柳迫遺跡……28

Ⅲ　今泉製鉄遺跡……34

Ⅳ　柿迫遺跡……48

第Ⅳ章　遺跡解説

Ⅰ　製塩遺跡……58

Ⅱ　製鉄遺跡……65

Ⅲ　石器製作跡……83

第Ⅴ章　調査の成果と問題点

Ⅰ　製塩遺跡について……88

Ⅱ　製鉄遺跡をめぐる諸問題……89

挿　図　目　次

第　1　図　遺跡分布図（$\frac{1}{200,000}$）……おりこみ
第1－2図　遺跡分布図（$\frac{1}{50,000}$）……〃
第1－3図　遺跡分布図（$\frac{1}{50,000}$）……〃
第　2　図　出来町遺跡位置図……16
第　3　図　出来町遺跡地形図及び発掘区……19
第　4　図　出来町遺跡土層断面図……20
第　5　図　出来町遺跡出土土師器・須恵器実測図……21
第　6　図　出来町遺跡出土製塩土器実測図……23
第　7　図　出来町遺跡出土製塩土器実測図……24
第　8　図　柳迫遺跡地形図……29
第　9　図　柳迫遺跡調査区断面図……30
第　10　図　柳迫遺跡出土遺物実測図……32
第　11　図　今泉製鉄遺跡位置図……34
第　12　図　今泉製鉄遺跡地形図……36
第　13　図　今泉製鉄遺跡遺構実測図……おりこみ
第　14　図　今泉製鉄遺跡出土鉄釘実測図……39
第　15　図　包丁鉄実測図……40
第　16　図　柿迫遺跡位置図……48
第　17　図　柿迫遺跡地形図及び発掘区……50
第　18　図　柿迫遺跡土層断面図……51
第　19　図　柿迫遺跡出土遺物実測図……53
第　20　図　柿迫遺跡採集遺物実測図……54
第　21　図　柿迫遺跡採集遺物実測図……55
第　22　図　柿迫遺跡採集遺物実測図……56
第　23　図　男原遺跡採集磨製石鏃実測図……57
第　24　図　大田尾遺跡採集製塩土器実測図……58
第　25　図　大田尾遺跡採集土器実測図……59
第　26　図　黒田遺跡遺構略測図……60
第　27　図　塩屋浦遺跡出土土器実測図……61
第　28　図　串遺跡・小波戸遺跡採集製塩土器実測図……61

第 29 図　中ノ尾遺跡位置図…… 62
第 30 図　沖の原遺跡位置図…… 63
第 31 図　沖の原遺跡採集製塩土器・須恵器実測図…… 63
第 32 図　薬師の前遺跡採集ふいごの羽口実測図…… 66
第 33 図　たたらもとA遺跡出土ふいごの羽口実測図…… 70
第 34 図　金塚遺跡採集ふいごの羽口実測図…… 71
第 35 図　むくろじ遺跡出土ふいごの羽口実測図…… 73
第 36 図　たたらもと遺跡・金山遺跡位置図…… 78
第 37 図　馬水遺跡位置図…… 79
第 38 図　沈目立山遺跡位置図…… 80
第 39 図　嵐口鞴遺跡位置図…… 81
第 40 図　丸山遺跡位置図…… 81
第 41 図　二子山石器製作跡位置図…… 83
第 42 図　二子山石器製作跡工程図…… 84
第 43 図　谷頭遺跡位置図…… 85
第 44 図　前畑遺跡推定位置図…… 86
第 45 図　下永尾野遺跡採集石器実測図…… 87
第 46 図　丸山3号墳出土鉄鉗実測図…… 92
第 47 図　六反遺跡炉跡実測図…… 94
第 48 図　石製ふいごの羽口実測図…… 105
第 49 図　甚七銘ふいごの羽口出土遺跡分布図…… 106
第 50 図　ふいごの羽口実測図…… 107

表　目　次

第 1 表　発掘調査一覧表…… 3
第 2 表　製塩遺跡一覧表…… 8
第 3 表　製鉄遺跡一覧表…… 8
第 4 表　石器製作跡一覧表…… 14
第 5 表　発掘区別遺物出土数…… 18
第 6 表　製塩土器計測表…… 22
第 7 表　製塩土器計測値の比較…… 25
第 8 表　柿迫遺跡出土遺物一覧表…… 52

図　版　目　次

図　版　1　出来町遺跡空中写真
図　版　2　出来町遺跡　(1)遺跡遠景　(2)遺跡近景
図　版　3　出来町遺跡　(1)発掘区断面　(2)出土遺物
図　版　4　出来町遺跡出土製塩土器
図　版　5　出来町遺跡出土製塩土器
図　版　6　出来町遺跡出土製塩土器
図　版　7　柳迫遺跡　(1)遺跡遠景　(2)発掘区断面
図　版　8　柳迫遺跡出土遺物
図　版　9　今泉製鉄遺跡　(1)遺跡遠景　(2)発掘区全景
図　版　10　今泉製鉄遺跡　(1)遺構全景　(2)遺構
図　版　11　今泉製鉄遺跡　(1)遺構　(2)西小舟の天井部
図　版　12　今泉製鉄遺跡　(1)本床北側断面　(2)本床南側断面
図　版　13　今泉製鉄遺跡　(1)東小舟の補修部分　(2)西小舟北側の閉塞
図　版　14　金屋子神・平岡家文書
図　版　15　柿迫遺跡　(1)遺跡遠景　(2)遺跡遠景
図　版　16　柿迫遺跡　(1)遺跡全景　(2)発掘区の層序
図　版　17　柿迫遺跡出土遺物
図　版　18　柿迫遺跡採集石器
図　版　19　大田尾遺跡・塩屋浦遺跡空中写真
図　版　20　沖の原遺跡空中写真
図　版　21　小岱山製鉄遺跡群空中写真(1)
図　版　22　小岱山製鉄遺跡群空中写真(2)
図　版　23　小岱山製鉄遺跡群空中写真(3)
図　版　24　小岱山製鉄遺跡群空中写真(4)
図　版　25　小岱山製鉄遺跡群空中写真(5)
図　版　26　三の岳製鉄遺跡群・石器製作跡空中写真
図　版　27　大岳製鉄遺跡群・製塩遺跡空中写真(1)
図　版　28　大岳製鉄遺跡群空中写真(2)
図　版　29　大岳製鉄遺跡群空中写真(3)
図　版　30　ふいごの羽口
図　版　31　ふいごの羽口

例　　言

1．本書は、熊本県教育委員会が国庫補助を受けて実施している生産遺跡基本調査の報告である。

2．本書には、53年度に調査を実施した製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作跡についての成果を収録した。

3．53年度調査に関する分析調査（鉄滓分析・木炭分析等）の成果については、54年度報告に収録する予定である。

4．本書の執筆は、松本健郎が行った。

5．本書に使用した図の作成は、松本の他、松村道博・勢田広行によるもので、整図には広瀬賜代氏の協力があった。

　掲載写真は松本・白石巌によるものである。

6．遺跡分布図及び空中写真に付した記号の凡例は次のとおりである。また、遺跡番号はすべて第２～４表と対照する。

　△ 製塩遺跡

　○ 製鉄遺跡

　□ 石器製作跡

7．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、松本健郎が担当した。

第Ⅰ章　調査の概要

Ⅰ　調査に至る経違

昭和47年熊本県教育委員会に文化課が設置され、従来の資料を基礎に文化財に関する基礎資料の作成作業が進められている。

この作業の中心となるのは遺跡台帳の整備であり、従来の『熊本県埋蔵文化財地名表』[註1]、『全国遺跡地図(熊本県)』[註2]に加えて『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表』[註3]を出版して鋭意その把握に努め、さらに昭和54年度には『全国遺跡地図(熊本県)』の改訂版[註4]の出版が企画されている。

これと並行して、地域・種別を限定してのさらに一歩進めた調査を実施しており、装飾古墳調査（昭和48年～49年度)、中世城調査[註5](昭和50～52年度)、条里制調査[註6](昭和50～51年度)、菊池川流域文化財調査[註7](昭和50～52年度)が終了している。

生産遺跡基本調査はこれらの一環として計画した事業で、その対象としてとりあえず製塩遺跡、製鉄遺跡、石器製作跡、須恵器窯跡、瓦窯跡、近世陶磁器窯跡を選定した。

これらの遺跡は主に山間部や海浜に立地しており、地上には何ら標識物がないため、人知れず破壊されてしまう恐れが大きく、現に消滅してしまった遺跡もかなりの数にのぼる。

また、台帳や遺跡地図に登載されていてもその所在が不明であったり、出土遺物や遺跡の年代、遺跡の現状等についての基礎資料が不足していた。

これらの不備を補い、基礎資料を作成して将来に資するというのが本調査の目的で、あわせて未登録遺跡の発見に努めた。

生産遺跡基本調査は国庫補助事業として実施し、遺跡数の関係から２カ年にわたり、53年度に製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作跡についての調査を実施した。54年度に須恵器窯跡・瓦窯跡・近世陶磁器窯跡について調査を実施する計画である。

註１　熊本県教育委員会『埋蔵文化財地名表』、昭和37年。

註２　文化財保護委員会『全国遺跡地図(熊本県)』、昭和41年。

註３　熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表(昭和51年度)』、昭和52年。

註４　昭和54年度、文化庁より出版の予定。

註５　熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』、熊本県文化財調査報告第30集、昭和53年。

註６　熊本県教育委員会『熊本県の条里』、熊本県文化財調査報告第25集、昭和52年。

註７　熊本県教育委員会『菊池川流域文化財調査報告書』、熊本県文化財調査報告第31集、昭和53年。

II　調査の組織

調査の組織及び調査関係者は下記のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	合志太助（前文化課長）
	岩崎辰喜（文化課長）
調査総括	隈　昭志（文化課文化財調査係長）
調査庶務	田中　繁（前文化課長補佐）
	真弓袈裟勝（文化課長補佐）
	望野正雄（文化課管理係長）
	石原昭宏（文化課主事）
調査員	松本健郎(文化課技師)、村上豊喜(文化課技師)、松村道博(文化課嘱託)、勢田広行(文化課嘱託)、白石巌(文化課調査員)
専門調査員	千藤忠昌（熊本大学理学部）
	近藤義郎（岡山大学法文学部）
	大迫靖雄（熊本大学教育学部）
	三島　格（福岡市教育委員会）
	下條信行（九州大学文学部）
	阿部堅二（八代東高等学校）
	大澤正己（北九州郷土史研究会）
調査協力者	荒尾市教育委員会・玉東町教育委員会・高森町教育委員会・南小国町教育委員会・宇土市教育委員会・三角町教育委員会・苓北町教育委員会・坂本村教育委員会・宇土高校・三角東小学校・住田　勇・福島作蔵・平島広幸・坂田幸之助・清田国弘・木庭春生・古財誠也・今村俊男・岩下時雄・佐藤惟典・高村辰雄・平山修一・高木恭二・緒方幸人・枝森久一・高瀬武光・永島正雄・富岡久夫・大仁田仁義・横尾泰則・盛高靖博・前田一洋・高木盛光・福岡弥彦・隈部民人・藤佐輝樹・法讃寺・平岡ヌイ・村上正人・橋本康夫・東弘典
遺物整理協力	上野辰男・山城仁恵（熊本県文化財収蔵庫）

専門調査員の先生方からは調査に関する指導を受け、同定、分析調査も依頼した。この成果は次年度報告書に収録する予定である。

現地踏査・発掘調査に際しては市町村教育委員会、各地の文化財保護委員の方、地元研究者

の援助を受けた。

遺物の整理作業は熊本県文化財収蔵庫で実施した。また、調査作業員として献身的な努力を果された諸氏、関連資料の調査に快く協力いただいた資料所蔵者の方に、ともに深謝する。

III　調査の概要

調査はまず地名表の作成から着手した。製塩遺跡・製鉄遺跡については、かって松本が作成した地名表[註1]を基に、『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表(昭和51年度)[註2]』、各市町村誌等を参照し、多くの方々の教示を受けながらリストアップに努めた。

この場合、どの範囲までを含めるかが問題となったが、一応次の基準を設けた。

① 製塩遺跡は土器製塩遺跡を対象とする。したがって、近世の塩田等は含まず、時期的には古墳時代～古代が中心となる。

② 製鉄遺跡は内容が多様であるが、遺跡の性格や年代をとくに限定せず、製鉄に関するものはできるだけ含める。ただし、明治以降の鍛冶関係のものについては除外した。したがって、性格的には製錬・精錬・鍛冶関係を包括し、年代も弥生時代から近世に及んだ。

③ 石器製作跡については、この種の遺跡が数少なく、10遺跡に満たないところからすべてを対象とした。この場合、岩陰や竪穴住居跡内等で付随的に石器の製作が行われているものも含めた。

地名表の作成が一段落したのち、現地踏査を実施した。現地踏査では位置や現状の確認、出土遺物等関連資料の調査、未登録遺跡の探索等を行った。この現地踏査には、地元の研究者や文化財保護委員、当該市町村教育委員会の多大な援助を受けた。

この踏査で、とくに製鉄遺跡については所在の確認さえ困難な遺跡もあり、中でも小岱山製鉄遺跡群では28遺跡中5遺跡が未確認のままである。このように、1遺跡の所在確認に2～3日を費してなお確認できない場合もあり、また遺跡数も当初計画より大幅に増加[註3]したため、全ての遺跡についての現地踏査は不可能であった。

地名表の作成、現地調査と並行して、発掘調査の細部計画を策定し、昭和53年10月～昭和54年1月にかけて4遺跡について発掘調査を実施した。発掘調査を実施したのは第1表のとおり

第1表　発掘調査一覧表

遺跡名	種別	所在地	調査期間	調査担当者	備考
1．柿迫遺跡	石器製作跡	阿蘇郡高森町	昭和53年10月4日～13日	松本健郎・松村道博	弥生時代の磨製石鏃製造遺跡
2．出来町遺跡	製塩遺跡	天草郡苓北町	昭和53年11月20日～28日	〃・〃	古墳時代製塩遺跡
3．今泉製鉄遺跡	製鉄遺跡	八代郡坂本村	昭和53年12月10日～21日	〃	近世たたら
4．柳迫遺跡	〃	宇土郡三角町	昭和54年1月9日～12日	〃・勢田広行	古代の製錬遺跡

である。これらの調査内容および成果については後で詳述する。

昭和54年1月中旬以降、調査資料の整理及び原稿執筆等の報告書作成作業を行った。

註1　松本健郎「熊本県の製塩遺跡」『ふるさとの自然と歴史』第57号、昭和51年。

松本健郎「熊本県の製鉄遺跡―研究の現状と課題」『たたらもと製鉄遺跡発掘調査報告書』、荒尾市文化財調査報告第2集、昭和53年。

註2　熊本県教育委員会『熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表(昭和51年度)』、昭和52年。

註3

種　別	当初の遺跡数	最終遺跡数	備　　考
製塩遺跡	8	10	参考地を含む
製鉄遺跡	60	112	
石器製作跡	5	9	
計	73	131	

第II章　遺跡の分布

I　製塩遺跡（第2表・第1図）

製塩遺跡の分布は当然のことながら海岸部に集中しているが、密度としては必ずしも高いものとはいえない。現在のところ、参考遺跡も含めて10遺跡が知られているが、宇土半島に5遺跡、大矢野島に2遺跡、下島に3遺跡と、3つのブロックに大別できる。宇土半島に所在するものは基部に位置するもの（松橋大野貝塚周辺・黒田遺跡）と先端部に位置するもの（大田尾遺跡・塩屋浦遺跡・小鹿里遺跡）に細分される可能性もあるが遺跡の詳細については不明な上、将来さらに遺跡数が増加する可能性も強く、現状では大まかな分類をしておいた方が妥当であろう。

これらの遺跡のうち、調査等で資料が整備されているのは大田尾・沖の原・出来町の3遺跡にすぎず、他は表採品や出土したという伝承で不確定な要素が多い。

県下の製塩遺跡については、坂本経堯・乙益重隆・隈昭志氏により注目され、さらに近藤義郎氏の調査・研究[註1]に発展した。また、松本もそれらの成果を踏まえて概括[註2]したことがあるが、将来に残す課題も多い。

註1　昭和39年、沖の原遺跡の発掘調査、大田尾遺跡の試掘調査。
近藤義郎「九州の製塩土器」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』、昭和40年。
近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。

註2　松本健郎「熊本県の製塩遺跡」『ふるさとの自然と歴史』第57号、昭和51年。

II　製鉄遺跡（第3表・第1図）

製塩遺跡ほどには地域が限定されることはなく、遺跡の多少を別にすれば、ほぼ県下全域にわたって分布している。しかし、その中での密集度をみると、小岱山周辺・宇土半島の大岳周辺に二大群集がみられ、しかも製錬遺跡と考えられるものの大半はこの両地域に密集し、その他の地域では点在するにすぎない。

これに対して、鍛冶遺跡と考えられるものは各地に散在するというように、遺跡の性格による分布の特性を見い出すことができる。

小岱山は県北に位置する標高501 mのなだらかな山である。地質的[註1]には白亜紀末から第三紀にかけて形成されたと考えられる花崗閃緑岩や花崗岩からなっている。山麓には多量の真砂(花崗岩バイラン土）が堆積して山麓扇状地を形成し、山肌は侵食されやすいため大小の起伏が多

い。

この小岱山の中腹から山麓にかけて28遺跡があり、これらを総称して小岱山製鉄遺跡群と呼ぶ。

小岱山製鉄遺跡群については、すでに昭和20年代後半に故坂本経堯氏が注目し、精力的な踏査・調査[註2]を実施され、同じく小岱山に分布する窯跡群の研究[註3]と並び、生産遺跡の調査・研究としては学史的にも特記されるべきであろう。その後三島格・田辺哲夫・田添夏喜・松村道博氏等の調査があり、松本は小岱山製鉄遺跡群の年代と性格を考察[註4]したことがある。

大岳（標高478 m）は宇土半島脊梁山地の主峰で、雄岳・三角岳とともに旧火山である。宇土半島の基層は姫浦層群と呼ばれる白亜紀層と古第三紀層からなり、これを大岳・三角岳を中心とした火山活動による安山岩類・凝灰岩類が不整合に覆っている[註5]。

大岳周辺、とくに南側中腹から山麓の丘陵にかけて製鉄遺跡群があり、総数で19遺跡を数える。これらの遺跡の発見は枝森久一氏の努力に負うところ大であるが、果樹園とくにミカン園造成等によって消滅してしまった遺跡が多い。

したがって、資料的には不明な点が多く、調査が実施されたのは柳迫遺跡[註6]1遺跡ということもあって判然としない部分も多い。ただ、製鉄の開始は小岱山製鉄遺跡群に先行する可能性もあり、残り少ない遺跡に対する保護策には万全を期すべきであろう。

上記2群の他には、三の岳と南小国町に製錬遺跡と考えられるものが3～5遺跡分布し、他は点在の状況である。

鍛冶遺跡の分布は、遺跡調査の頻度に比例している面もあり、今後遺跡数は増加の一途をたどるものと考えられる。

註1　岩本政教編『熊本の自然』、熊本日日新聞社、昭和52年。

註2　坂本経堯『肥後における製鉄遺跡の研究』第1編、プリント版、昭和28年。
　　坂本経堯「肥後上代の鉄」『熊本史学』第4号、昭和28年。

註3　坂本経堯『小岱山麓古窯址群調査報告』、プリント版、昭和29年。

註4　松本健郎「熊本県の製鉄遺跡―研究の現状と課題―」『たたらもと製鉄遺跡調査報告書』、荒尾市文化財調査報告第2集、昭和53年。

註5　林　行敏「宇土半島の地質」『宇土半島―自然と文化―』、宇土半島研究会、昭和50年。

註6　昭和31年、坂本経堯氏調査。今回再調査。

III　石器製作遺跡（第４表・第１図）

全般的に遺跡数が少なく、現状で分布の特性等を論じるのは早計にすぎようが、現時点での分布は県北に集中している傾向がある。

縄文時代の石器製作跡としては西合志町の二子山遺跡[註1]（国指定史跡）をはじめ、金峰山系の安山岩を利用した石器製作跡の一群がある。この一群は三の岳北麓に２遺跡（大谷遺跡・立岩遺跡）、黒石台地に２遺跡（二子山遺跡・太郎迫遺跡）がある。その他、縄文時代の石器製作遺跡に関しては、天岩戸岩陰遺跡での石器製作が報告[註2]されているにすぎない。

弥生時代の石器製作遺跡としては、磨製石鏃の製造遺跡が４遺跡（谷頭遺跡・前畑遺跡・柿迫遺跡・下永尾遺跡）あるが、いずれも阿蘇の外輪地区に位置している。

縄文時代の石器製作については二子山石器製作跡、弥生時代の磨製石鏃製作については谷頭遺跡[註3]の調査・報告によってその一端が解明されたとはいえ、全体的には今後に負う点が多い。

註１　三島格・隈昭志・古川博恭・井上兼利 他、『二子山石器製作址』、西合志町教育委員会、昭和46年。

註２　松本健郎「天岩戸岩陰遺跡」『菊池川流域文化財調査報告書』、熊本県文化財調査報告第31集、昭和53年。

註３　松村道博・島津義昭・柴尾俊介・瀬丸敬二『谷頭遺跡』、谷頭遺跡調査団、昭和53年。

第2表 製塩遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物	保存状況	備考	文献
1	大田尾遺跡	宇土郡三角町大田尾字仏天川・大川	貝塚・天草式製塩土器・土師器・須恵器・滑石製石鍋	△（果樹園）	昭和39年、近藤義郎氏試掘	①
2	松橋大野貝塚周辺	下益城郡松橋町大野字前田	縄文式土器・土偶・天草式製塩土器	△（道路・学校）	製塩土器は宇土高校蔵	②
3	黒田遺跡	宇土郡不知火町永尾字黒田	製塩炉？・天草式製塩土器？	△（果樹園）	昭和41年、坂本経堯氏調査参考遺跡	③
4	小鹿里遺跡	〃 三角町中村字金桁	製塩土器？	○（埋没）	参考遺跡	
5	塩屋浦遺跡	〃 〃 波多字塩屋浦	〃 ？・土師器・小型手捏土器	△（小学校）	〃	
6	串遺跡	天草郡大矢野町上字江後	天草式製塩土器脚部片・須恵器・石斧	不明		④
7	小波戸遺跡	〃 〃 上字小波戸	縄文式土器・石器・天草式製塩土器・土師器・須恵器	〃		⑤
8	中ノ尾遺跡	〃 五和町御領字中ノ尾	天草式製塩土器・土師器	○		
9	沖ノ原遺跡	〃 〃 二江字沖の原	〃 ・〃 ・須恵器	△（道路・宅地）	昭和39年、近藤義郎氏調査	①
10	出来町遺跡	〃 苓北町富岡字首塚	〃 ・〃 ・〃	△（宅地）	第Ⅲ章－Ⅰ参照	

第3表 製鉄遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
1	栗木谷遺跡	荒尾市上平山字栗木谷	○					△		
2	古川遺跡	〃 〃 字古川	○				焼土	△（水田）		
3	竜光寺遺跡	〃 〃 字東小松原	○				焼土	○	2地点あり スラグ分析→製錬滓	
4	古城谷遺跡	〃 平山字薬師上	○	○	○	○	柱穴・土師器・瓦器・砂鉄	△（道路）	県指定 スラグ分析→製錬滓	⑥⑦
5	薬師前遺跡	〃 〃 字薬師前	○	○				△（果樹園）	須恵器窯と複合	
6	松尾遺跡	〃 〃 字松尾	○	○				×（水田）	旧称上平山遺跡	

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
7	南山浦遺跡	荒尾市府本字南山浦	○	○		○		△（道路・果樹園）	須恵器窯と複合 2地点あり	⑥
8	山田遺跡	〃 〃 字山田	○					△（道路・畑地）		
9	前岳遺跡	〃 〃 字前岳	○	○				不明	所在不明	⑥
10	山の神A遺跡	〃 〃 字小代	○	○		○	焼土・瓦器・土師器	△（道路）		⑥
11	山の神B遺跡	〃 〃 〃	○	○				不明（埋没）		⑥
12	麻畠A遺跡	〃 〃 〃	○	○		○	炭灰層	○（きわめて良好）		⑥
13	麻畠B遺跡	〃 〃 〃	○				〃	○		⑥
14	斧磨（ちゅんとぎ）遺跡	〃 〃 〃	○				炭灰層・滑石製品	△（道路）	2地点あり	⑥
15	苑瓦音寺（かんのんじ）遺跡	〃 〃 字土井内	○	○		○	土師器・瓦器	△（道路）	スラグ分析→製錬滓	⑥
16	苔谷遺跡	〃 樺字小葉山	○	○				不明（消滅か）	所在不明	⑥
17	金糞谷遺跡	〃 〃字芦葉敷	○					〃	〃	⑥
18	たたらもとA遺跡	〃 〃字鑪納本	○	○	○	○	土師器・瓦器	△（道路・畑地）	スラグ分析→製錬滓	⑥⑧
19	たたらもとB遺跡	〃 〃 〃	○					△（水田）		⑥
20	金塚遺跡	〃 〃字榎原	○	○			瓦器	△（堂建設・水田）	スラグ分析→製錬滓	⑥
21	ごまのき遺跡	〃 金山字上焼石	○	○			木炭層	不明	所在不明	⑥
22	幸徳田遺跡	〃 〃 字幸徳田	○				〃	〃	〃	⑥
23	野原9号墳	〃 野原字山中					未完成刀身・鉄塊	×（学校）		⑨
24	野原八幡1号墳	〃 〃 字轟	○					×（宅地造成）	墳丘下よりスラグ出土	⑩
25	野原八幡4号墳	〃 〃 〃	○					〃		⑩
26	築地小代遺跡	玉名市築地字小代	○					不明		

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
27	斧砥遺跡	玉名市築地字斧砥	○	○		○	土師器	○	旧称築地上遺跡	
28	蛇ケ谷遺跡	〃 立願寺字小代	○	○		○	土師器・瓦器？	○	スラグ分析→製錬滓	⑥
29	広福寺裏遺跡	〃 石貫字仁田尾	○					△（道路）		
30	六反遺跡	〃 三ツ川字西原六反	○	○	○		土器	△（開墾）	県指定	
31	大谷遺跡	玉名郡南関町宮尾字大谷	○		○			不明		⑥
32	筧口鍛冶跡	玉名市石貫字刀研	○	○				○	石貫同田貫か？	
33	同田貫鍛冶跡	〃 亀甲字上畑	○	○				△（宅地）		
34	桜井川遺跡	〃 伊倉北方字西屋敷	○					×（宅地）	鍛冶遺跡か？	
35	鍛冶屋町遺跡	〃 伊倉南方字東屋敷	○	○				×（宅地）	〃	
36	下前原遺跡	玉名郡岱明町下前原字正林	○				鉄片・鉄器・焼土	△（畑地）	6号竪穴住居跡、弥生後期、スラグ分析→製錬滓？	⑪
37	蘆嶽城	〃 南関町関東字城平	○					△（公園）	中世山城	⑫
38	むくろじ遺跡	〃 玉東町原倉字荒強当	○	○		○	土師器	○	平安時代 スラグ分析→製錬滓	
39	金糞谷遺跡	〃 〃 〃 字藤原	○		○		土師器	○	平安時代	
40	釜の口遺跡	〃 〃 〃 字小場	○	○			焼土	△（果樹園）		
41	西原遺跡	〃 〃 〃 字西原	○				木炭層	○		
42	太郎丸権現山遺跡	〃 〃 上白木字太郎丸	○	○				△（畑地）		
43	西安寺寺中尾遺跡	〃 〃 西安寺字寺中尾	○					×（水田）		
44	清原石人遺跡	〃 菊水町江田字清原	○					△（畑地）	鍛冶遺跡か？	⑬
45	諏訪原遺跡	〃 〃 〃 字諏訪原	○				鉄器・鉄片・焼土	×（道路）	弥生後期～古墳時代初頭 スラグ分析→鍛冶滓	⑭
46	慈恩寺経塚古墳	鹿本郡植木町米塚字井川平	○					○	墳丘上採集	

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
47	有泉遺跡	鹿本郡植木町有泉	○				焼土塊	×（圃場整備）	鍛冶遺跡か？	
48	鞍掛山城	〃 〃 鞍掛字萩尾	○					△（神社・宅地）	中世館跡	⑫
49	梶屋遺跡	〃 鹿本町梶屋	○	○				△（水田）	鍛冶遺跡か？	
50	隈部館跡	〃 菊鹿町上永野	○					○		⑫⑮
51	鬼木鍛冶跡	菊池郡泗水町永字樋通	○					△（水田）	刀鍛冶か？	⑯
52	たたらもと遺跡	阿蘇郡南小国町満願寺字黒川	○			○		×（開墾）	周辺に砂鉄多し	⑥
53	金山遺跡	〃 〃 〃 字金山	○	○				×（水田）		⑥
54	滝の下遺跡	〃 〃 中原字滝の下	○					不明	所在不明	⑥
55	下南部遺跡	熊本市下南部町字北請	○					×（宅地）		
56	上の園遺跡	〃 竜田町陣内字上の園	○					×（宅地）		
57	高橋南貝塚	〃 高橋町字上高橋	○	○				×（河川改修）	13世紀 スラグ分析→判定保留	⑰
58	上平山遺跡	〃 松尾町字平山	○							⑱
59	馬水遺跡	上益城郡益城町馬水字駿河原	○	○			炉床・青磁・土師器	△（宅地）	近世たたら	
60	沈目立山遺跡	下益城郡城南町沈目字立山	○	○			鍛冶炉	×（道路）	平安中期 スラグ分析→鍛冶滓	⑲
61	丸山3号墳	〃 〃 塚原字丸山					鉄鉗・土師器・須恵器	○	国指定	⑳
62	浜の館跡	上益城郡矢部町城平字東前田	○				青磁・染付・土師器・鉄釘他	×（学校建設）	戦国時代（15〜16世紀）	㉑
63	岩尾城	上益城郡矢部町城平字本丸・二の丸	○					△（公園）		
64	宇土城	宇土市古城町	○	○				○	ふいごの羽口には砂岩製と土製あり	
65	西岡台（宇土古城）遺跡	〃 神馬町	○	○			土師器・染付・瓦質土器他	○	ふいごの羽口には凝灰岩製と土製あり	㉒
66	神合遺跡	〃 神合町		○				不明	甚七の刻銘あり	

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
67	鑪鞴平遺跡	宇土市網田町字鑪鞴平	○					不明		㉓
68	上床遺跡	〃 下網田町字上床	○	○				〃		㉓
69	元米ノ山遺跡	宇土郡不知火町長崎字浦田					鉄塊（スラグ）	〃		③
70	五田田遺跡	〃 〃 永尾字五田田	○				須恵器・須恵質土器	△（果樹園・畑地）		
71	たたらん平遺跡	〃 〃 〃 字川添	○					×（水田）		
72	石だたみ遺跡	〃 〃 大見字角石	○	○				○		③
73	川原遺跡	〃 〃 〃 字刎持篭	○	○				不明		③
74	はねもっこ遺跡	〃 〃 〃 字神の元	○	○				×（果樹園）		③
75	山田遺跡	〃 三角町郡浦字道芳木	○					不明		
76	たたらん迫遺跡	〃 〃 〃 字城山	○					×（開墾）		
77	城山遺跡	〃 〃 〃 〃			○			×（道路）		
78	なぎさこ遺跡	〃 〃 〃 字宮ノ脇	○	○				×（果樹園）		
79	平野遺跡	〃 〃 〃 字平野	○					△（宅地・水田）		
80	湯殿遺跡	〃 〃 〃 字上湯殿	○					不明		
81	北平遺跡	〃 〃 〃 字北平	○	○				×（開墾）		
82	官迫遺跡	〃 〃 中村字大平	○				炭灰層・須恵器	○		
83	古郷池遺跡	〃 〃 〃 字段源田	○					不明		
84	中河原遺跡	宇土郡 〃 〃 字中河原	○					×（道路・果樹園）		
85	柳迫遺跡	〃 〃 〃 字柳迫	○	○	○	○	土師器	○	スラグ分析→製錬滓 平安時代	㉔
86	千房遺跡	〃 〃 郡浦字千房	○					×（果樹園）		

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
87	打越貝塚	宇土郡三角町郡浦字打越平	○				弥生式土器・土師器・須恵器・青磁	不明		
88	道の峯遺跡	〃 〃 戸馳本村字道の峯	○	○				×（道路・畑地）		
89	斧研遺跡	天草郡五和町二江字斧研川	○					不明		
90	嵐口鞴遺跡	〃 御所浦町字鞴	○	○			土師器	△（畑地）		㉕
91	稲川遺跡	下益城郡小川町東小川字稲川		○						
92	浄円寺遺跡	〃 〃 南海東字小園水森	○						刻銘あり（甚七か？）	㉖
93	高塚遺跡	八代郡竜北町高塚		○				×（宅地造成）	7本中5本に甚七の刻銘あり	
94	境遺跡	八代市岡町小路字境	○				鍛冶炉	×（道路）	中世末～近世初期	㉗
95	平原遺跡	〃 〃 〃 字平原	○					〃		㉗
96	清水古墳	〃 岡谷川字清水	○	○				〃		㉗
97	興善寺四郎丸遺跡	〃 興善寺町字四郎丸	○	○				〃		㉗
98	興善寺馬場遺跡	〃 〃 字馬場	○	○				〃	甚七の刻銘のあるものあり	㉗
99	興善寺志水遺跡	〃 〃 字志水	○	○				〃		㉗
100	春光寺裏遺跡	〃 古麓町	○					×（墓地）		
101	中宮山吾慎寺跡	〃 妙見町	○					△		
102	丸山遺跡	〃 敷川内町字丸山	○			○		×（果樹園）	炉壁片に羽口のスタンプあり	
103	今泉製鉄遺跡（八代鉄山跡）	八代郡坂本村西部ろ字鉄山	○		○		砂鉄・木炭・鉄釘	○	本床・小舟等の炉床完全に遺存、近世たたら	
104	人吉城	人吉市麓町				○		○		
105	無田原遺跡	球磨郡錦町西字無田原	○	○			木炭	△（畑地）	ふいごの羽口は凝灰岩製	㉘
106	一武横山遺跡	〃 〃 一武字横山	○					不明	弥生遺跡・スラグ表採	㉘

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物					保存状況	備考	文献
			スラグ	ふいごの羽口	炉体	炉壁片	その他			
107	蓮花寺跡	球磨郡多良木町黒肥地字蓮花寺	○	○			焼土・青磁・白磁他	△（河川改修）	スラグ分析→鍛冶滓	㉙
108	相良頼景館跡	〃 〃 〃 〃	○	○			青磁・白磁・土師器他	△（河川改修）	ふいごの羽口には凝灰岩製・砂岩製・土製あり、スラグ分析→鍛冶滓	㉙
追加109	蓮華院浄光寺	玉名市築地	○	○			土師器・須恵器・青磁他	△（寺院再建）		
110	迎遺跡	球磨郡球磨村毎床字迎	○					不明	スラグ表採	㉘
111	浄泉寺	〃 湯前町貫杭	○					△（寺院）		㉘
112	高山城南麓	〃 深田村東字高山	○					不明		㉘

第4表 石器製作跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構・遺物	保存状況	備考	文献
1	二子山石器製作跡	菊池郡西合志町野々島字天神免	打製石斧・十字形石器・母岩・工作台・工具・石材・石屑・縄文式土器	○（国指定）	石器は未製品も含む	㉚
2	大谷遺跡	玉名郡玉東町原倉字大谷	打製石斧・十字形石器・石材・石屑	△（国有林・果樹園）	〃	
3	立岩遺跡	〃 〃 〃 字立岩屋敷	〃 ・ 〃 ・ 〃 ・ 〃	△（果樹園）	〃	
4	大郎迫遺跡	飽託郡北部町太郎迫字本村屋敷	縄文式土器・石器類	△（道路）		
5	天岩戸岩陰遺跡	鹿本郡菊鹿町山内字鶴次郎	縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・骨角器・原石・石器未製品・石屑	○	昭和51年県教委調査	㉛
6	谷頭遺跡	阿蘇郡西原村河原字谷頭	住居跡・木棺墓・弥生式土器（黒髪式）・磨製石鏃・同未製品・石包丁・同未製品・砥石・石材・石屑	×（ゴルフ場）	昭和51年谷頭遺跡調査団調査	㉜
7	前畑遺跡	〃 高森町芹口字前畑	弥生式土器・磨製石鏃未製品	不明	採集品	㉝
8	柿迫遺跡	〃 〃 〃 字中原	磨製石鏃未製品・押型文土器・石鏃	×（削平）	昭和53年県教委調査	
9	下長尾野遺跡	〃 産山村下長尾野	磨製石鏃未製品	不明	採集品	

参 考 文 献

① 近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。

② 髙木恭二氏教示。

③ 坂本経堯「古代の生産」『不知火町史』、昭和47年。

④ 阿部堅二・今井義量・三島格 他「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号、昭和52年。

⑤ 松本健郎「熊本の製塩遺跡」『ふるさとの自然と歴史』第57号、昭和51年。

⑥ 坂本経堯『肥後における製鉄遺跡の研究』第1編、プリント版、昭和28年。

⑦ 田添夏喜「肥後のたたら製鉄の1例」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』、昭和52年。

⑧ 平島広幸・松村道博・松本健郎『たたらもと製鉄遺跡調査報告書』、荒尾市文化財調査報告第2集、昭和53年。

⑨ 坂本経堯『荒尾野原古墳』、プリント版、昭和28年。

⑩ 松本健郎「野原八幡古墳群調査概報」『玉高考古学部報』第31号、昭和48年。

⑪ 田辺哲夫・田添夏喜「ベッドを有する弥生末期の方形竪穴住居址群」『日本考古学協会第19回総会研究発表要旨』、昭和32年。

⑫ 大田幸博 他『熊本県の中世城跡』、熊本県文化財調査報告第30集、昭和53年。

⑬ 髙木正文氏教示。

⑭ 緒方勉「諏訪原遺跡調査概報」『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』、昭和46年。
緒方勉「諏訪原遺跡出土遺物」『熊本史学』第37号、昭和45年。

⑮ 桑原憲彰「戦国期の有力国衆の館跡」『ふるさとの自然と歴史』第66号、昭和51年。

⑯ 坂本経堯『泗水町誌』、昭和40年。

⑰ 菊池泰二・大澤正己・大迫靖雄・木村幾多郎・松本健郎『高橋南貝塚』、熊本県文化財調査報告第28集、昭和53年。

⑱ 熊本市教育委員会『熊本市西山地区文化財調査報告書』、昭和44年。

⑲ 緒方勉・斉藤林次『沈目立山遺跡』、熊本県文化財調査報告第26集、昭和52年。

⑳ 野田拓治 他『塚原』、熊本県文化財調査報告第16集、昭和50年。

㉑ 桑原憲彰・阿蘇品保夫・大澤正己 他『浜の館－阿蘇大宮司居館跡－』、熊本県文化財調査報告第21集、昭和52年。

㉒ 富樫卯三郎・髙木恭二・平山修一・阿蘇品保夫 他『宇土城跡(西岡台)』、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、昭和52年。

㉓ 富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』、宇土半島研究会、昭和50年。

㉔ 長谷川熊彦・和島誠一「たたら製鉄鉱滓の研究」『資源科学研究所集報』第68号、昭和42年。

㉕ 坂本経堯『天草・御所浦－自然と人文－』、昭和45年。

㉖ 村井真輝・髙木正文氏教示。

㉗ 熊本県教育委員会『熊本の文化財調査』第2号、昭和53年。

㉘ 前田一洋氏教示。

㉙ 杉村彰一・松村道博・松本健郎 他『蓮花寺跡・相良頼景館跡』、熊本県文化財調査報告第22集、昭和52年。

㉚ 三島格・隈昭志・古川博恭・井上兼利 他『二子山石器製作址』、西合志町教育委員会、昭和46年。

㉛ 松本健郎「天岩戸岩陰遺跡」『菊池川流域文化財調査報告書』、熊本県文化財調査報告第31集、昭和53年。

㉜ 松村道博・島津義昭・柴尾俊介・瀬丸敬二『谷頭遺跡』、谷頭遺跡調査団、昭和53年。

㉝ 長山源雄「磨製石鏃の材料を容れたる弥生式土器」『人類学雑誌』44－2、昭和4年。
森本六爾『日本青銅器時代地名表』、昭和4年。

第Ⅲ章　発掘調査の記録

Ⅰ　出来町遺跡

1．位置と環境（第２図）

熊本県の西南方に点在する天草諸島は、大矢野島・上島・下島を中心として多くの島々から成っている。これらの中で、最も面積が大きく、しかも最も西方に位置するのが下島である。

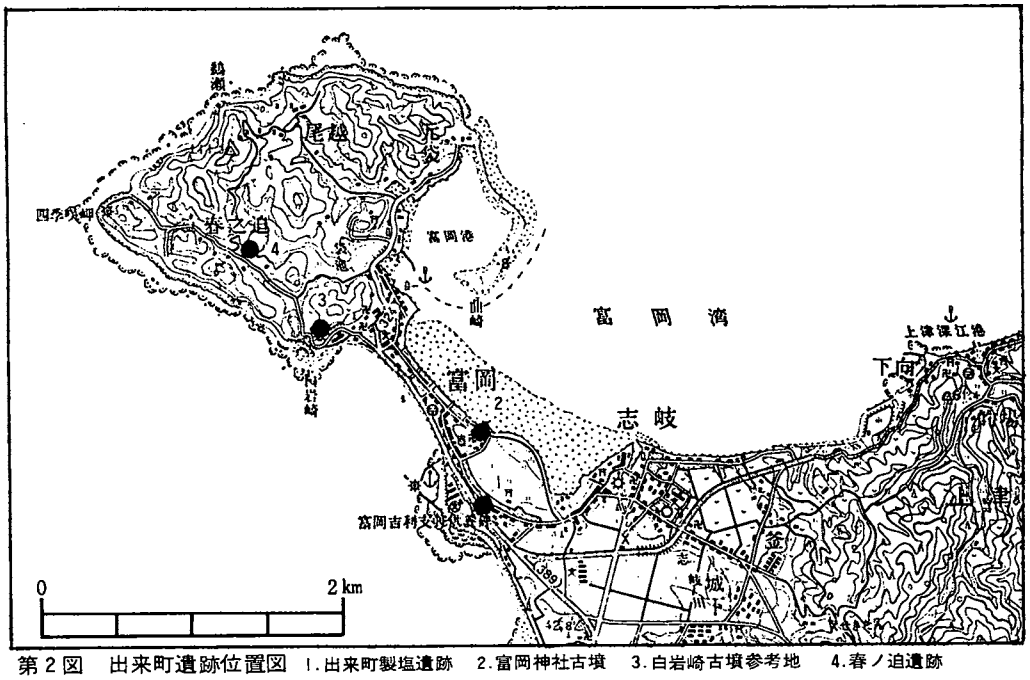
出来町製塩遺跡は、この下島の西北端の富岡半島に位置する。所在地は天草郡苓北町大字富岡字首塚である。遺跡地一帯は一般に出来町と呼ばれているところから、遺跡名は出来町遺跡としている。

遺跡の所在する富岡半島は陸繋島であり、遺跡はその基部近くの標高４～５ｍの砂丘に形成されている。

遺跡の西南には標高14～16ｍの丘陵があり、その西北部に県立水産高校がある。遺跡はこの丘陵の北東部に形成された砂丘上にある。この丘陵の南側海岸は岩礁の多い磯となっている。北側の富岡湾側は比較的穏やかで、やや遠浅の砂泥地となっている。

遺跡の北側は轟新田と呼ばれ、天保10年（1839）に完成した干拓地[註1]である。

昭和26年10月、ルーズ台風によって轟新田の堤防が決壊し、海水は干拓地に流入し、遺跡の



第２図　出来町遺跡位置図　1.出来町製塩遺跡　2.富岡神社古墳　3.白岩崎古墳参考地　4.春ノ迫遺跡

ある砂丘の北東端まで及んだ[註2]という。

富岡半島における古代の遺跡は半島基部の志岐地区を除けば顕著ではなく、出来町遺跡とその西北方にある富岡神社古墳、春の迫遺跡、白岩崎古墳参考地がある程度で、その他黒曜石等の散布は見られるものの遺跡は確認されていない。

富岡神社古墳は富岡湾に臨む丘陵上に位置し、もと2基あったと伝える。その一帯は富岡神社の境内となっており、古墳は破壊され、わずかに1基がその残骸を止めているにすぎない。2号墳の石室は社殿の下に埋め込まれ、1号墳も石室下部の石積みが残されているが、積みかえられたもので本来の姿を止めていない。現在、石室プランは円形に近く積まれているが、羨道を備えており、横穴式石室であったことは推察に難くない。出土品として鉄器・土師器があったというが散逸してしまっている。

昭和45年、遺跡地に電話柱を埋設する際、数点の製塩土器が出土し、このうちの1点が町教育委員会に届けられ、富岡城跡にある苓北町郷土資料館に展示されている。これが遺跡発見の端緒となった。

このことによって、当該地に製塩遺跡が存在する可能性が指摘[註3]されていたが、遺物包含の状況、遺構の有無、遺跡の範囲・年代等については不明であった。さらに、当該地一帯にはかなりの商店・民家が建てこんでおり、今後の建築等も予想されるところから、上記の問題点を明らかにし、基礎資料を作成するための確認調査を実施することになった。

2．調　　査

(1) 調査の概要

調査は昭和53年11月20日～28日に実施した。

当該地一帯は商店・民家が密集しており、一部は畑地となっている。したがって、掘開は民家の庭先や休閑地を選ばざるを得ず、発掘地点は自ずから限定され、発掘面積も制約を受けた。

調査にあたり、苓北町教育委員会・苓北町文化財保護委員会・県立水産高校・肥後銀行富岡支店・大仁田仁義・横尾泰則氏の援助を受け、土地所有者・管理者の方々の協力があった。

(2) 発掘区と層序

発掘を実施した地点は第3図に示すとおり10カ所で、発掘した延面積は23.68 m²である。

発掘区の呼称は、地籍図による地番を頭に冠し、同一地番内でA・Bを付し、さらに遺物注記等は層位を加えて表示した。(例、3663－A－3→3663番地A区3層、3665－2－B－2→3665番地の2・B区2層)

各発掘区の大きさと出土遺物は第5表に示すとおりで、ほとんどの発掘区から遺物が出土し

第5表　発掘区別遺物出土数

発掘区名	規模（m）	層位	遺物	備考
3663−A	1.5×1.5	3層	製塩土器脚部片（3）	肥後銀行駐車場
3665−2−A	0.7×1.6	3層	土師器片（15）、製塩土器脚部片（250）、製塩土器埦部片（約100）	
3665−2−B	0.9×0.9	3層	土師器片（16）、須恵器片（2）、製塩土器脚部片（41）、製塩土器坏部片（約10）	
3661−2−A	1.0×1.5	3層	土師器片（15）、製塩土器脚部片（8）	
3659−A	1.5×2.0	1層	土師器片（8）、陶器片（4）、磁器片（3）、管状土錘（4）	陶器片のうち1点は小代焼
		2層	土師器片（14）、須恵器片（1）	土師器片のうち3点は赤色顔料塗布
		3層	土師器片（19）、須恵器片（3）、製塩土器脚部片（3）	
3660−A	2.0×2.0	2層	土師器片（7）	
		3層	土師器片（6）、須恵器片（4）、製塩土器脚部片（3）、製塩土器埦部片（1）	
3665−1−A	1.5×2.0	2層	瓦器片（1）	
		3層	土師器片（3）、須恵器片（2）、製塩土器脚部片（5）	
3671−2−A	1.5×2.0	2層	青磁片（1）、須恵質土器片（2）、土師質土器片（1）、陶器片（2）	土師質土器は土鍋片
		3層	土師器片（38）、須恵器片（9）、製塩土器脚部片（1）、製塩土器埦部片（2）	土師器片のうち3点に赤色顔料塗布
3674−2−B	1.0×2.0		無遺物	
3674−2−A	1.5×2.0	1層	縄文式土器（1）、土師器片（4）、須恵器片(1)陶器片（8）、磁器片（3）、鉄片（1）	土師器片のうち2点は糸切り底
		3層	土師器（1）、須恵器転用土製品（1）、製塩土器脚部片（1）	
表採	—	—	土師器（19）、須恵器片（1）、製塩土器脚部片（1）	

た。さらに、製塩土器と土師器・須恵器が伴出し、遺跡の年代推定に重要な手がかりを得ることができた。

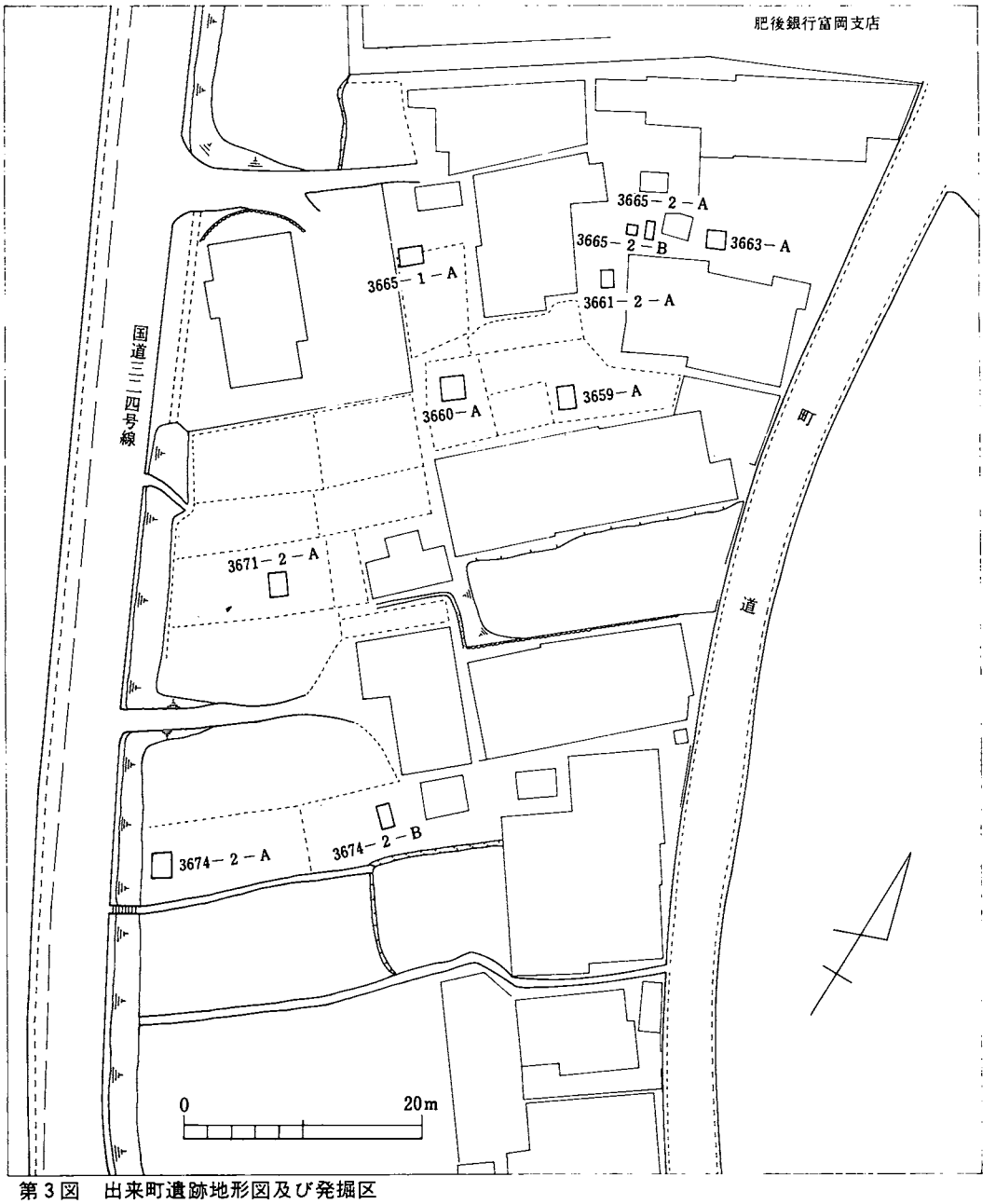
発掘面積が少ないこともあって、発掘した範囲では住居跡・製塩炉等の遺構はなかった。

発掘区の層序はほぼ共通の層序がみられる（第4図)。

第1層は有機質を含んだ黒褐色砂質土で、耕作地の場合は耕作土となる。第1層には近・現代の陶磁器片や管状土錘・鉄片等を含み、土師器片・須恵器片も含まれる。

第2層は褐色の砂層で、遺物は全体的に少ない。土師器片・須恵器片の他に青磁片・瓦器片・須恵質土器片（甕・摺鉢)・土師質土器片等を出土し、第2層の形成は中世である可能性が強い。

第3層は黒褐色の砂層で、製塩土器・土師器・須恵器を包含する古墳時代後期の包含層である。包含層の厚さは地点によって異なるが、厚い所では約45cm、薄い所では約15cmを測る。



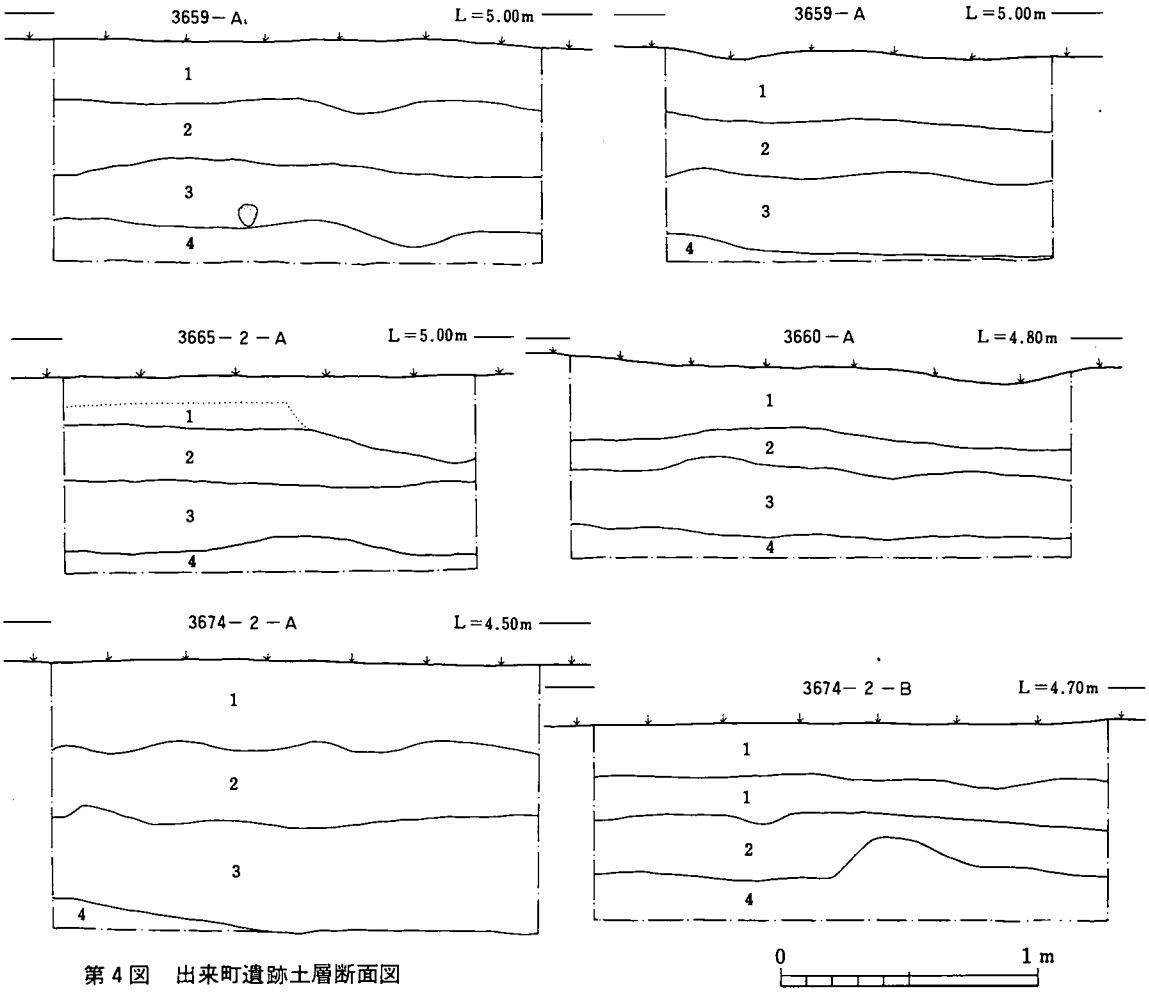
第3図　出来町遺跡地形図及び発掘区

第4層は褐色の砂礫層で無遺物である。第4層の礫は5㎝未満の小円礫で、下部になるにしたがって礫が多く、砂粒も大きくなる。

以上の層序がほぼ基本的なものであるが、部分的には第3層が欠落する発掘区（3674－2－B）や攪乱がみられる。

(3) 遺　　物

10カ所の発掘区のうち、無遺物であったのは3674－2－B区のみで、他は多少の差はあるが



第４図　出来町遺跡土層断面図

遺物を出土している。最も濃密に出土したのは3665－２－A区と3665－２－B区で、前者からは約250点、後者からは約50点の製塩土器を出土した。これらの製塩土器は２～３重に重なり、脚部の破損品が主体で、埦部破片もみられるが細片のみで量もきわめて少ない。この両発掘区の中間に立てられている電話柱が遺跡発見の発端となったものである。

遺物で最も古いものは縄文式土器で、古墳時代後期、中世、近・現代のものがあるが、製塩土器を含めた古墳時代後期のものが主体である。

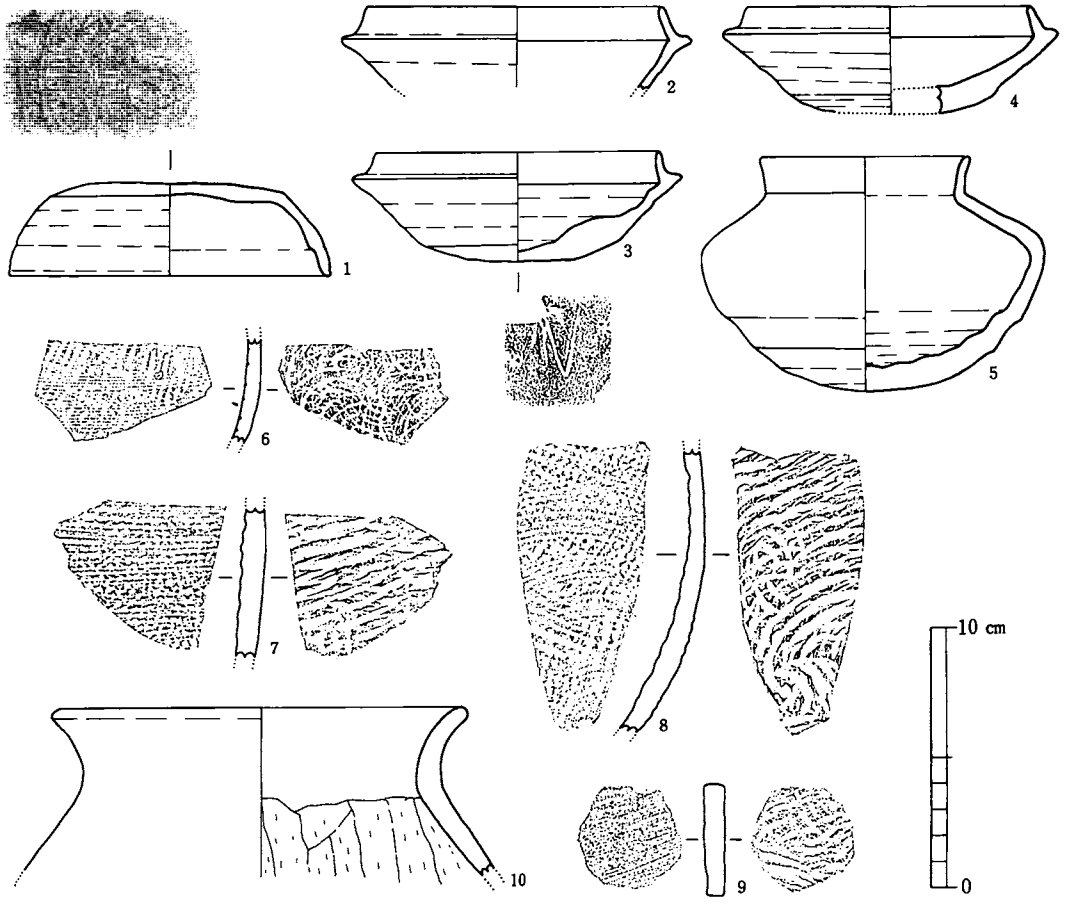
イ．縄文式土器

２×1.5㎝程の細片で図示できないが、胎土や焼成からみて縄文時代後期頃のものと考えられる。器形等詳細は不明である。

ロ．土　師　器（第５図10）

製塩土器に次いで量が多いが、細片が多く、細部については不明な点が多い。器形としては甕・高坏・盌がみられる。高坏の中には赤色顔料を塗布したものが６点ほど含まれている。

第５図10は3660－A区３層出土の甕で、復原口径16.1㎝を測る。胴部径より口径が小さく、



第５図　出来町遺跡出土土師器・須恵器実測図

器壁は厚い。胴部外面は刷毛目調整と考えられるが、煤が付着して不明である。胴部内面はヘラ削り調整。

ハ．須　恵　器（第５図１～９）

器形としては蓋坏・短頸壺・甕があるが、量は少ない。

坏蓋（１）は、天井部がヘラ削りされているため、体部との境はわずかに角ばる。口唇部内面の有段もなく、全体に丸味をおびる。胎土・焼成は比較的良いがひずみがある。口径12.4㎝・器高3.5㎝を測り、天井部にヘラ記号を有する。3660－Ａ－３出土。

坏身はすべて立上りが内傾し短い。３・４の底部は荒いヘラ削りで、全体に整形が雑である。２は復原口径11.6㎝、３は口径11㎝、器高4.2㎝、４は口径10.9㎝、器高（推定）4.1㎝を測る。２は３・４に比べると整形も良く、立上りもやや高いが、時期差を示す程のものではないと考えられる。３にはＮ字状のヘラ記号がある。２は3671－２－Ａ－３、３・４は3660－Ａ－３の出土である。

短頸壺（５）は口縁部をわずかに欠くのみでほぼ完形に近い。口縁部は約1.5㎝の高さで、わずかに外反する。体部は肩が張り、丸底の底部へと続く。底部はヘラ削りされている。口径８

cm、体部最大径13.1cm、器高9cmを測る。3659－A－3出土。

甕（6～8）は破片のみが出土した。外面は叩き目の上を横ナデされており、内面には青海波がつくもの（6）、平行叩き目のもの（7）、その両者が並用されているもの（8）がある。6～8は3671－2－A－3　出土。

9は須恵器の甕の破片を加工した土製品で、円盤状に周囲を打ち欠いている。4.1×4.3cmの大きさを測る。3674－2－A－3出土。

ニ．製塩土器（第6・7図）

出土した遺物の中で量的に最も多いが完形品は1点もなく、大半は脚部の破片で、椀部の破片はきわめて少ない。

出土した製塩土器は近藤義郎氏によって設定された天草式製塩土器[註4]で、棒状の細長い脚部と口縁部の内傾する椀部とからなり、脚底はラッパ状に開く。

脚部の製作は、片手の中で握るようにして粘土塊を棒状に延ばし、他の一方の親指の指頭で脚底部を押し拡げて大まかな形を作り、のち指ナデやナデ気味のヘラ削りによって整形を施したものと考えられる。

第6表　製塩土器計測表

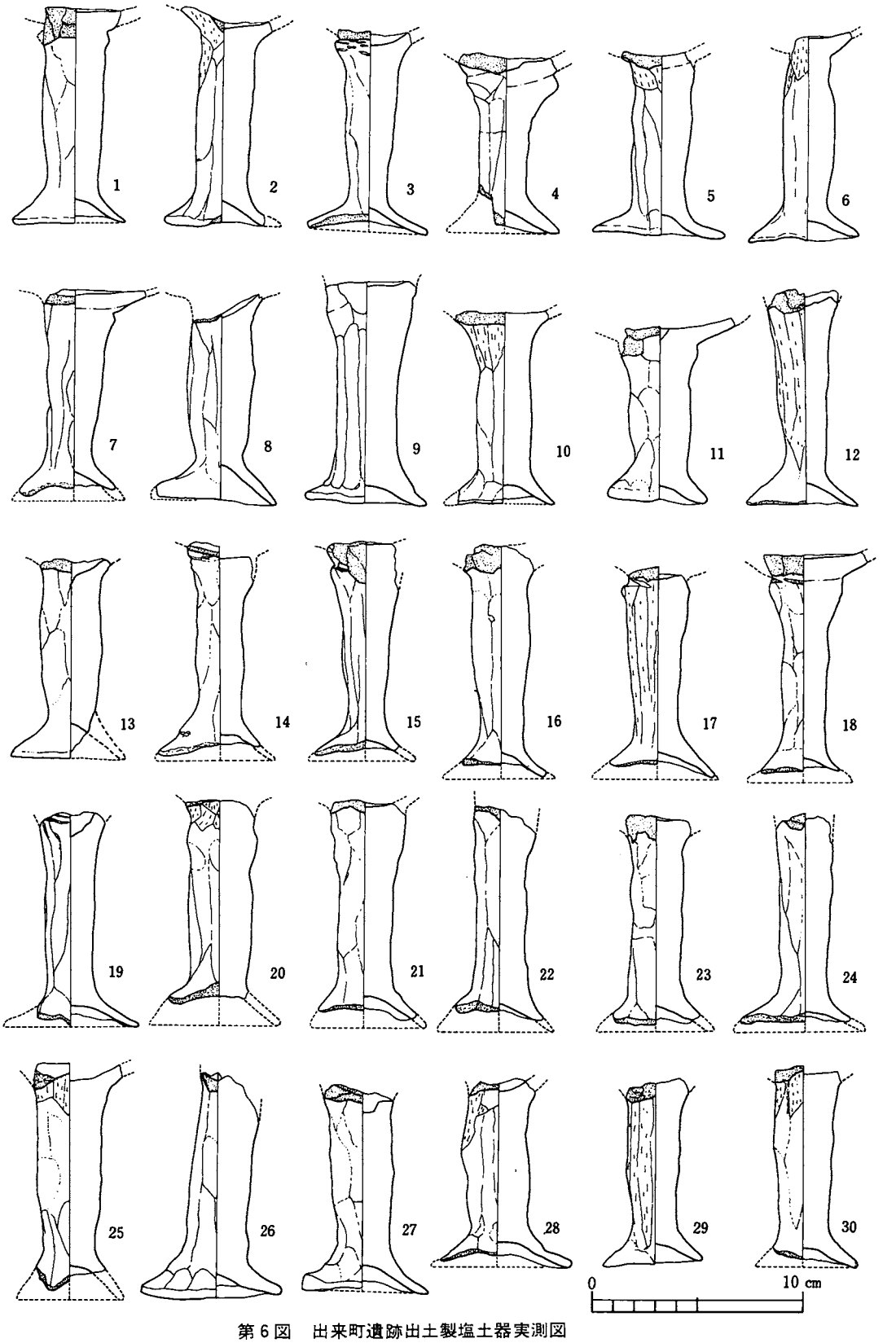
実測図番号		脚高	脚径（上）	脚径（下）	脚底径
第6図	1	91	30	26	54
	2	83	26	25	(56)
	3	88	26	19	58
	4	(74)	42	28	(55)
	5	82	29	26	64
	6	87	(20)	21	53
	7	(90)	34	22	—
	10	86	27	25	(54)
	11	75	(38)	25	48
	14	(95)	—	21	—
第7図	50	(72)	25	17	—
	51	(70)	25	17	40
	52	(65)	—	23	—
平均値		81.38	29.27	22.69	53.55

備考：単位はmm，（　）内は復原値

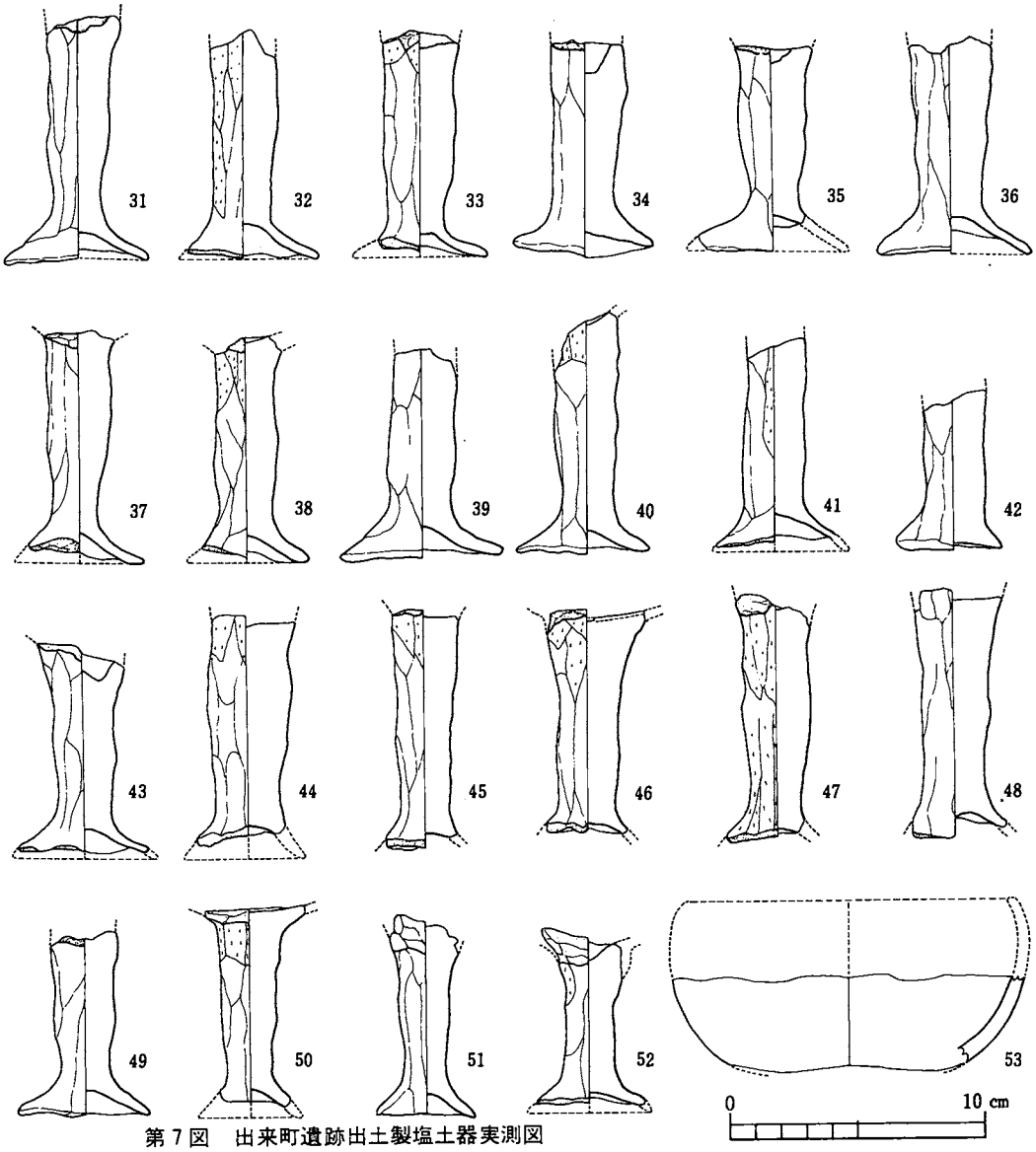
椀部は別個に作ったものを脚部と接合しており、その接合状態の観察できる資料が数点みられる。その際、近藤氏の指摘にあるとおり、接目の部分は粘土で補強され、のち下から上に向けてヘラ削りが行われている。

出来町遺跡で出土した椀部の破片は細片が多く、器形を復原できる資料はないが、大田尾遺跡・沖の原遺跡出土例に類似した形態をとるものと考えられる。

脚部にも各個体による器形の相違がみられるとおり、椀部にもかなりの個体差があるものと考えられる。とにかく、須恵器・土師器にみられるような画一性はみられない。このことは、これらの製塩土器が専門工人の製作によるもの



第６図　出来町遺跡出土製塩土器実測図



第７図　出来町遺跡出土製塩土器実測図

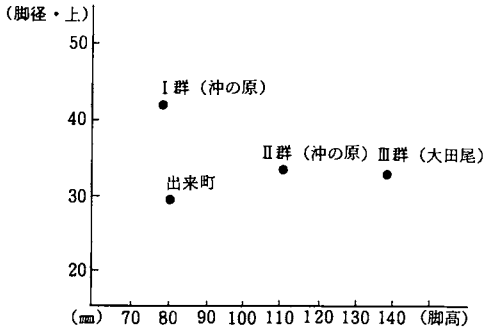
ではなく、製塩集団内で自給的に製作された可能性を考えさせる。

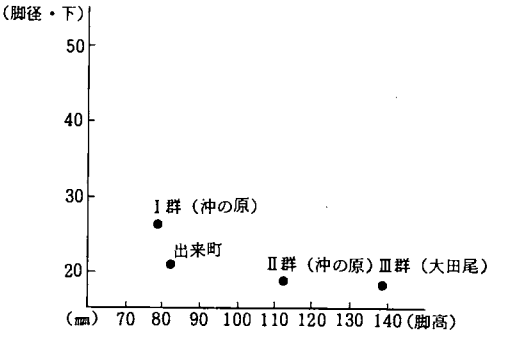
出土した製塩土器には脚部片・椀部片とも多くの砂粒を含み、雑な整形である。また大半は二次熱によるものと考えられる変色があり、色調は一定ではない。

大田尾遺跡・沖の原遺跡出土の製塩土器は、脚部の高・径により３群に分類されている。比較のため、出来町遺跡出土品の計測値を第６表に示すが、出土した個体数の割には測定可能な資料が少ない。とくに脚高を測定し得るものが少ないが、観察所見とあわせて一応の比較資料とはなろう。

大田尾遺跡・沖の原遺跡において分類された製塩土器第Ⅰ群は、太く短い脚部で、脚高平均値は7.89㎝、大部分は７.５～８.５㎝の範囲に含まれ、沖の原遺跡出土の一群で大田尾遺跡には

第7表　製塩土器計測値の比較





出土していない。第II群は、沖の原出土品のうち第Ⅰ群とは異なるもので、脚高平均値は11.23㎝、大部分が10.5～12.5㎝の範囲に含まれ、第Ⅰ群と比較すると細く長い点に特徴がある。第III群は大田尾遺跡出土のもので、第II群よりさらに細長くなり、脚高平均値は13.92㎝を測り、高・径ともに斉一性が強いとされている。

大田尾・沖の原・出来町遺跡における計測平均値の比較は第7表のとおりである。これでみると、出来町遺跡の脚高は第Ⅰ群よりわずかに大きな数値を示し、脚径（上）を除けば第II群・第III群よりも第Ⅰ群に近い数値を示している。

これらの群別は、第Ⅰ群から第II群への変遷、第II群と第III群は地域（集団）差であろうとされている。

すなわち、第Ⅰ群と第II群の出土層位の検討から第Ⅰ群が第II群に先行するものとみ、第II群・第III群と伴出した須恵器が同一型式であり、型式学的な第II群と第III群の類似性から、その差は地域（集団）差であるとの結論が出されている。

第Ⅰ群の年代は須恵器A類の時期以降須恵器B類の早い時期に出現し、第II群・第III群は同一年代で、須恵器B類の出現時もしくはその時期に成立し、あるいはC類の時期に至るまでの時期とされている。

さて、出来町遺跡の製塩土器の位置づけは、以上の大田尾・沖の原遺跡での調査成果と相容れない要素を含んでいる。すなわち、型式学的には第Ⅰ群に類似しているけれども、年代的には第II群・第III群に近く、出土した須恵器をみるとむしろ第II群よりわずかに後出するものと思われる。すなわち、第Ⅰ群の年代をやや新しく考えざるを得ないのか、それとも、第II群・第III群へとの長脚化の傾向の中で、出来町遺跡では旧態のまま出現してくるのか、判断に苦しむところである。

3．小　　結

前述したように、今回の調査の目的は、遺物包含の状態・遺構の有無・遺跡の範囲・年代についての基礎資料を作成することにあった。

遺物の包含状態については、10カ所の発掘区のうち9カ所から遺物を出土し、その概要を知ることができた。

遺跡の主体となる古墳時代後期の包含層は第3層とした黒褐色の砂層で、概ね地表下40～90cmにある。この層に含まれる遺物は土師器・須恵器・製塩土器である。土師器・須恵器を生活遺物とし、塩生産のための製塩土器と対比してみると、地点によってその相対的な比率が異なり、また製塩土器がきわめて多量に出土する地区も限定されるようである（第5表）。

すなわち、製塩土器が多量に出土したのは3665－2－A区と3665－2－B区で、仮に脚部数を個体数とするならば、両区合せて2m²足らずの所から約290点の製塩土器を出土したことになる。しかも、これらは折り重なるようにして出土し、一括して廃棄されたと考えられる。

このことから、発掘面積が狭く炉跡・焼土・炭灰層等の具体的な例証は得られなかったが、塩生産の場はこの地点の真近にあったものといえよう。

3665－2－A・3665－2－B区において出土した製塩土器の大半は脚部の破片で、脚部自体はほぼ完全に近いものもある。これに対して、椀部の破片がきわめて少ないことが指摘できる。椀部破片は器壁が薄く削られ、また製塩の過程での破損も考えられるが、出土した椀部破片の量はきわめて少ない。出土した椀部破片はすべて細片で、個体数の算定はできないが、脚部片から推定した個体数（約290個体）の$\frac{1}{30}$以下の10個体未満程の量である。このことは、近藤義郎氏が指摘[註5]された大田尾遺跡・沖の原遺跡の場合と共通している。

以上の2地区のように、出土遺物の大半が製塩土器で占められるのに対して、他の地区では相対的に土師器・須恵器の占める割合が多い。とくに、3659－A区、3660－A区では須恵器の完形品や比較的大型の破片が出土し、生活面の存在を予想させる。すなわち、背後に15m強の西北―南東にのびる丘陵をひかえた地域に生活空間があり、砂丘の海岸寄りの部分に製塩の場があったことが予想される。

遺構の有無については確認することができなかったが、遺物の出土状態から考えて、住居跡や炉跡等の存在する可能性は強い。

遺跡の範囲についても明確な線引きはできないが、少なくとも今回発掘した地域は全域遺跡として把え、将来に対処する必要があろう。

製塩の年代について、調査前においては、近藤義郎氏の沖の原遺跡・大田尾遺跡の調査・研究の成果により、古墳時代後期であろうと予測していた。幸い、今回の調査によって製塩土器と供伴する土師器・須恵器を得ることができ、その予想を裏付けることとなった。

比較的年代的な特徴の良く判る須恵器の蓋坏（第５図１～４）をみると、坏蓋の天井部と体部の境はなく、口唇内部の有段もみられない。坏身の立上りは低く内傾し、底部のヘラ削りは少なく雑である。口径は坏蓋が12.5㎝、坏身は11㎝前後で小型化の傾向がみられる。このような特色から、これらの蓋坏はⅢＢ期（６世紀後半）に比定できよう。他の遺物もこの年代感に矛盾するものではないと思われる。

最後に、出来町製塩遺跡と富岡神社古墳の関係について一言ふれる。

富岡神社古墳については先に述べたように、破壊が進み、わずかにその残骸を止めているにすぎない。しかも石室の石積みは積み変えられ、本来の姿を止めていない。しかし、横穴式石室を備えた円墳であったことはまちがいなく、後期古墳と考えることができる。この古墳の被葬者の生活基盤は現在のところ他に求めるべきものがなく、出来町製塩遺跡との関係で把えざるを得ない。すなわち、出来町製塩遺跡において製塩に従事した集団の墳墓としての富岡神社古墳が考えられる。両者は、直線距離にして約500ｍ離れているが、地理的にみた集落と墳墓の関係からも首肯できるものといえよう。ともあれ、富岡半島周辺における古代遺跡については未知数な面も多く、資料の蓄積を持って再検討すべき問題である。

註１　蟲新田については、県立水産高校・横尾泰則氏に教示を受けた。
「道田家文書」によると、蟲新田は天保10年に完成し、面積は当初７町５反で、のち、７町７反になったとある。

註２　苓北町文化財保護委員・大仁田仁義氏の教示による。氏によると、海水は遺跡の北東約50ｍにまで及んだという。

註３　近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。
松本健郎「熊本県の製塩遺跡」『ふるさとの自然と歴史』第57号、昭和51年。

註４　近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。

註５　註４に同じ。

II　柳迫遺跡

1．位置と環境（第1－3図）

熊本県の西方に突き出た宇土半島のほぼ中央部、宇土郡三角町大字中村字柳迫に位置する。

宇土半島の中央には、半島の方向と平行して山塊が連なり、これらの稜線が宇土市と三角町の市町村堺となっている。これらの山塊の南側には大小の谷が開析されており、東側の不知火町では南北方向に、西側の三角町付近では北東－西南方向に谷地形が開けている。

遺跡は、宇土半島の主峰で旧火山の大岳（標高478 m）から西に連なる300 m前後の山塊の西南に開けた谷頭に位置する。この谷は、やがて北側の千房の谷と合わさり、西南に方向を変え、国鉄三角線の走る波多川沿いの谷へと続く。したがって、河川流域的にみると、波多川の支流である柳迫川の水源地にあたる。

遺跡の所在する谷は西に開け、遺跡は標高100 m前後の緩斜面に位置する。谷頭の南東隅に湧水点があり、これが柳迫川の水源地である。

大岳の山麓周辺は製鉄遺跡の密集地帯で、地域的にみると城北の小岱山と並ぶ二大群集地を形成している。すなわち、宇土市・不知火町・三角町にわたって19カ所の製鉄遺跡が確認されている。

柳迫遺跡は昭和31年に坂本経堯氏によって発掘調査が実施され、炉・スラグ・ふいごの羽口・土師器が出土したという。また、長谷川熊彦・和島誠一氏により当遺跡のスラグの分析、遺跡の概要報告[註1]が行われ、学会にも知られた遺跡である。しかし、坂本氏の調査成果は公表されておらず、また調査時の出土遺物は一括して三角町立青海中学校に保管されている由であったが、現在は所在不明となっている。

このようなことから、基礎資料作成のための調査を実施することにした。

2．調　　査

(1)　調査の概要

調査の目的は、柳迫製鉄遺跡の年代の推定が第一で、遺跡の範囲等を知ることにあった。また、遺跡の東側（谷奥部）には杉が植えてあり思うままには掘開できないこともあって、掘開の地点は炉跡があると言われる地点より下（西）の方を重点的に行った。

発掘した地点は6カ所で、各発掘区の大きさは地点によって異なる。発掘総面積は16.5m²である。

D～F区の3区では無遺物であったが、A～C区においてはスラグ・ふいごの羽口・炉壁片・土師器等の出土をみた。遺構は何ら確認できなかった。

調査は昭和54年１月９日～12日に実施し、三角町教育委員会、枝森久一・高瀬武光氏の援助があった。

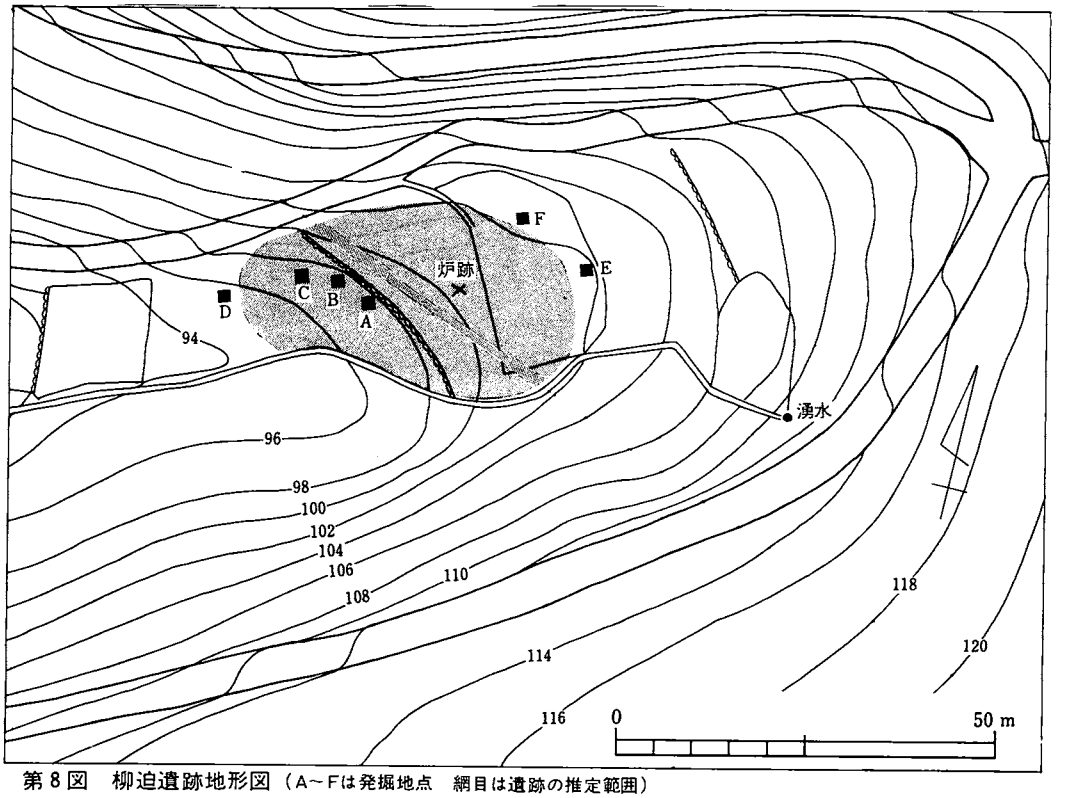
(2) 発掘区と層序（第８・９図）

発掘区の層序及び遺物包含の状況は、各々地点によって若干異なるが、遺物の出土したＡ～Ｃ区について説明を加える。

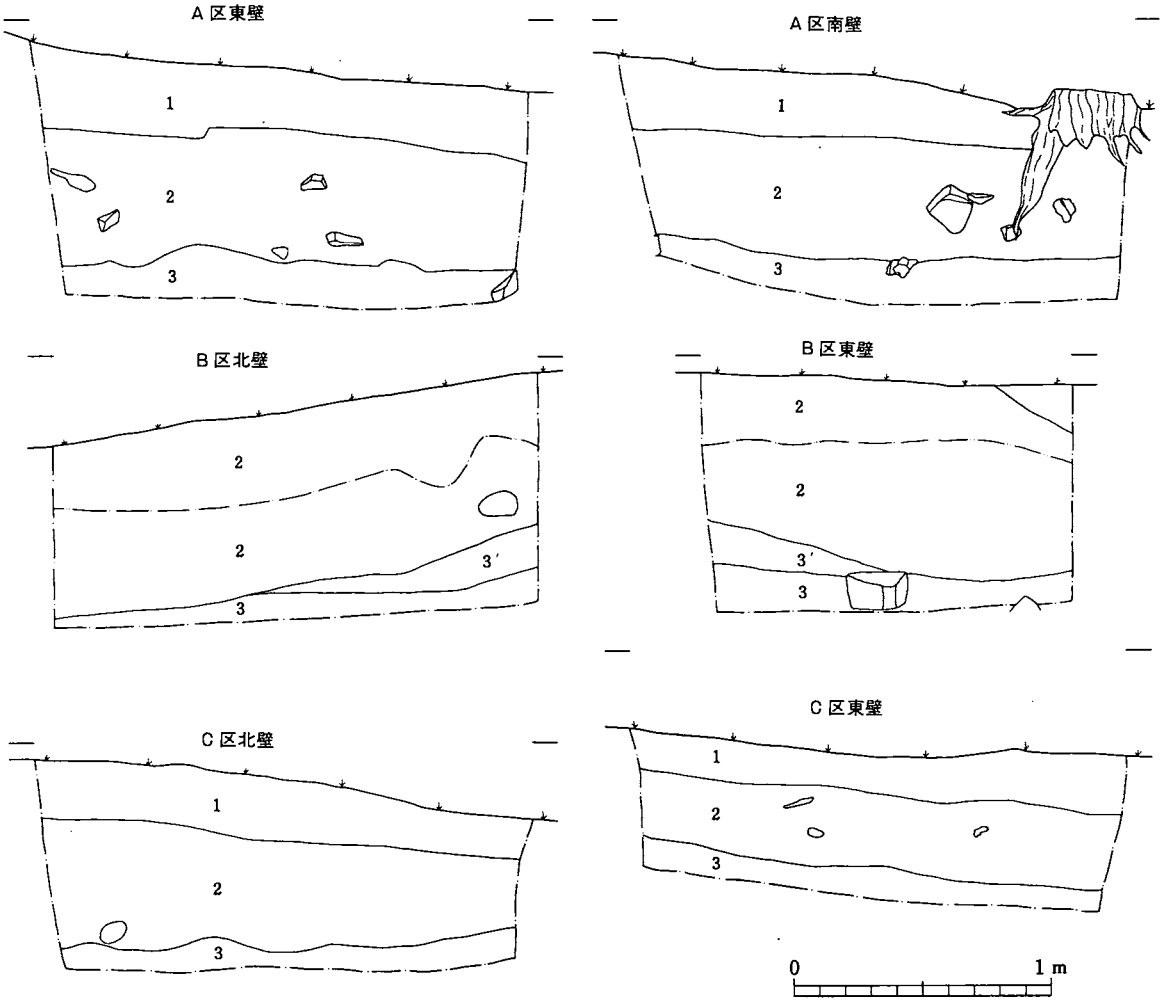
Ａ～Ｃ区は、東（谷頭）から西（谷口）へ向けての緩斜面で、地層も全般的に東から西へと傾斜している。

Ａ区は２ｍ×２ｍの大きさで、70～90cmの深さまで掘開した。第１層は表土で20～30cmの厚さである。ごくわずかにスラグを含んでいる。第２層はスラグ・ふいごの羽口・炉壁片・土器片を多量に含む包含層で、木炭等の有機質を含むためか黒色を呈する。この層には礫もかなり含まれている。厚さは50cm前後を測る。第３層は礫と褐色砂質土の層で、いわゆる地山にあたる。この３層上面にはスラグの食い込みがある。

Ｂ区は２ｍ×1.5ｍの大きさで、70～95cmの深さまで掘開した。Ｂ区ではＡ区の表土に相当



第８図　柳迫遺跡地形図（Ａ～Ｆは発掘地点　網目は遺跡の推定範囲）



第 9 図　柳迫遺跡調査区断面図

する層はなく、いきなり第 2 層が出現する。第 2 層にはA区同様スラグ・ふいごの羽口・炉壁片・土師器を含むが、A区に比べると量はやや少ない。また、第 2 層はスラグの含まれる量により上下 2 層に細分できるが、明確な区分ではない。すなわち第 2 層の上層にはスラグが少なく、下層には多い。B区の北東隅の一部には、第 3 層の礫及び褐色砂質土の二次堆積があり、この中にはスラグが含まれている（第3′層)。第 3 層はA区と同じ礫と褐色砂質土からなる地山である。

C区は 2 m × 2 m の大きさで、全般的に層が薄く、55～80cmで第 3 層の地山に達する。第 2 層が包含層で、含まれる遺物の種類はA・B区と同様であるが、量はB区よりさらに少ない。

このように、包含層の厚さや遺物の量は西（斜面の下方）になるにしたがって少なくなり、D区ではまったく認めることができなかった。

(3) 遺　物（第10図）

発掘によって得られた遺物は、スラグ・ふいごの羽口・炉壁片・土師器である。

スラグはかなりの量が出土し、総量は100㎏を越える。大きなものでも30㎝程で、10～20㎝のものが多い。多孔質で比重の小さいものや、比重が大きいもの等、形質は多種多様である。

ふいごの羽口は細片が多く、全形を知り得る資料は少ない。断面はいずれも不整円形で、口径により2種に大別できる。破損品だけで全長を知ることはできないが、一方の端にはスラグや炉壁の一部が付着している。

口径の小さい方（第10図1～3）は、外径で8～10㎝、孔径は4㎝前後のもので、この種の胎土は比較的良い。大きい方（第10図4・5）は良好な資料がないが、復原値でみると外径が11㎝前後、孔径も5㎝強で、前者よりやや大きめである。この種のものは胎土が悪く、小さな石粒や砂を多く含んでいる。

スラグの付着状態や溶解・変色の状態から、羽口の装着角度を推定すると、4は32°50′、5は28°を測る。他の資料は細片であったり、測定に足る状態を示していない。

炉壁片も20点近く出土したが小塊が多い。

土師器も細片が多い。器形が判別できるのは甕と高台坏で、図化できるものは少ない。

甕（第10図6）は復原口径30㎝で、胴部最大径は口径より小さい。胴部外面は荒いハケ目を縦に施し、内面は横方向にヘラ削りされている。ヘラ削りされた部分の器壁は薄いが、口縁部はやや厚く大きく外反する。高台坏（第10図7）は坏底部の破片で、全形を知り得ない。器面は風化し、細かい調整も不明である。

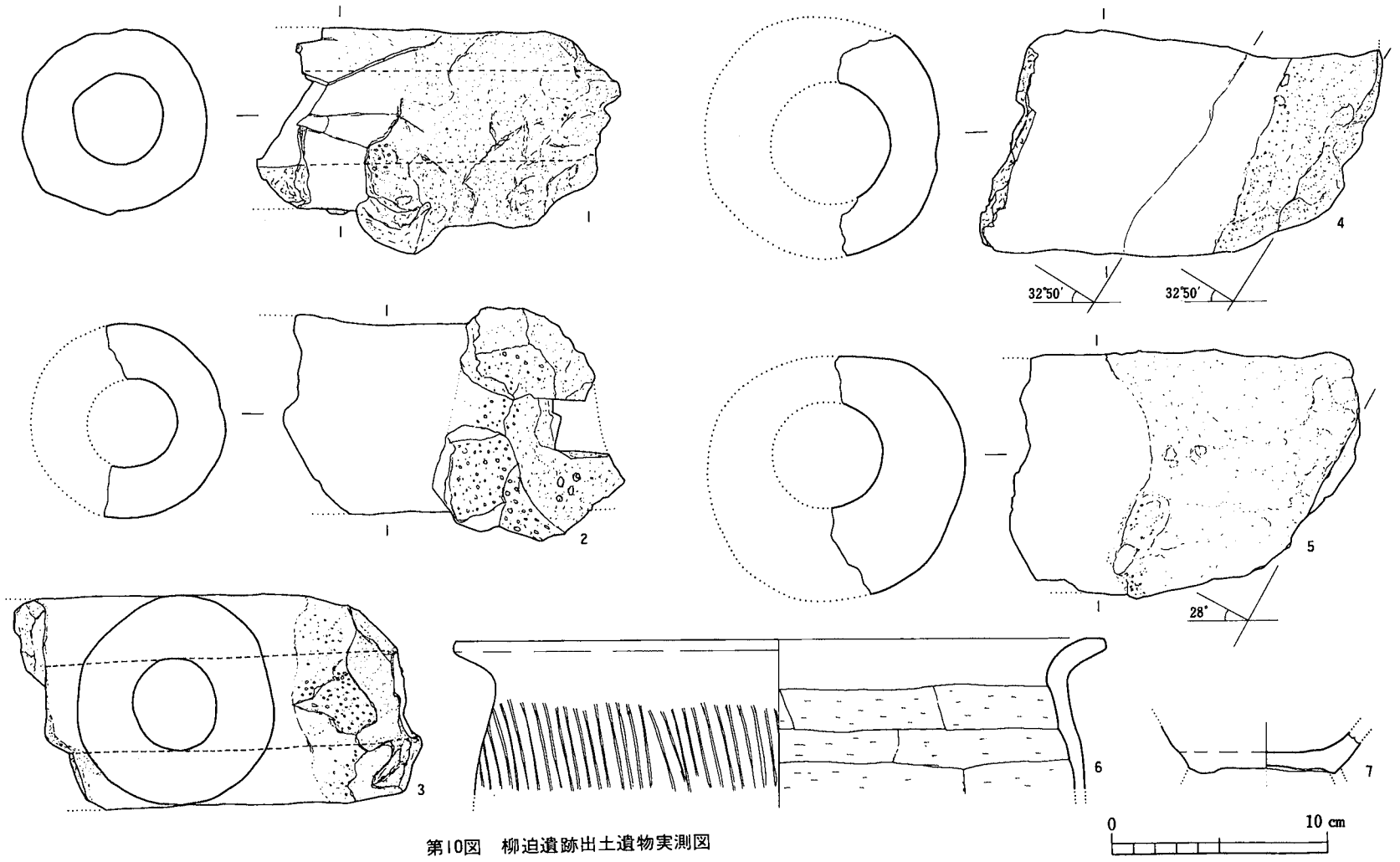
木炭は細粒がわずかにみられた程度で、採集できるような資料はなかった。

3．小　　結

柳迫遺跡は、宇土半島の大岳周辺に分布する製鉄遺跡群の中で、官迫遺跡とともに遺跡のほぼ全体が遺存しているという点に最大の価値があろう。

すなわち、他のほとんどの遺跡が果樹園造成その他で壊滅したり、わずかにスラグの散布を見る程度になってしまっている中で、炉跡を含め、遺跡全体を把握する上での貴重な資料となり得るものである。

昭和31年の坂本経堯氏の調査、今回の調査所見、土地所有者・高瀬武光氏の話を総合すれば、遺跡の範囲は東西約45ｍ、南北約25ｍの範囲（第8図）に及ぶものと考えられる。



第10図　柳迫遺跡出土遺物実測図

ただし、これは主にスラグ、ふいごの羽口、炭灰層等、製鉄に関係する遺物の分布と解釈すべきで、工房とか住居跡の存在はその周辺部におよぶものとの余地は残しておかねばならない。

柳迫遺跡のスラグは、かって湊秀雄・佐々木稔氏により科学分析[註2]が実施され、製錬滓という判定が公表されている。このことは、遺跡の立地や遺物の出土量・出土状態等の考古学的所見とも一致し、柳迫遺跡の性格を製錬遺跡として大過ないものと考える。

炉跡や具体的な製錬工程については不明な点が多いが、湊・佐々木氏の分析結果にもとづく製錬条件の推定「大量の空気が送られて製錬されたと考えられる。しかし、スラグ融液の酸化鉄成分まで還元されたことから、製錬温度は相当に高いものであったと予想される。」と「炉跡の片側に3本以上のふいごが装着された炉壁が倒れ落ちた状態であった。」という枝森久一氏の話は参考となろう。

次に遺跡の年代であるが、今回の発掘で得られた土器類は質量ともに乏しく、年代の細分は不可能である。しかし、従来古墳時代の可能性[註3]が考えられていたことは否定され、平安時代に属することは確実となってきた。

出土した土師器の甕では奈良時代・平安時代の判別は不可能と考えられるが、共伴した高台坏により平安時代という年代を与えておきたい。

前出の分析の結果、柳迫遺跡のスラグの原料は砂鉄との判断が示されているが、今回の調査ではその供給地を推定するに至らなかった。少なくとも、柳迫遺跡の至近距離には砂鉄鉱床や川砂鉄は確認できず、遺跡の立地は木炭の供給地に規制され、砂鉄は運搬されて来たものと考えられる。ある程度の年代幅は考えるとしても、約20カ所にものぼる大岳製鉄遺跡群の砂製供給地の追跡調査は今後の大きな課題である。

註1　長谷川熊彦・和島誠一「たたら製鉄鉱滓の研究」『資源科学研究所集報』第68号、昭和42年。

註2　湊　秀雄・佐々木稔「たたら製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』第14号、昭和43年。

註3　註1文献で、「出土する土師器と同時期とみなせば古墳時代に溯る可能性もあるが……」とされている。

III　今泉製鉄遺跡（八代鉄山）

1．位置と環境

日本三大急流に数えられる球磨川は、熊本・宮崎県境近くの九州山地に源を発し、人吉盆地を貫流し、そこから山岳地を流れ下り、八代で八代（不知火）海に注いでいる。

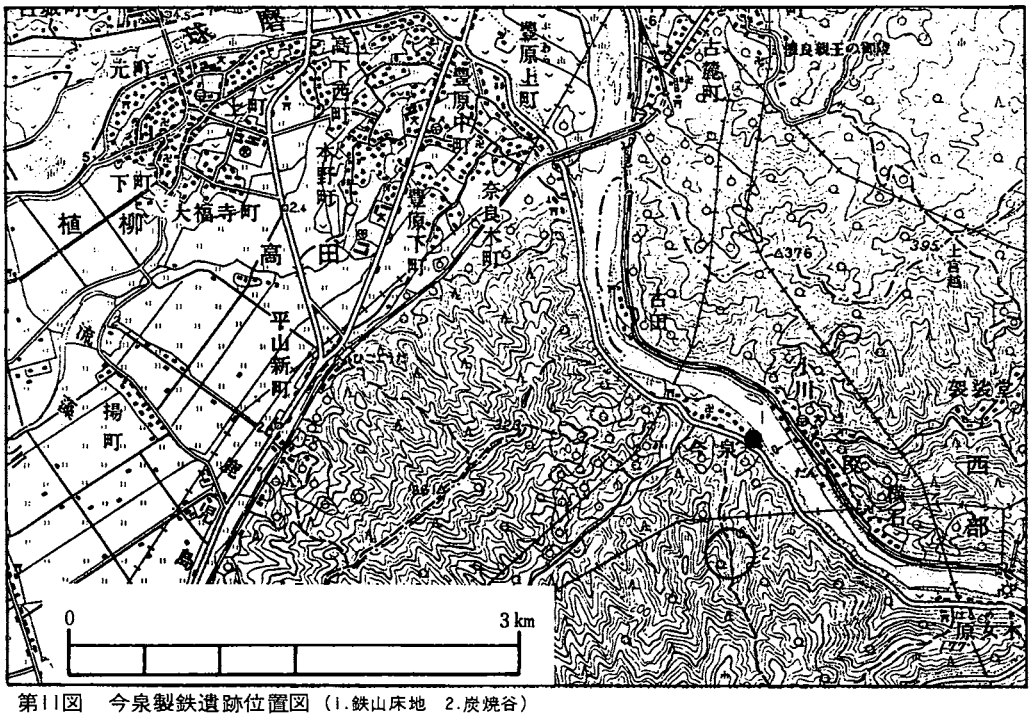
今泉製鉄遺跡は、この球磨川が山岳部からやがて八代の平野部に流れ出る地点のやや上流左岸に位置する。所在地は八代郡坂本村大字西部ろ字鉄山である。

遺跡付近の球磨川両岸には500 m級の山塊が連なり、国鉄肥薩線と国道219号線が球磨川とともに谷を縫って人吉方面にのびている。球磨川の下流域は肥薩線が右岸を、国道219号線が左岸を走っているが、遺跡の対岸のやや上流に肥薩線の段駅がある。

遺跡は、国道219号線と球磨川に挟まれた、八竜山（標高500 m）から北方へのびた山麓の段丘状地形に立地する。

遺跡地一帯は古くは「鉄山床地」と呼ばれ、今泉区の共有地として登記されているが、地区民に分割され、個人が耕作権を保有し、現在は畑地や一部宅地として利用されている。

遺跡一帯にはスラグが散乱し、また、かなりの伝承が残されているにもかかわらず、この遺



第11図　今泉製鉄遺跡位置図（1.鉄山床地　2.炭焼谷）

跡の存在はほとんど注目されていなかった。まして、近世たたらとしての認識はなかったといってよい。

当該事業の一環として、昭和53年10月当遺跡を踏査し、近世たたらの地下構造が遺存している可能性が強く考えられ、その確認のための調査を実施することになった。

2．調　　査

(1) 調査の概要

調査は、畑地の収穫を待って、昭和53年12月10日～21日に現地の発掘調査を実施し、その後関連資料の調査を断続的に実施した。

発掘を実施した地点（第12図）は、国道219号線の北側に隣接した南北約17m、東西約16mの畑地で、「耕作中に水の溜った深い穴が出てきたのでそのまま埋めた」という話があった地点で、地形等から高殿の跡ではないかと考えられたところである。

発掘の結果、以下述べるようなたたらの地下構造がほぼ完全な状態で遺存していることが判明した。

その後、発掘と並行して行った聞取り調査や盛高靖博・阿部堅二氏の教示をもとに関連資料の調査として、関係文書の調査・刀剣類の調査・過去帳による鉄山労働者の追跡調査等を実施した。

また、出土した木炭については、熊本大学・大迫靖雄助教授に樹種の同定を依頼中である。[註1]

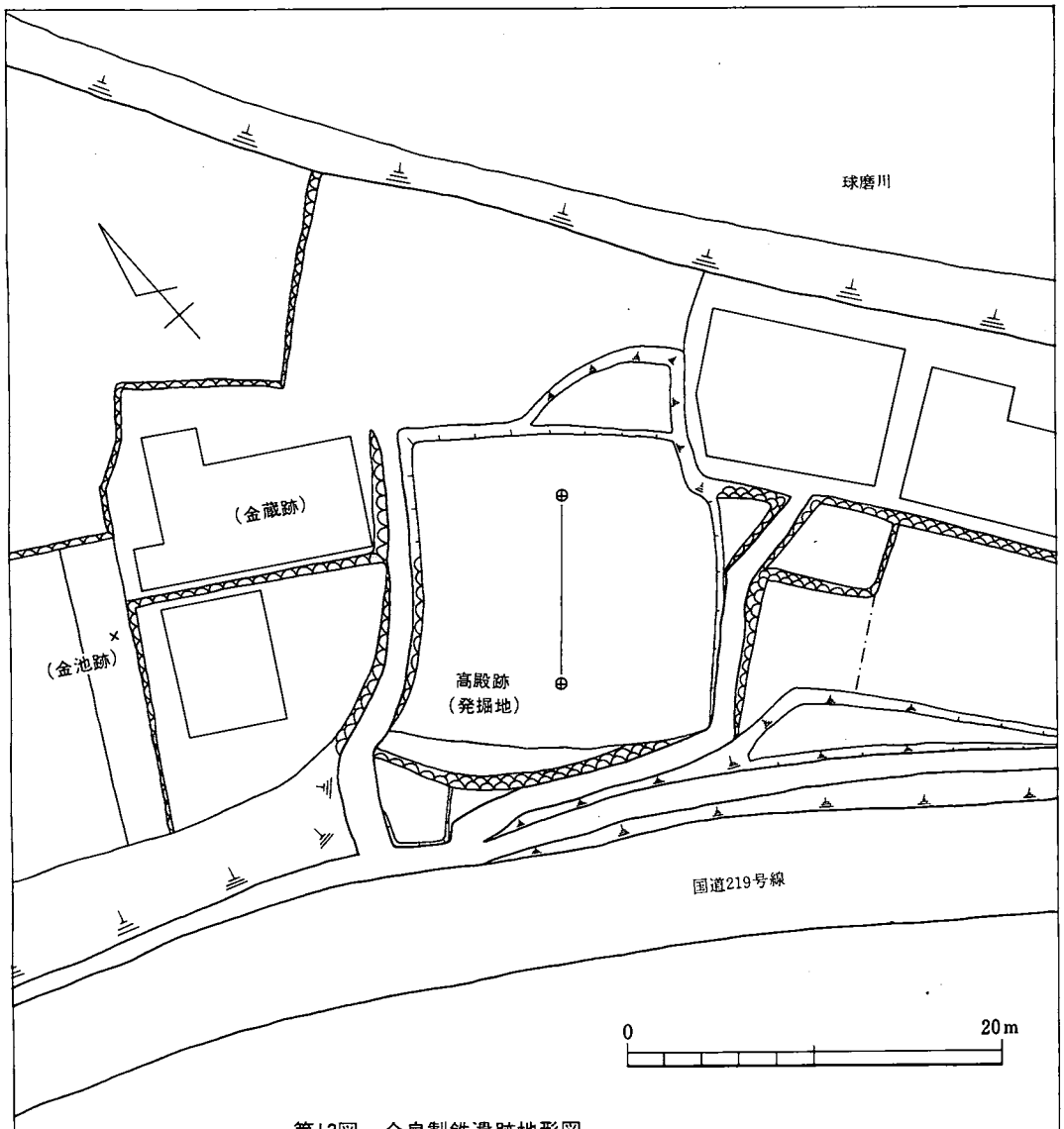
調査にあたり、上記の他に、三島格・村上正人氏から種々援助を受けた。また、土地耕作者の各氏は土地発掘に快く協力され、今泉区・坂本村教育委員会からは全面的な支援を受けた。さらに関連資料の調査にあたり、資料所蔵者の協力のもとに調査を進めることができた。

(2) 発掘調査

発掘調査を実施したのはすべて畑地であったが、耕作土は比較的薄く、15～30cmである。耕作土を除去すると、赤く焼き固まった面が広がり、部分的に西側小舟の天井や本床の掘り込み、石列や掘り方の線が出現した。調査の初期の段階は、耕作土を除去した状態で、どのような遺構のあり方を示すかの確認に主力をおき、のち部分的な掘開により細部の確認を行った。日数や予算上の制約もあり、また確認調査という性格上、掘開は最少限度に止めたため、記録の作成も充分なものとは言えない点もあるが、以下述べるような遺構を確認し、若干の遺物を検出することができた。

イ．遺　　構（第13図）

検出した遺構は、高殿の掘立柱の柱穴、たたらの地下構造を組み込む掘り方、掘り方の中に



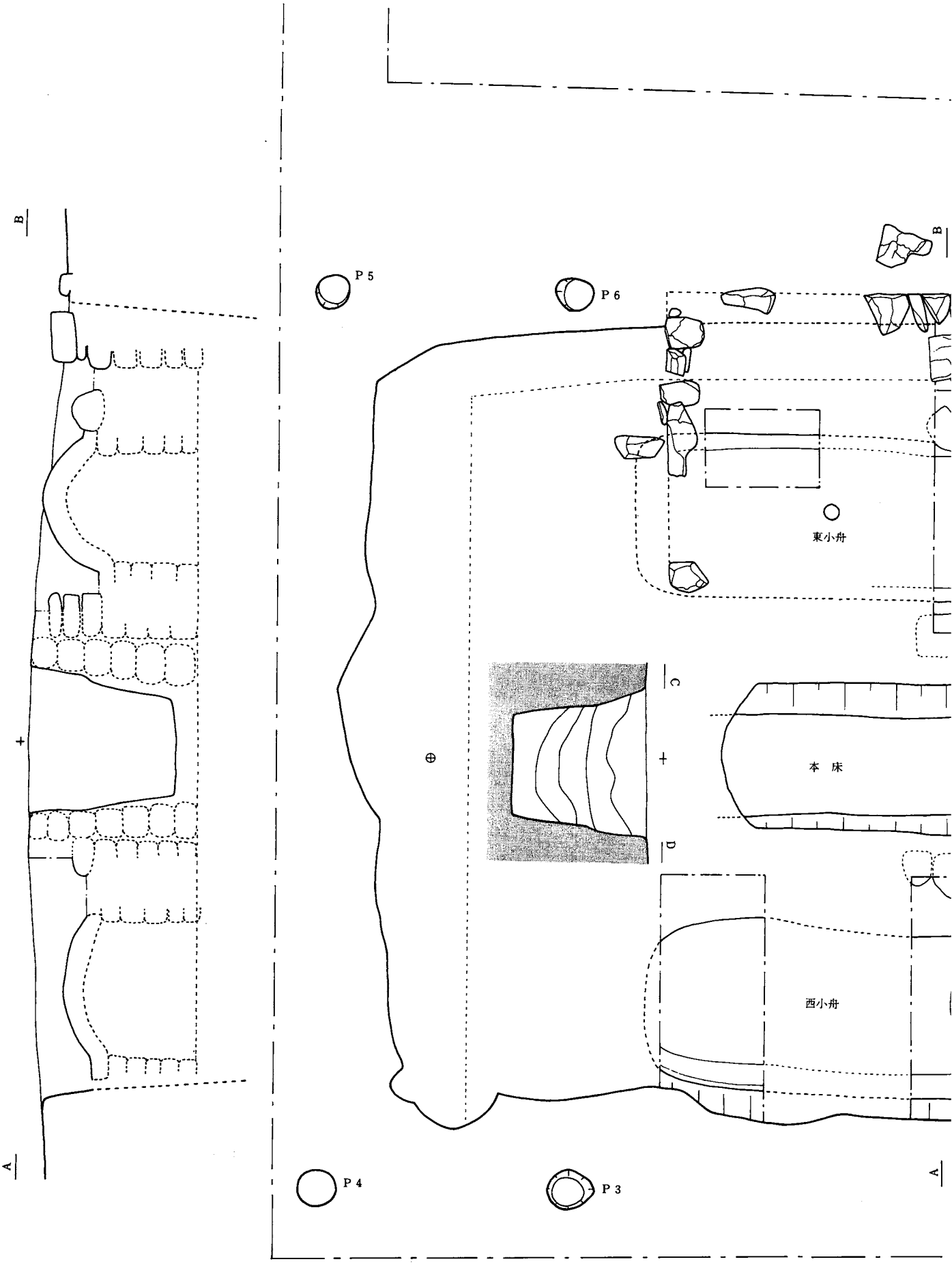
第12図　今泉製鉄遺跡地形図

構築された本床・小舟、地上の設備として銑鉄やスラグを流し出す溝と湯壺、区画のための石列、排水溝等である。

柱穴は全部で10個を検出した。配列は、掘り方の東側・西側に各4個、北側に2個である。排土等の関係で発掘面積が限定されたため、これが建物の全体像ではない。

柱穴は径30cm前後のもので、円形のものが多く、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さは、P10の10cm（掘り込み面からの深さ、以下同）が極端に浅く、P9が57cm、P3が67cmを測る他、P1とP2が90cm、他は72～77cmである。

柱間距離は必ずしも一定ではなく、P1・P2間は2.2m（心々間距離、以下同）、P2・P



第13図　今泉製鉄遺跡遺構実測図

P 8
P 7
P 9
P 10
C
D
E
F
E
F
P 2
P 1
0
2 m

3間5.6 m、P3・P4間2 m、P5・P6間2 m、P4・P5間6.9 m、P3・P6間6.9 m、P2・P7間6 m、P1・P8間7 mを測る。

また、P2の中には、柱穴底から約50cmの深さまで純良な砂鉄がつめられており、その総量は約38kgあった。

当時地上に出ていた設備として、本床から北側にのびる溝と、その先端部の不整楕円形の湯壺がある。本床から北へのびる溝は幅45～60cmで、断面の観察で本来の深さは40cmを測る。底面、中位、上面近くに焼けて変色し、固くなった砂層がみられ、その間には木炭やスラグ、焼土、褐色土等がつめられている。このことから、この溝は次第に埋められながら、大まかにみて三次にわたる使用面があることが判明した。

この溝は北側の不整楕円形の湯壺へと続く。湯壺の部分は中心部が浅く窪み、全面に砂が敷かれている。その砂は銀灰色に変色している。

石列にはかなりの乱れがあり、全貌を止めているものは少ないが、東小舟の北側に東西に並ぶもの、西小舟の北側と南側に同じく東西に並ぶもの、P6・P8間に南北に並ぶものがある。位置や石面のそろえ方からみて、天秤山の区画を示すものと考えられる。

また、発掘区の西北部に検出した溝は、木炭や灰がつめられ、西側へ向けて緩やかに傾斜する。幅は32～33cmで、深さは40cm前後である。長さは60cmにわたって検出したにすぎないが、排水溝と考えられる。

たたらの地下構造を組み込む掘り方は、東西最大幅6.2 m、南北最大長10.5 mの不整な六角形プランである。南側の丘陵に近い側は岩盤に掘り込まれている。掘り方の深さは不明であるが、掘り方上面から小舟の底面まで約1.2 mを測る。仮に、小舟底が掘り方の中位とすれば、掘り方の深さは2.4 m前後となる。この掘り方の最下部に施される排水溝等の構造については不明である。

本床は掘り方のほぼ中央に設けられている。上面幅は1.12～1.14 m、下面はやや狭くなり74～78cmを測る。南側は大舟の時の天井部を残しており、天井部の落下が予想されるため下部の掘開を行わなかったので、本床の全長は不明であるが、4 mに達するものと考えられ、天井部の北端まで3.78 mを測る。深さは南側がやや深く1.14 m、北側は1.02 m前後である。

本床の南端は大舟の時の天井部を残し、北側は大舟の天井部を落したのち、さらに粘土壁を30～50cm上積みして側壁を形成している。則ち、本床の側壁は二次にわたって築かれたもので、その継目で傾斜角が変ったり、わずかにずれが生じており、その状況が観察できた。

本床の内壁の一部には石がのぞいており、部分的な断面観察によっても芯に入れた石が観察される。おそらく、本床には二重に石が埋め込まれているものと考えられる。

本床の内部には、南側の一部に粘土塊（焼けており、大舟の天井を壊したものと考えられる）をつめている他は、ほとんど木炭で満たされていた。木炭は小さく砕かれたもので、わずかに

スラグ・灰・焼土等を混じえている。

本床の北側断面の観察では、5層に識別できた。上から1～5層として説明を加える。1層は耕作等により攪乱を受けており、土壌がかなりの量混じり込んでいる。2～4層は細かく砕かれた木炭の層で、3層と4層、4層と5層の間には薄く灰層が観察される。5層は2～4層に比べるとやや粒の大きな木炭層である。この層序は、床焼きや灰すらしの回数を示すものと考えてよかろう。すなわち、第5層の木炭層が床焼きの時のもの、その後3～4回（1層が本来2層と同一層であれば3回、異った層であれば4回）にわたって灰すらしの作業が行われたと考えられる。

小舟は東小舟、西小舟とも完全に遺存しているが、全掘は避けた。したがって、細部の構造や計測値も充分ではない。

小舟の構造は、長辺の側壁を石で積み上げ、これにアーチ状の粘土天井を取り付けたものである。石積み等の細部については不明であるが東側小舟の内部の幅は105㎝前後、床面から天井部まで約90㎝、天井部の厚さは15㎝前後、床面には約20㎝の厚さに灰や炭が堆積している。その他には土砂の流入もみられず、当時の姿をそのまま止めている。また、天井の一部が陥没したため、1㎡四方位の凝灰岩の切石で補修したあとがみられる。

西小舟も完全に遺存しており、内部の幅は不明であるが、床面から天井下面まで1㎡、天井部の厚さは約20㎝を測る。内部には東小舟と同じような堆積物がみられる。西小舟の天井部は東小舟のものに比べると丸みが強い。東側小舟の方が焼成の途中で扁平なものになってしまったと考えられる。

天井部の外面には叩きしめの痕が多く残され、西小舟の天井部には径12～14㎝のショウジ(煙突）穴が付いている。東小舟は天井の一部を掘開しただけでショウジ穴は確認しなかったが、同様な穴があるものと考えられる。

小舟の長さや焚口の構造については不明な点が多いが、部分的な発掘によれば小舟の長さは5㎡強、焚口は塊石で塞がれている。また、西小舟北端の、小舟に向って右側には八字形に開く石積みがみられる。このようにしてみると、東小舟の北東の掘り方が不規則に突出しているのはこの石積みを組み込むためのものと理解される。

本床・小舟の全体的な配置は、掘り方からみるとやや東側に扁して配置されている。すなわち、東小舟は掘り方の内側ぎりぎりに築かれているのに対して、西小舟と掘り方との間には約90㎝の間隙がある。ただし、南側と西側の南半分においては、掘り方の内側にL字形にめぐる石積みが巡っている。

ロ．遺　　物

検出した遺物は全体的に多くなく、量的にみるとスラグ・木炭・砂鉄・銑鉄・鉄釘・建築材・粘土瓦・磁器片の順である。

スラグは多量に出土し、遺跡地一帯では容易に採集することができる。これらの形状は多種多様である。また銑鉄の小さな塊も数点出土した。

砂鉄は前述したＰ２の中に約38㎏と、Ｐ１・Ｐ２周辺にわずかな散布がみられた。

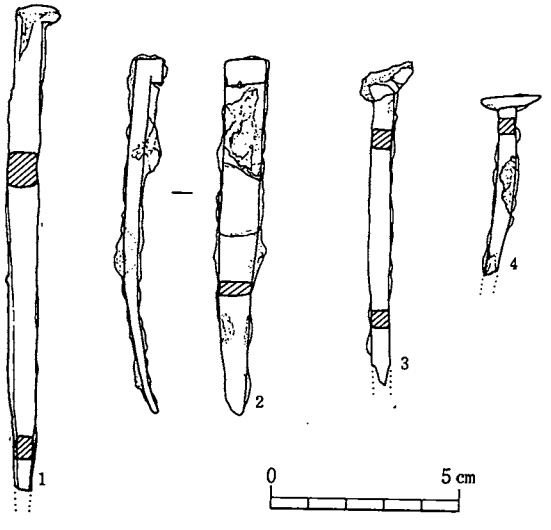
鉄釘（第14図）は４点が出土し、形態的にみると３種のものがみられる。１は頭部をわずかにＬ字状に造り出したもので、身の断面は隅丸の長方形を呈する。先端を欠失しており全長は不明であるが、残存長は12.8㎝を測る比較的大型の角釘である。２は頭部を折り曲げて整形し身の部分は扁平なもので、先端は丸味をおびる。長さ9.3㎝、最大幅１㎝を測る。３・４は頭部がＴ字形になり、身はやや細目の方形断面で、先端部は欠失している。

これらの鉄釘は、高殿の建物やその他の付属的なものに使用していたものと考えられる。１は東小舟南側の埋土から、３は東小舟北側から、２・４はＰ４から出土した。

磁器片は近世の染付で、１㎝程の細片が１点出土しただけで、これによる積極的な年代論は展開し得ない。

木炭はＰ２の中から10点程と、耕作土を除去した面の各所から50～60点を採集したが、細片は各所においてみられた。木炭の出土状態からは、木炭の用途、すなわち製鉄用の燃料としての木炭であるのか否かの判定は困難である。

これらの木炭については、熊本大学・大迫靖雄助教授に樹種同定を依頼中である。顕微鏡観察前の肉眼観察の所見では、大半は針葉樹で、広葉樹のカシ類がわずかに５点程含まれるにすぎず、針葉樹の中には直径20～30㎝のものがあり、建築材として十分使用できる大きさのものであるとのことである。



第14図　今泉製鉄遺跡出土鉄釘実測図

先に述べた出土状態と考え合わせ、出土した木炭の大半は建築材あるいはその他の用途のものが何らかの事情で炭化したもので、製鉄用の木炭と考えられるものはきわめて少なく、それと考えられるものにカシ類があることを指摘しておきたい。

建築材としてはＰ２の中に柱根[註2]が遺存していた。直径は約12㎝程で、下底面には切断痕が観察される。大迫助教授によれば、さきの

炭化した針葉樹と同類のものであろうとのことであり、顕微鏡観察による判定を実施中である。

(3) 伝承の調査

発掘調査時、あるいはその後の機会に伝承の聞取り調査を行った。聞取りの主な対象者は次のとおりである。

中村　　定　　八代郡坂本村西部ろ、明治36年10月20日生

盛高　靖博　　八代市古麓町宮地、明治41年10月30日生

村上　正人　　八代郡坂本村西部ろ、昭和3年5月30日生

以下総合して概要を記す。

今泉の鉄山は松井家の御用製鉄で、文化文政頃から明治10年まで操業していた。砂鉄は鹿児島県の長島から船で運んでいた。鉄山の技術者（村下）は福島甚八という人で、この人は薩摩から来ていた。また、今泉の宮村弥八という人が鉄山で働いていた。鉄山の南側の谷に炭焼谷と呼ぶ所がある。鉄山床地の一画に「金池」跡、「金蔵」跡、「炭坂」の住居[註3]がある。

また、松島岩男氏（59才）によれば、「若い頃、近くの老婆から、鉄山で働く時の歌を聞いたことがあるが、詳しい内容は覚えていない」とのことであった。

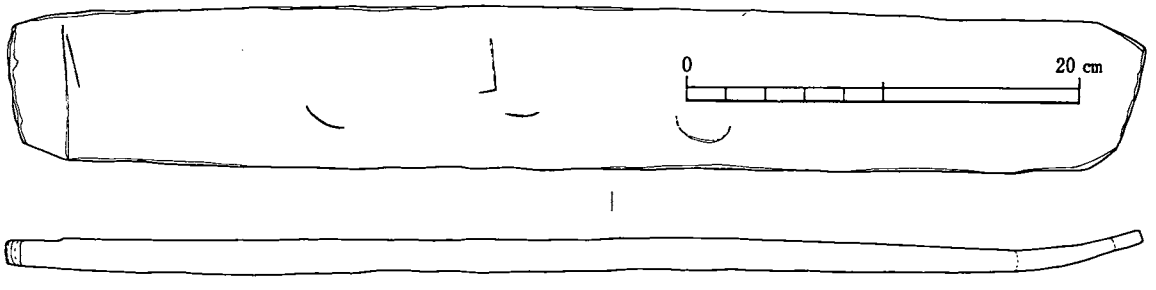
これらの伝承は、以下の関連資料調査の重要な手掛かりとなり、また砂鉄の運搬や炭焼谷、たたら唄[註4]（？）のこと等、資料的な裏付けはできないが重要な資料となろう。

(4) 関連資料の調査

イ．盛高家資料〔八代市・盛高靖博氏蔵〕

八代鉄山の村下であったという福島甚八の次男・半次郎は盛高家に養子縁組し、盛高靖博氏の祖父にあたる。そのような関係で、盛高家に八代鉄山で祠っていたという金屋子神の掛軸（図版14）が所蔵されている。

また盛高家には、八代鉄山で生産されたという包丁鉄（第15図）が保管されている。この包



第15図　包丁鉄実測図

丁鉄はもと後述の平岡家に伝わっていたもので、幅8㎝前後、長さ約57.5㎝、厚さ1.5㎝前後を測り、「御鉄砲御用鉄」という貼紙がしてある。

ロ．平岡家文書〔八代市・平岡ヌイ氏蔵〕

平岡家は「びんつけ屋」と称した商家で、松井家に出入し、長崎方面との商いを主にしていたという。同家に伝わる古文書の中に、鉄の売買に関するものが1通含まれている。

買　仕　切

一、鉄　弐万四千七百弐拾三斤

一、同　壱万八百弐拾四斤　　丸五百本
　　四千〇三拾七斤二合五勺
　〆三万五千五百四拾七斤　　平弐拾四枚
　　八百八拾八斤八合五勺
　　小割　百四拾把
　弐両壱分壱朱替　　五千八百九拾八斤
　代　八百弐拾弐両〇弐勺四戈　〆壱万〇八百廿四斤

一、丸鉄　千三斤半
　弐両弐朱与百文替
　代　弐拾壱両四合六勺七戈

一、小割同　弐把
　代　壱両弐合五勺
　〆
　金八百四拾四両弐分三朱与
　　銭　三百七拾五文

　外々
　三両弐分三朱与　　五厘高賜金
　　八拾七文
　弐両三分弐朱与　　上荷船四艘幷
　　百八拾四文　　日雇賃共〆
　　壱分 手数料

右
金八百五拾壱両弐分壱朱与
　　銭　弐百拾文

右買代金慥ニ請渡無出入相済申候　以上

丑八月廿七日

井戸屋利兵衛

平岡武左衛門殿

この文書により、平岡家（びんつけ屋）の取り扱い品目の中に鉄が含まれ、かなりの売買が行われていたことが判明する。

買手の井戸屋利兵衛は、他の「売仕切」書によれば「長崎西浜町」との印を押しており、長崎の商人であることが判明する。

しかし、平岡家文書でみる限りにおいては、前記の「買仕切」書に出てくる鉄が八代鉄山において生産されたとする直接資料は含まれていないが、平岡ヌイ氏からの聞取りや、宮本謙吉氏が昭和33年に記録した「平岡家由来書」の次の記載は、平岡家が八代鉄山と深い関わりをもち、とくにその売買に関与していたとみてよかろう。

平岡家由来書

初代　平岡武八

（略）

二代　平岡武十郎

略シテ武十ト称ス。一時、武左衛門ト云ヒシコトモアリシト云ウ。父ニ似テ高機ヲ見ルニ敏也。長崎方面ニ貿易シ或ハ今泉村ニ製鉄ヲ行ヒ巨万ノ富ヲ作ル。平岡家ノ産ヲ為シタルハ此人也。明治十年、十二月廿二日、六十六才ニテ歿ス。　（以下略）

この「平岡家由来書」が何に基いて書かれたものかは不明であるが、現存しない平岡家資料によって作成された可能性もある。

平岡家にはもと数棟の蔵があり、古文書や鉄塊も多数あったとのことであるが、蔵はすべて解体され、資料の大半は失われてしまっている。現存する世襲文書は往来手形・買仕切書・売仕切書等５通を１巻にしたものである。

先述の盛高氏所蔵の包丁鉄ももと平岡家にあったもので、故平岡氏が盛高氏に刀剣の製作を依頼され、その原料として持参されたものの一部である。

ハ．刀剣関係資料

調査中、盛高靖博氏から八代鉄山の鉄を原料にした旨の銘文のある刀剣があることの教示を受けた。これを手掛かりに、熊本県教育委員会で保管している「銃砲刀剣類登録台帳」による調査を実施[註5]した。

現在、登録台帳に登録されている銃砲刀剣類は40,274件（昭和54年２月現在）にのぼるが、その中で次の３件の資料が判明した。

刀　長さ２尺７寸９分６厘　反り８分３厘

銘文(表)　東肥士安井橘正臣

(裏)　八代以鉧鉄作之　文久元年十一月吉日

短刀　長さ１尺９分５厘　反り１分５厘

銘文(表)　備前介宗次以肥後八代計良鉄作

(裏)　万延元年十一月　日

脇差　長さ54.5㎝　反り１㎝

銘文(表)　豊州住高田藤原正盈　於東肥八代鉄山造之

(裏)　慶応二年五月　日

ニ．法讃寺資料〔八代郡坂本村・法讃寺〕

法讃寺は八代鉄山の所在する今泉にある真宗寺院であるが、そこの過去帳に鉄山労働者に関する重要な記載がある。その初見は嘉永３年で、明治19年におよび、たたら操業の年代と相似した動きが読み取れる。

嘉永三年

一、釈開覚　十一月十九日　鉄山覚兵衛　富村武七養父

嘉永五年

一、釈妙香　十月三日　鉄山内安兵衛女房

右岩見国ヨリ来居候者ノ由、当所多左右衛門・夫七ヲ以テ依頼而葬勤置、序ニ格別之願ニ依テ墓処光ツ寺ノ墓所ノ脇へ葬置事也

嘉永七年

一、釈妙蓮　正月十四日　渋里ニテ鉄山内炭山近平内　娘産死　岩州

依頼読誦法名授□□遣ス

一、釈妙　　岩見国大江郡銀山掛

大貫村庄久左衛門内近平初娘当鉄山内炭山

安政二年　乙卯

一、釈妙安　四月廿八日　鉄山安兵衛娘峰九才

安政四年　丁巳暦

一、釈然源　三月二日　鉄山灰山　啓助

右ハ石州川下村之者之由　依頼勤置

一、釈念称　十一月廿三日　鉄山内ムラゲ政兵衛五十七才

此者岩見国女房子供有リビッ中に参り居鉄山兄鉄太郎ニ男織之助

安政五年

一、釈　　五月十二日　鉄山内庄右衛門娘

安政六年　未

一、釈妙恩　二月廿一日　鉄山内仁助内

文久元年

一、釈敬導　四月六日　鉄山内幸吉三男　生レテ直ニ死ス

一、釈妙寿　十二月九日　鉄山山配常七女房カヨ

文久二年

一、釈円徳　七月十一日　鉄山内鍛屋千代蔵

右ハ岩見国ヶ来リ候者ニテ頭百姓庄之允忰同役伊右エ門弟則吉

一、釈観恩　七月廿日　鉄山鍛屋藤右衛門

右ハ敷河内ノ者ニテ子男女 [　　] 内熊吉・虎蔵 [　　]

文久三年　亥年

一、釈小露　十月十一日　鉄山友吉　初男

一、釈妙願　十二月廿二日　鉄山熊吉二女　二才

文久四年

一、釈敬栄　十月二日　鉄山内虎蔵忰政太良

日奈久留主観照寺勤置候事　岩見国津和野城下人共十九日右同人母ノイハイ書テモラフ　カリ門トニ致し居参詣仕度由シ申述候事　十一月三、十五日志参リ之筈之事

慶応三年

一、釈光露　六月十二日　鉄山友吉男子産屋

一、釈妙信　七月十七日　鉄山庄五良女房

此人不斗相偶シテ鉄山へ来居候由ノ処、死後七日後熊本ビワ崎ヶ来岡和平ト申ス人来リ御経勤候様頼志拾匁差出相勤、此人ハ右女房ノ弟ノ由、他人ヶ承ル事

明治七年

一、於无　一月十六日 / 十一月廿八日　鉄山寺田熊吉忰一才

一、斯願　六月十三日 / 四月廿九日　鉄山山本富吉母ミキ　六十八才

此者岩見国ヶ初而此地来有縁而寺ニ数年仕　娘キクハ当寺江乳奉公仕而十四才ノ春ホフソニテ死ス　此地墓所江埋居其所謂而母ミキモ同処江埋候事願ニ依ナリ

明治八年

一、命帰　八月廿三日 / 旧七月廿三日　鉄山寺田熊吉子

明治九年

一、釈頂香　鉄山久保田幾次郎父庄五郎事　六十才

明治十年

一、釈即得　一月七日 十二月五日　鉄山福島熊治良　岩吉父五十四才　兄嘉助

一、釈義諦　四月二十一日 三月十九日　鉄山田川三太郎　政太良父卅七才

一、釈妙西　七月十二日 六月十七日　鉄山青木鉄太四女スキ

明治十九年

一、釈妙順　四月二十五日　鉄山寺田熊吉妻ナリ

一、釈妙楽　九月十五日　今泉鉄山木下豊新妻イキ　二十二才

ホ．細川家文書（永青文庫）

充分な調査は実施していないが、熊本大学図書館に保管されている細川家文書『覚帳』に次の資料がある。

『覚　　帳』（嘉永二ヅ安政元年ニ至ル）

嘉永二年七月

林田直彦儀今日小物成方物書当分増人被仰付候　然処此度増人之儀於八代取起之鉄山小物成方引請ニ相成詰方有之候付而被仰付候事ニ候　若此後右鉄山御取止ニも相成候節ハ壱人被減筈ニ候　旦直彦此節被増下御切米并此後御足給扶持被下置候分共　鉄山御益銭之内ヅ御出方被仰付候条　委細之御勘定所承合年々御双場を以同所江立用有之候様御達之事

七月十七日

尚々本人御足給扶持之外　御心付等も一切鉄山御益銭之内ヅ御出方被仰付筈ニ候　此段も御達之事

追而執達左之通

御郡方ハ林田直彦儀小物成方物書増人当分被仰付候ニ付　此節被増下候　御切米并此後御足給扶持　鉄山御益銭之内ヅ御出方被仰付段及達置候処同人江下地被下置候　御給扶持共右同様御出方被仰付候　此段猶　御達候事

七月十二日

林　田　直　彦

右者小物成方物書増人当分被仰付候処　同人御給扶持等此後御足給扶持被下置候分共小物成方御益銭之内ヅ御出方被仰付候間　いオハ御元承合年々御双場を以立用有之候様及達候条　左様可有御心得候　以　上

選挙方御奉行中

七月十一日

御勘定頭衆中

『熊本藩年表稿』によれば、他にも八代鉄山に関する記事があり、細川家文書を詳細に調査すれば関係資料は増加するものと思われる。

3．小　　結

今回の調査は高殿跡の一部を発掘したにすぎず、八代鉄山の全容を明らかにしたものではない。また、遺跡地一帯は畑地や一部山林・宅地となっており、地上には何ら標識物は認められない。したがって、八代鉄山の全体像については不明な点も多いが、地形観察や聞取り調査によって得られた資料によって可能なかぎりの復原を試みたい。

八代鉄山の範囲を考えるうえで参考となるのは、「鉄山床地」と呼ばれる今泉区の共有地である。共有地は国道219号線と球磨川に挟まれた細長い一角で、最大幅約75m、最大長約175m、登記簿による面積は1反4畝27歩となっているが、実面積はさらに広い。この範囲内に、今回発掘を実施した高殿跡と、その西側に伝承による金池跡・金蔵跡が近接し、さらに西方に炭坂の家の跡が含まれており、この一画が八代鉄山の中心部であったとみてよい（第12図）。この共有地が何時から今泉区のものとなったのか判然としないが明治初期の可能性が強く、鉄山が閉山した後一括して今泉区に移管されたものと考えられる。

この共有地外で鉄山に関係するものに炭焼谷と水路がある。炭焼谷と呼ばれる地点は、遺跡の西南の谷奥にあり（第11図）、おそらく八代鉄山関係の木炭製造所の一つと考えられる。水路は国道219号線の改良工事等で消滅しているが、同じく西南の谷の斜面を横切って金池方向にのびていたという。

八代鉄山の立地は、一つには一般的に言われるように木炭の供給地に規制されていると考えられるが、さらに球磨川の水運を考えなければならない。

球磨川左岸の道路が開設されたのは昭和になってからのことで、旧道は球磨川右岸を通っており、球磨川沿いに八代に抜けることはできず、敷川内から山越えをして今泉に出るか、専ら球磨川の水運に依存していたという。

八代鉄山の原料砂鉄は長島（現在は鹿児島県出水郡）から運んでいたとの伝承があり、このことは資料的な裏付けはできないが、上記の交通事情を考えるとき、原材料・製品・その他の物資の輸送には球磨川の水運が欠かせないものとなり、そのことが鉄山立地を大きく規制し、球磨川河畔に八代鉄山が設置されたものと考えられる。

長島の砂鉄については追跡調査まで出来なかったが、伝承が正しいとすれば浜砂鉄を利用したものと考えられる。中国山地等で知られている鉄穴流しの技術は、現在のところ九州では確認されておらず、福岡黒田藩の近世たたら製鉄も浜砂鉄[註6]の利用が考えられている。

八代鉄山のたたらの構造については、上部の施設は遺存していないが、下部構造においては

中国山地の先進技術を導入している。さらに、法讃寺過去帳にみられるように、技術者集団も岩見国から招聘している。

法讃寺過去帳にみえる鉄山労働者の職種は村下・炭山・灰山・山配・鍛屋であるが、この内村下・炭山・灰山・鍛屋が岩見国から来ている。

村下・政兵衛は安政4年に57才で死亡しており、その後は薩摩から来た福島甚八という人が村下を努めたという。福島甚八の長男は熊治郎という人で、この人は法讃寺過去帳の明治10年の項に出ている。また次男半次郎が八代・盛高家に養子縁組をしている。福島甚八についての出自等の詳細は不明である。

八代鉄山の操業年代について、伝承では文化・文政年間から明治10年頃までと伝えられている。開設年代については資料として示した細川家文書『覚帳』にみえる嘉永2年（1849）とみてよいが、閉山の年代については伝承以外の資料は得られていない。

八代鉄山の経営形態についても資料が不足しており、現時点では解明できない面が多いが、さらに資料調査の必要があろう。

尚、調査後の遺跡は、土地耕作者の方々の協力により耕作を中止され、現在村指定のための事務が進められている。文化財の発見から調査・保存へと、きわめてモデル的に事が進んだことは望外の喜びである。

註1　木材の樹種調査結果については次年度報告書に収録する。

註2　支柱にしては径が小さく、あるいは小鉄町・炭町・土町などの区画のための柱かと考えられる。

註3　2～3年前までは当時の姿をとどめていたが、現在は改築されている。

註4　たたら唄は製鉄にあたり天秤を踏む時に歌われる唄。
友久武文「たたら唄考」『たたら研究』第8号　昭和37年。
牛尾三千夫「たたら唄に就いて」『たたら研究』第8号　昭和37年。

註5　刀剣関係資料の調査には、広瀬正照・吉津由美氏の協力を受けた。

註6　北九州郷土史研究会編『真名子鉄山発掘調査報告書』、北九州市立八幡図書館、昭和44年。

Ⅳ 柿 迫 遺 跡

1．位置と概要

遺跡は、熊本県と宮崎県の県境に近い阿蘇郡高森町大字芹口字中原に所在する。九州を南北に貫く九州山地の一角の、阿蘇外輪山の東南端にあたる。周辺の地勢は険しく、大小の山塊が連なり、谷も険しい。

河川流域でみると、分水嶺よりやや東に位置し、宮崎県延岡市で日向灘（太平洋）に注ぐ五ケ瀬川の支流域に属する。

遺跡の所在する丘陵は南北にのび、東西には深い谷が開析されている。丘陵鞍部の標高は600 m前後で、北から南へ向うにしたがって低くなり、遺跡地の畑は596 m前後を測る。

第16図　柿迫遺跡位置図

1.柿迫遺跡　2.男原遺跡

当地の佐藤公紀氏（故人）は、大正から昭和初期にかけて遺物を採集され、それらの遺物の一部は佐藤惟典氏のもとに保管されている。

現在保管されている遺物は磨製石鏃の未製品と黒曜石・チャートの石器・剥片が主体で、所蔵者の話では字中原145番地の佐藤氏所有地から採集されたものであるという。

昭和37年12月、熊本県の遺跡分布調査事業の一環として高島忠平・伊藤奎二両氏が現地を踏

査し、石器製造に関する遺跡として埋蔵文化財包蔵地調査カードを作成されている。

その後、島津義昭・下條信行氏らにより遺跡の存在が注目され、踏査等が実施された。

2．調　　査

(1) 調査の概要

以上述べたように、当該遺跡は、山岳地における磨製石鏃製造に関する遺跡として注意されながらも、採集品という資料的制約の殻を脱することができず、さらに、遺跡に関する状況については未知数の状態であった。

そこで、生産遺跡基本調査の一環として、採集地点とされる畑地の部分発掘により、包含層及び遺構の遺存状態、伴出土器による年代の推定、石器製造の工程等の確認を目的に確認調査を実施することにした。

発掘は、対象地に2 m方眼のグリットを組み、5区画（20m²）を掘開した。発掘の結果、磨製石鏃をはじめとする弥生時代の遺構・遺物は皆無で、押型文土器の包含層を確認した。

調査にあたり、遺物及び土地所有者の佐藤惟典氏、専門調査員・下條信行氏、高森町教育委員会の全面的な支援を受け、昭和53年10月4日～13日（実働7日間）に発掘を実施した。

(2) 発掘区と層序（第17～18図）

発掘区は第17図に示すとおり、丘陵の東端の畑地である。掘開したグリットはA－1、A－10、H－1、H－10、P－10の5区画で、各区とも70～100 cmの深さに掘開した。

層序は、発掘区により異なり、また部分的に攪乱や埋立てがみられるが、基本的な層序はA－10・Q－10区にみられるものである。

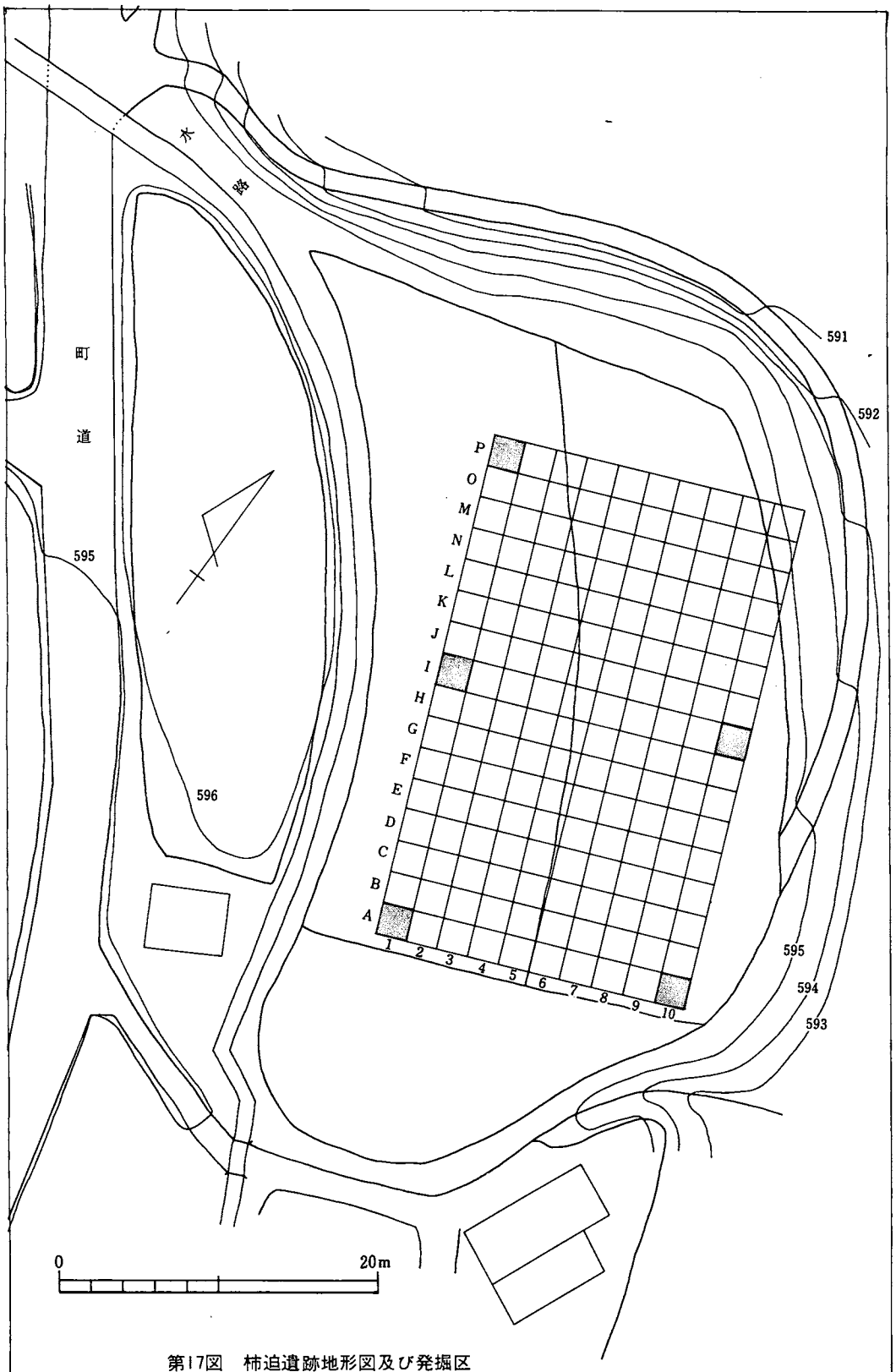
第1層は耕作土で、押型文・黒曜石・チャートの剝片をわずかに含む。現在は畑地であるが、以前は水田として利用されており、第1層の下部にはわずかに鉄分の沈積層がみられる。1a・1bと表示したのは後世の埋立て土で、おそらく大正6年前後に開墾[註1]された時のものと考えられる。

第2層は褐色または黄褐色土で、地区によっては欠落する所もある。2aと表示したのは第3層の攪乱により生じたもので、本来の第2層とは異なる。

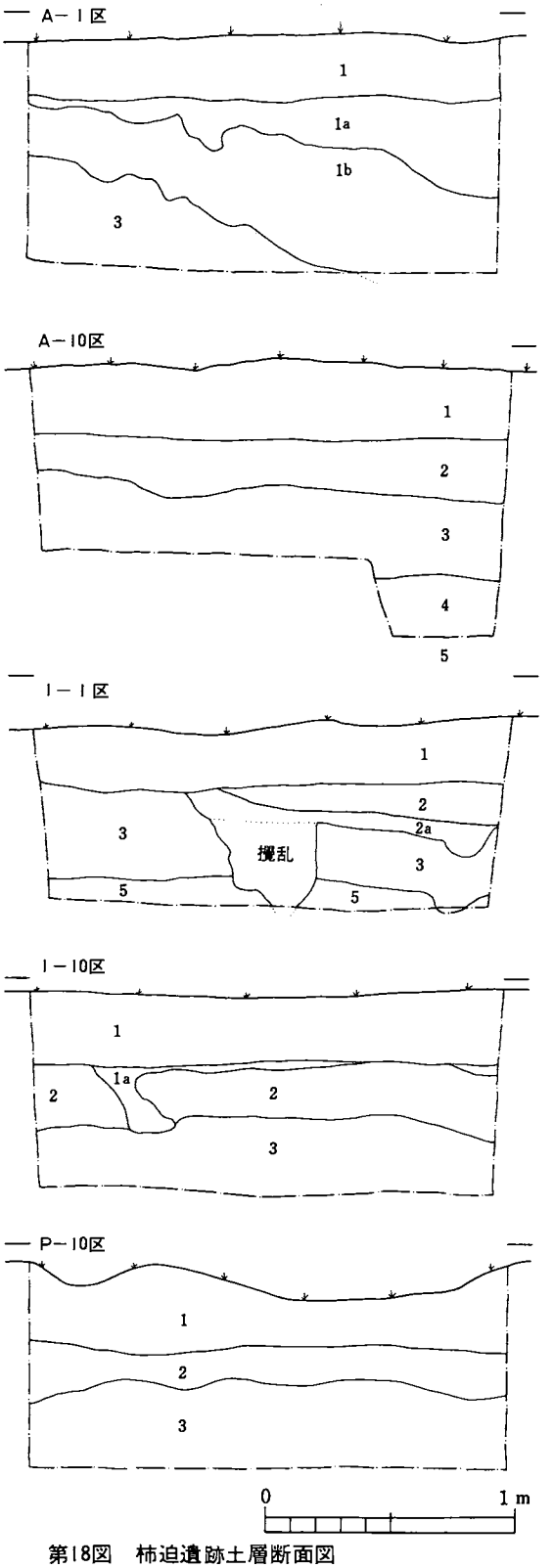
第3層は黒色土で、その上層が押型文期の本来の包含層である。第3層の上面から約20cmの深さまでが遺物包含層で、中位より以下には包含されないが、層としての区分はできない。

第4層は黒褐色土で、第5層のロームへと続く。ローム層は黄褐色の粘性の強いもので、新期阿蘇ロームと呼ばれるものである。

東・南九州の特徴的な火山堆積物であるパミスは、A－1区の1a層の中にわずかに含まれ



第17図　柿迫遺跡地形図及び発掘区



第18図　柿迫遺跡土層断面図

る程度で、他の地区には見られなかった。このことは、後述する包含層の遺存状況を考えるうえでの重要なポイントとなろう。

(3) 遺　　物

各区別の遺物出土数は第8表のとおりである。種類別にみると、現代の陶磁器片2点を除いて土器はすべて押型文土器で、石鏃や剥片も押型文に伴うものである。

押型文土器は全般的に胎土・焼成が良い。文様は山形文が多く、楕円文も含まれるが格子目文はみられない。楕円文は粒の小さいものである。文様の施される部位は各個体によってわずかな相違がみられるが、口縁部では内外面に施文されている。出土した口縁部は外反するものと比較的直立するものとがある。底部の破片は3点が得られたにすぎないが、いずれも平底を呈している。

石器では、定型的なものは石鏃だけで、その他多くの剥片を出土した。これらの石器・剥片の石材は黒曜石とチャートで、割合としてはチャートが多い。

(4) 柿迫遺跡採集磨製石鏃未製品

（第20～22図）

現在佐藤惟典氏のもとに所蔵されている磨製石鏃未製品・剥片は細片も含めて70点であり、完成品は1点

第8表　柿迫遺跡出土遺物一覧表

地区名	層位	押型文土器		石鏃		剥片		その他	備考
		山形文	楕円文	黒曜石	チャート	黒曜石	チャート		
A－1	1	体1				1			
	3	口2.体13	口1.体1	1		1	3		
A－10	1				1			陶器片1	
	3	体12	体2		1	10	9	無文土器片1 木炭細片	
I－10	2a	口2.体7	体1			2	3	不明土器片1	Ⅲ層の撹乱
	3	口1.体4				9	6		
I－1	1	体4					2		
	2	体6		1		3	9	安山岩剥片1	
	3	口1.体13	体2			3	10	使用剥片1 不明土器片3	
P－10	1	体1	体1			5	4	磁器片1	
	3	体4.底2		1		34	9	不明土器片3	
表採		体3				2	2		
計		口6.体68	口1.体7	3	2	70	57	無文・不明土器片8	

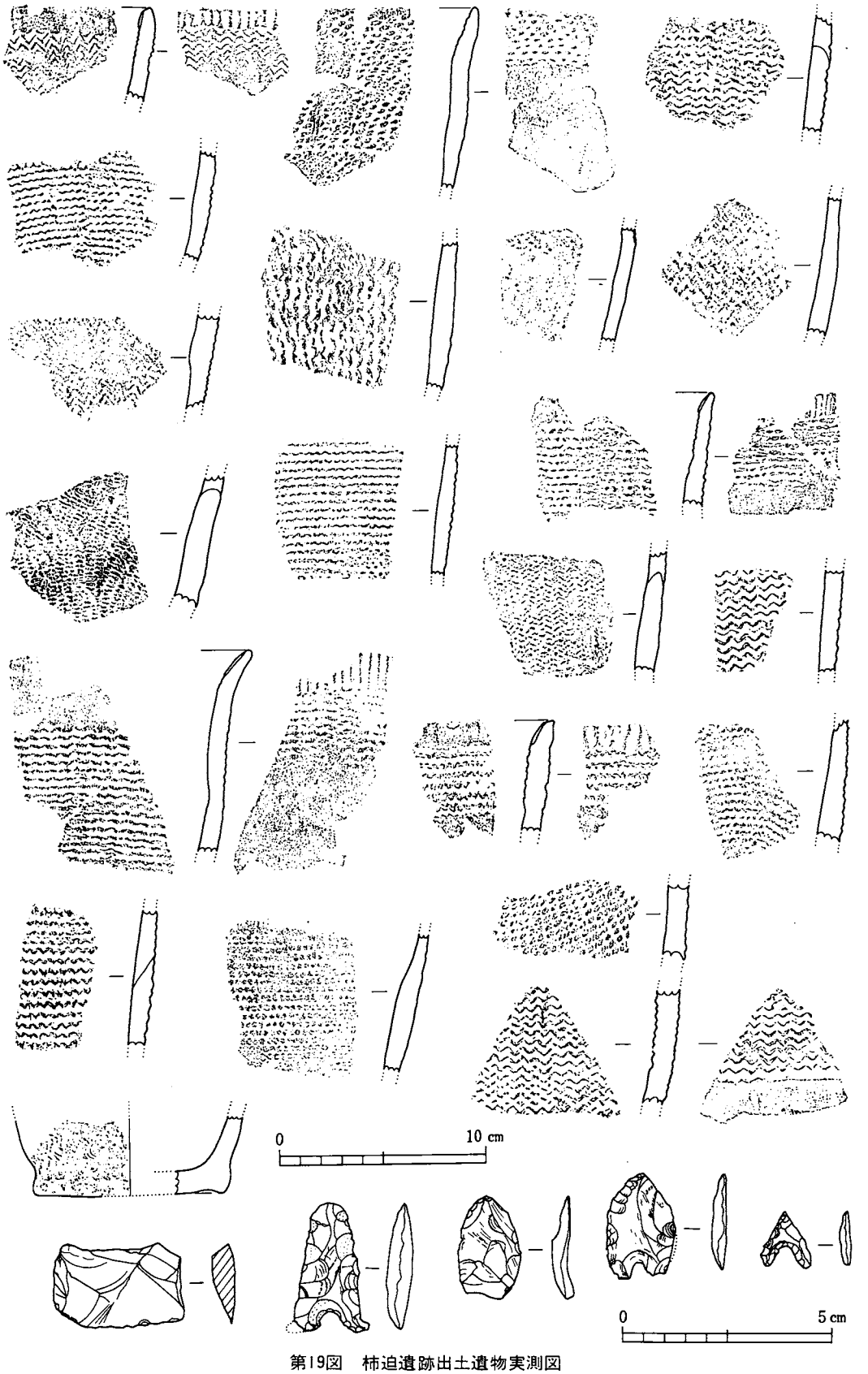
備考，土器欄の口は口縁部，体は胴部，底は底部の破片。

も含まれていない。

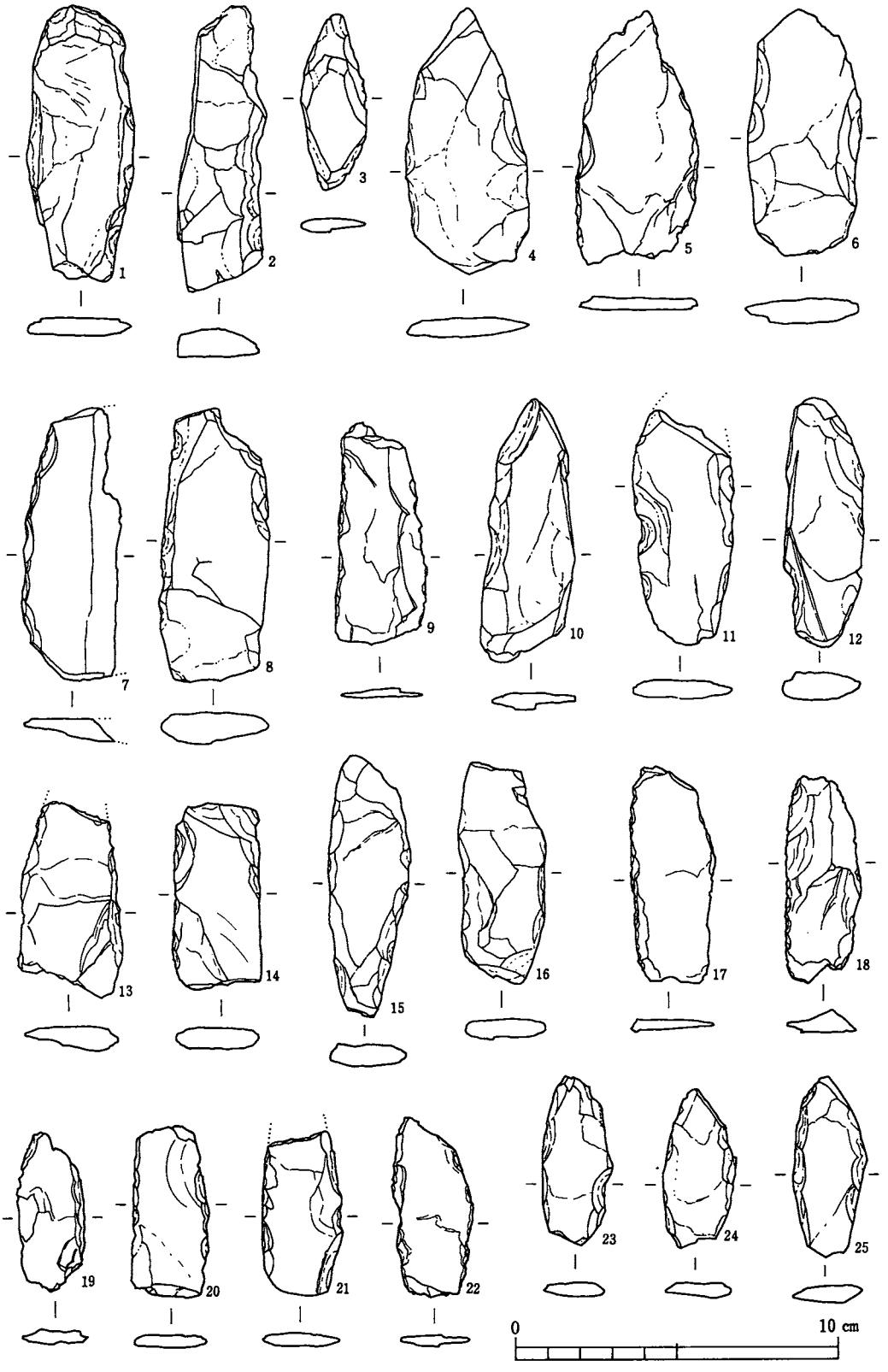
これらの大半は、荒割りにした剥片の両側面に打調整を加えて尖頭形に整えたものである。この場合、底辺や側辺の一部には打調整を加えず、剥離面をそのまま利用しているものもみられる。この段階のもので最も大きなものは幅3.3㎝、長さ8.2㎝を測り、小さなものは幅2㎝、長さ5㎝を測る。

中に2点（第22図63・64）だけ僅かに研磨されているものが含まれているが、表面がかなり風化しており、擦痕は観察できない。

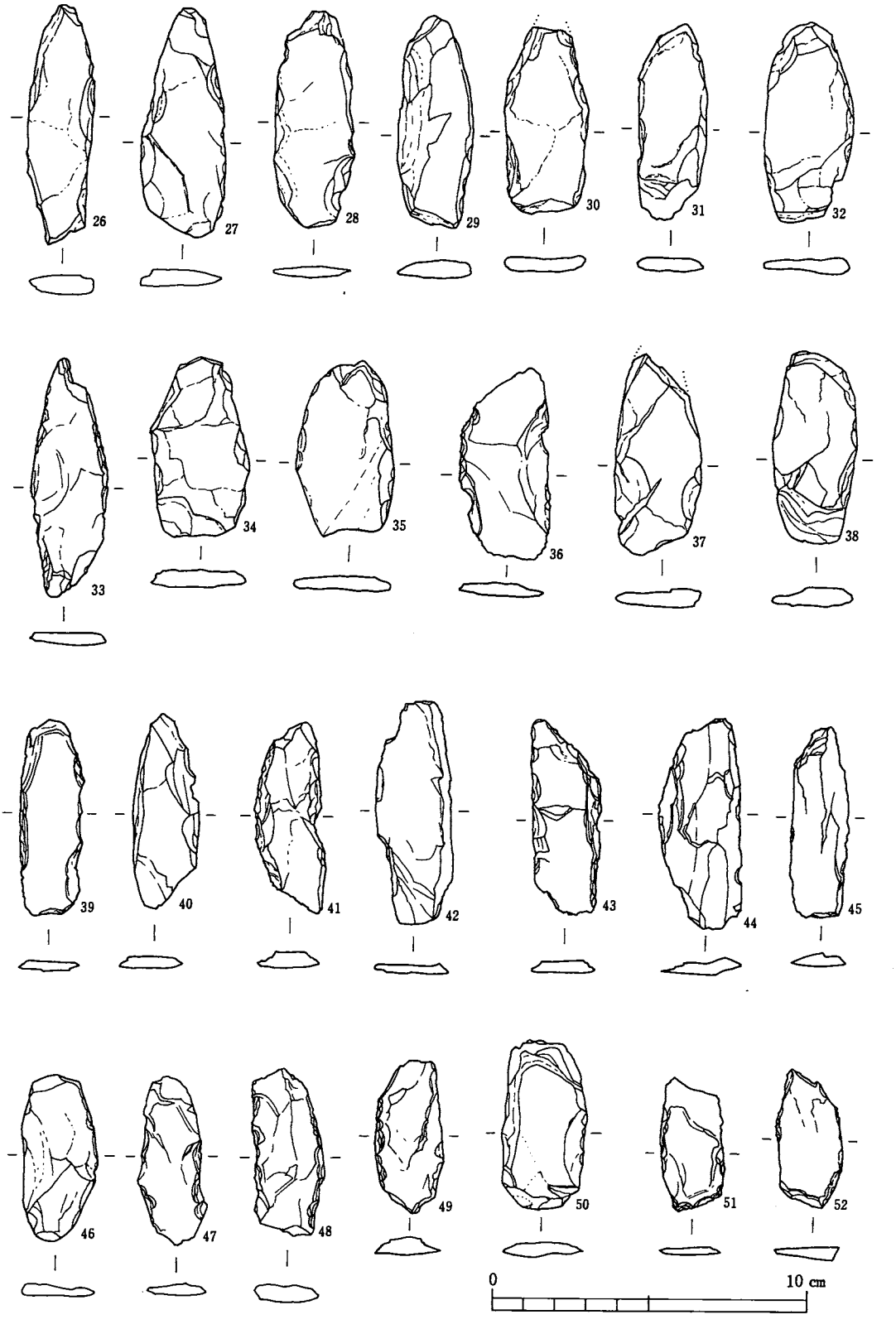
これらの石材[註2]は、小豆色をした千枚岩質粘板岩が7点と、他はすべて緑灰色の千枚岩質酸性凝灰岩である。



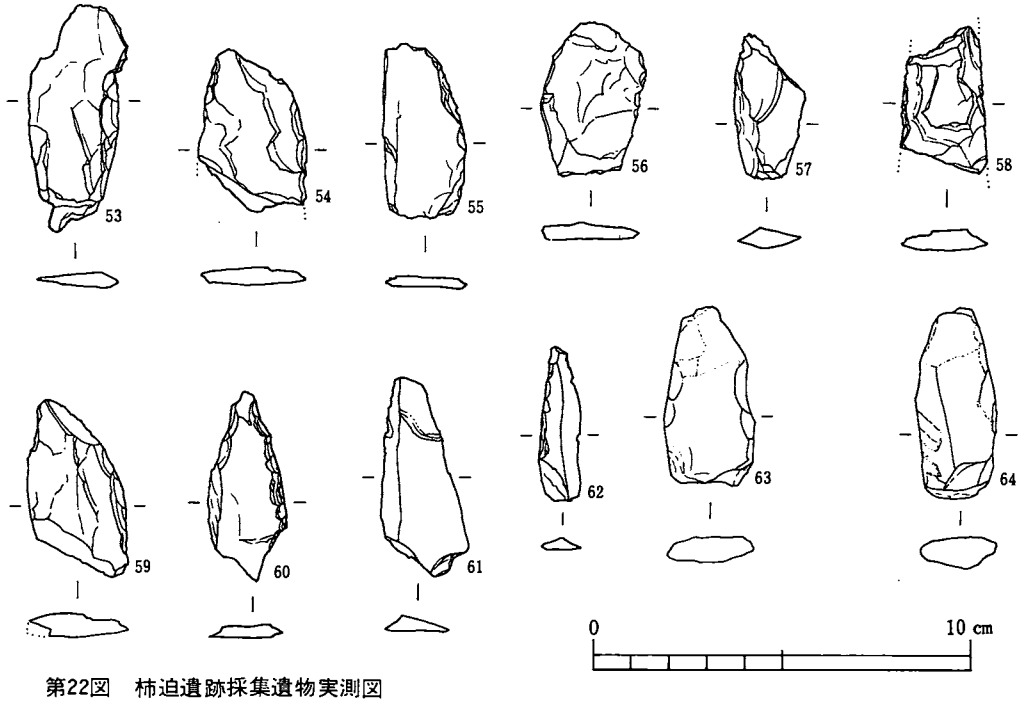
第19図　柿迫遺跡出土遺物実測図



第20図　柿迫遺跡採集遺物実測図



第21図　柿迫遺跡採集遺物実測図



第22図　柿迫遺跡採集遺物実測図

3．小　　結

佐藤氏所蔵の磨製石鏃未製品の出土地の確認調査の結果、弥生時代の遺構・遺物は皆無で、押型文土器の包含層を確認するに止った。

その原因は、弥生時代の包含層は削平されてしまったものとの結論に達した。

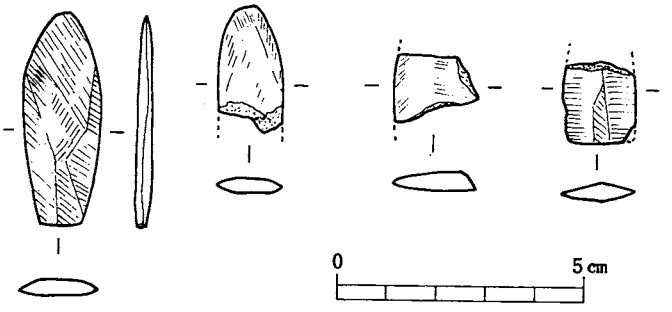
発掘地点の層序との比較のために、周辺部の比較的良好な崖断面等で層序の観察を行ったが、その観察結果は①表土又は耕作土、②黒色土、③パミス、④褐色土、⑤黒色土、⑥褐色土、⑦ロームの順となる。これを発掘地点と対比すると、④～⑦が対応する。

すなわち、発掘地点においては①～③、地点によっては④の一部が削平された状態を示している。このことは、大正６年頃、水路の開削により原野を開墾し当該地はかなりの地下げがあったという話と符合する。

先に述べた周辺地域の基本的な層序では、③パミス層が縄文時代前期前半と後半の間層となることが大分県西部や熊本県東部の調査結果[註3]で明らかになっている。また弥生時代の包含層は②黒色土である。

したがって、磨製石鏃未製品を出土した柿迫遺跡は大正６年頃の開墾によって消滅したものと考えられる。それにしても、調査期間中には関係遺物が１点も出土せず、表採もできなかっ

たところから、あるいは地点が異なるのではないかとの疑いも常に抱いていたが、昭和51年現地を踏査した高木正文氏が同地点より佐藤氏所蔵の未製品と同じ石材の石片3点を採集したということであり、上記の結論に達したものである。



第23図　男原遺跡採集磨製石鏃実測図

このように、磨製石鏃製造の年代や製作工程に関しては何ら資料を得ることができなかったが、この周辺には他にも2遺跡（男原遺跡・前畑遺跡）から磨製石鏃あるいは未製品が出土しており、今後も発見される可能性は強い。

男原遺跡（第16図）出土の磨製石鏃は完成品で、4点（第23図）が採集され、永秀寺に所蔵されている。柿迫遺跡とは約300 mの近距離に位置する。この石鏃は柿迫遺跡出土の未製品とは石材が異なり、多元的に磨製石鏃が製作されていたことを示している。

前畑遺跡（第44図）では未製品が発見されている（前畑遺跡については第Ⅳ章－Ⅲ参照）。

柿迫遺跡における磨製石鏃製作の具体相については、上述のように明らかにすることはできなかったが、今後周辺地域の調査が進めばより明確化されるものと考える。

註1　発掘地の西側の水路が開削されたのが大正6年頃で、これによって原野を開墾したという。

註2　石材の同定は、専門調査員・千藤忠昌教授（熊本大学理学部）による。

註3　牧尾義則・清水宗昭・烏養孝好・山口将仁『菅生台地と周辺の遺跡』大分県竹田地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ、竹田市教育委員会、昭和52年。

清水宗昭・坂本嘉弘・橋爪啓史・藤田和夫『二本木遺跡発掘調査概報』、大野町教育委員会、昭和52年。

桑原憲彰・西田道世・松村道博・瀬丸敬二・勢田広行『中後迫遺跡調査報告』、九州電力株力株式会社・中後迫遺跡調査団、昭和53年。

【付記1】　柿迫遺跡出土の磨製石鏃未製品の一部を、佐藤氏より譲り受けて高島忠平・下條信行両氏も保管されている旨、両氏より教示を受けた。

【付記2】　島津義昭氏は、昭和50年9月、調査地点から黒髪式土器の口縁部（1点）を採集したとのことである。当該遺跡における磨製石鏃製造の年代を示すものと考えられる重要な資料である。

第Ⅳ章　遺　跡　解　説

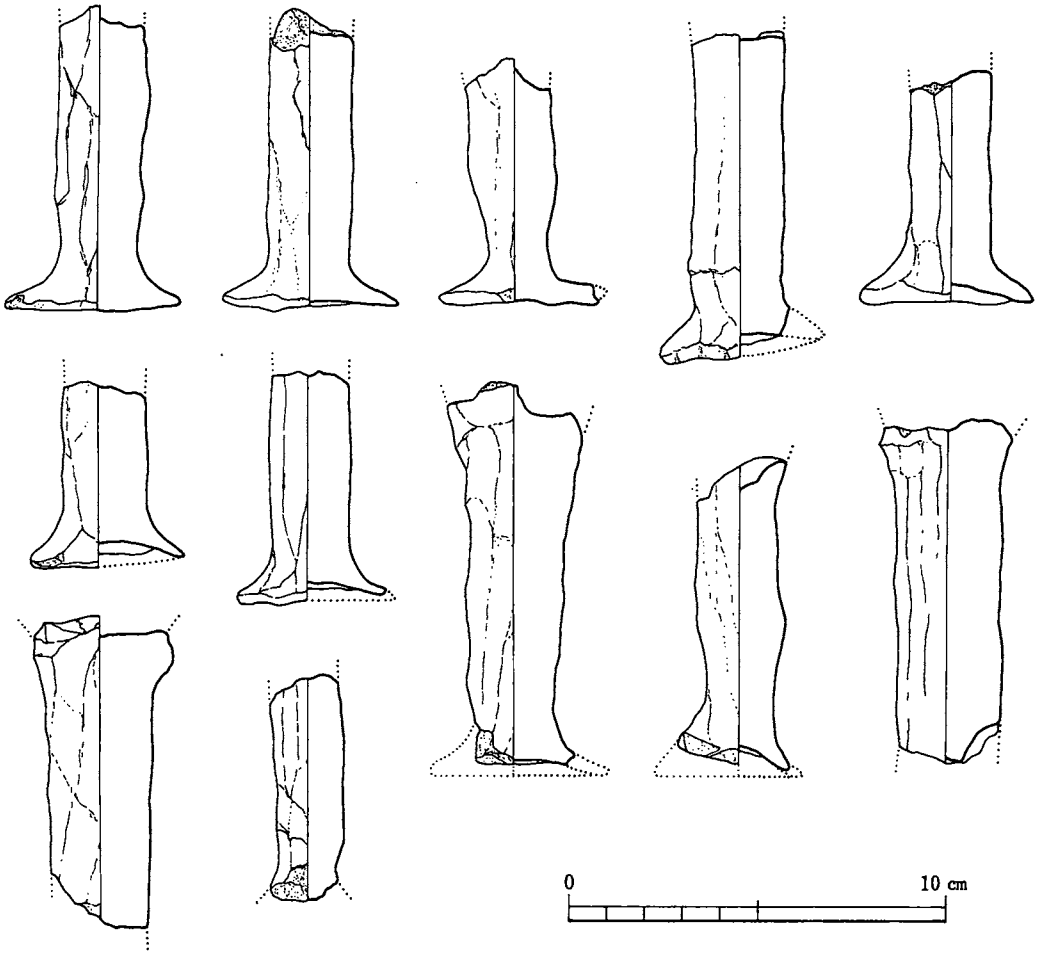
Ⅰ　製塩遺跡

1．大田尾遺跡　①〔宇土郡三角町大田尾字仏天川・大川〕

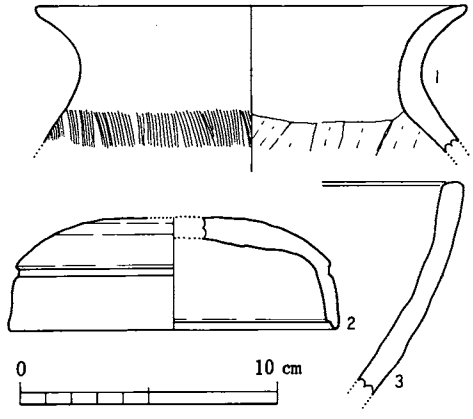
宇土半島の北海岸、大田尾海水浴場の南側に開折された谷の標高10ｍ強の緩斜面に立地する。

仏天川を間に、東側の字大川と西側の字仏天川にかけて遺物の散布がみられるが、川の西側が量的に多く、遺跡の中心は西側にあるものと考えられる。

昭和39年、ミカン園造成にあたって土器類、貝層が出現し、報告を受けた熊本女子大・乙益重隆氏（現国学院大学教授）により現地調査が実施され、古墳時代の製塩遺跡として注目されるに至った。



第24図　大田尾遺跡採集製塩土器実測図



第25図　大田尾遺跡採集土器実測図

昭和39年３月には岡山大学・近藤義郎氏らの試掘調査が実施され、その成果は沖の原遺跡の調査結果とともに公表[註1]されている。

また、これと前後して、宇土高校や三島格氏により遺物が採集されている。

現地はミカン園や一部宅地、菜園となっており、現在でも遺物の散布をみる。

第24･25図に示したものは、宇土高校所蔵の大田尾遺跡採集品で、すべて「ＯＴＯ・Ｓ、39・８採集」との注記がみられる。

近藤氏の試掘成果により、製塩の年代は須恵器の型式でⅢ期後半に中心があったと考えられるが、第25図２の坏蓋と３の大型鉢型土器は注目に値する。すなわち、坏蓋は古い様相を呈するもので、製塩土器との共伴関係は不明であるが、大田尾遺跡における製塩の開始期がこの時期にまで遡る可能性も残しておかなければならない。

また、大型の鉢は全形を知り得ないが、他の製塩土器と同様な色調（赤紫色）に二次的に変色しており、古代の製塩土器の可能性も考えられる[註2]。宇土高校の所蔵品の中には、少数ではあるが、年代の下る土師器の高坏や盤、滑石製石鍋の破片も含まれ、平安期の包含層が重複しているものとみられ、上記の鉢型土器もこの時期のものと考えられる。宇土高校に所蔵されている製塩土器（第24図）は脚部片が多く、わずかに椀部片を含んでいる。

大田尾遺跡周辺の古墳時代遺跡としては谷奥にある大田尾横穴群[註3]、谷の東斜面にある松本古墳[註4]（箱式石棺）が比較的近距離に所在する。また、北東約800 ｍに矢筈古墳（箱式石棺）、北東約2.1 ㎞に最近発掘された装飾古墳・小田良（おだら）古墳がある。

２．松橋大野貝塚周辺　②〔下益城郡松橋町大野字前田〕

松橋大野貝塚は台地上に営まれた縄文後・晩期を主体とする広大な貝塚である。三島格氏、松橋町教育委員会の調査がある。

高木恭二氏の教示によれば、宇土高校所蔵の大野貝塚採集品の中に天草式製塩土器の脚部片が１点あったといい、松橋大野貝塚周辺に製塩遺跡の所在する可能性が強い。

現在のところ、最も内陸部での製塩土器出土地である。

３．黒田遺跡　③〔宇土郡不知火町永尾字黒田〕

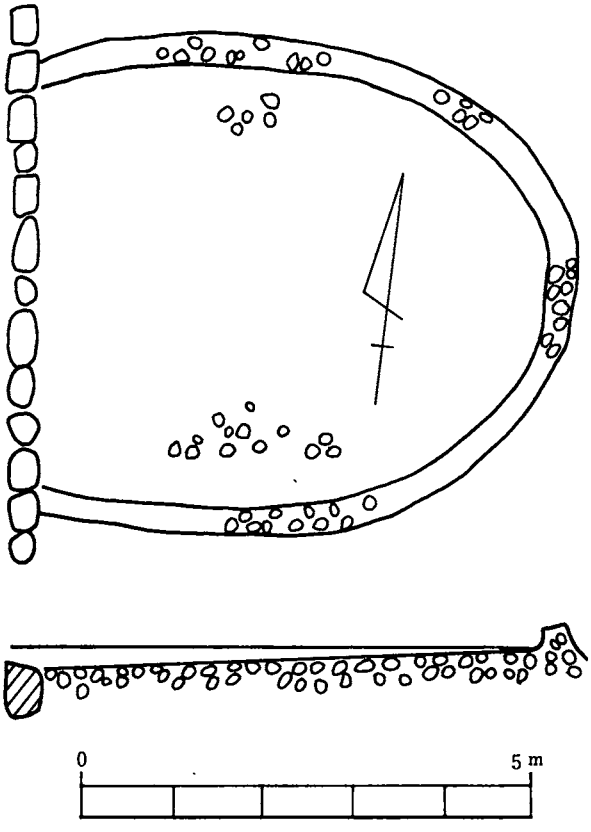
宇土半島の基部に近い南岸の黒田の鼻と鬼崎の鼻の間に開析された小さな谷に立地する。

現在谷口の部分が埋立てられ、海岸線から約200 mの地点にあるが、本来は遺跡の真近に海岸線があったと考えられる。

昭和41年9月、「不知火町史」編纂事業の一環として、坂本経堯氏による確認調査が実施され、製塩炉（第26図）が検出されたと報告[註5]されている。

遺構は畑の地表下約15cmの深さにあり、西側の一辺は石列が並び、東西約5.6 m、南北約4 mの馬蹄形を呈する。周囲の壁がやや高くなり、東から西に向けてゆるやかに傾斜する。床は海岸礫を敷き粘土で固めたもので、焼けてしまっていたという。

坂本氏は、天草式製塩土器に類似したものが出土したという地主談により、上記の遺構を製塩炉と判断されているが、調査によっては製塩土器が確認されていない。



第26図　黒田遺跡遺構略測図
（坂本「不知火町史」による）

今後の課題として、炉と製塩土器の関係を明らかにする必要がある。

年代についても不明で、調査者は「製塩の年代は、天草沖の原製塩時代に準じて古墳時代後期7世紀に比定されるが、後記するようにこの付近の畑から、弥生後期の野辺田式土器と古墳時代前期の土師器が採取されているので、製塩の初期は弥生時代にさかのぼり、長年月にわたったものであろう。」とされているが、大田尾・沖の原・出来町の各製塩遺跡の調査成果からみれば6世紀代の可能性が強く、弥生時代には遡り得ないとみた方が妥当だろう。

また、現地を踏査したところ、1・2年前に畑地にミカンが植え付けてあり、樹木が成長すれば遺構が破壊される恐れがある。炉跡が製塩炉であれば、天草式製塩土器に伴う唯一の資料であり、早急な対策が望まれる。

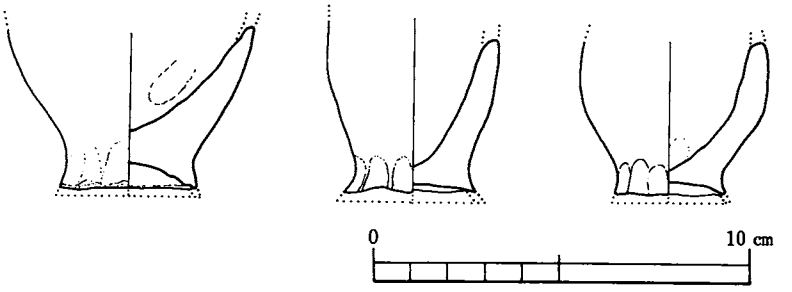
4．小鹿里遺跡　④〔宇土郡三角町中村字金桁〕

塩屋浦遺跡　⑤〔宇土郡三角町波多字塩屋浦〕

いずれも参考地であるが、枝森久一氏（三角町文化財保護委員）によれば製塩土器が出土したという。

小鹿里遺跡は小丘陵の裾に位置し、かって小さな洞穴から短脚の土器片が多数出土したとい

う。現在は崖崩れにより埋没しており、遺物の散布等はみられない。



第27図　塩屋浦遺跡出土土器実測図

塩屋浦遺跡は現在の三角東小学校の敷地で、波多川の谷に面した丘陵の東側裾に位置する。昭和46年、同小学校のプール工事に際して多量の土器が出土し、天草式製塩土器も出土したという。現在同小学校には小型手捏土器（第27図）と土師器の甕の底部が保管されているが、製塩土器をはじめ大半は散逸してしまっている。製塩土器と手捏土器が共伴するものであれば、製塩に伴う祭祀として注目すべきことである。

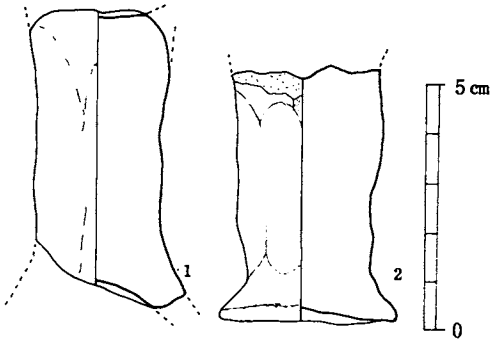
この２遺跡については、現在のところ製塩遺跡としての確証はなく、確認調査の必要があろう。

５．串　遺　跡　⑥〔天草郡大矢野町上字江後〕

小波戸遺跡　⑦〔天草郡大矢野町上字小波戸〕

天草諸島の大矢野島の２カ所で阿部堅二氏により製塩土器が各１点づつ採集されている。

串遺跡は大矢野島の北西に湾入する串湾の南岸に位置し、石斧・製塩土器脚部片（第28図）・須恵器片が採集されている。製塩土器は天草式製塩土器の脚柱部で、須恵器の坏はII～IIIA期のものである。



第28図　串(1)・小波戸(2)遺跡採集製塩土器実測図

串湾の沿岸部には成合津（なろうず）遺跡・成合津古墳・女鹿串古墳（めがくし）[註6]などが知られている。

小波戸遺跡は大矢野島の西海岸に位置し、縄文時代の土器・石器とともに製塩土器脚部片（第28図）・土師器・須恵器が採集されている。これらの遺物は海岸部から海底（満潮時）にかけて採集されたという。

小波戸遺跡の西方には犬飼横穴（いんがえり）群が知られている程度で、近隣の古墳時代遺跡は不明な点が多い。

6．中ノ尾製塩遺跡　⑧〔天草郡五和町御領字中ノ尾〕

第29図　中ノ尾遺跡位置図

天草下島の東海岸部の、御領漁港の北西にある谷の北側丘陵の緩斜面に位置する（第29図）。この谷に沿うての現海岸までは約1㎞を測り、標高は約15ｍである。水平的な海岸線の移動は考えられるが、県下の製塩遺跡では最も高位に位置する。

息峠焼窯元の岡田義孝氏により土器類が採集され、隈昭志氏が実見して天草式製塩土器と土師器であったことを確認しているが詳細は不明である。

当該遺跡の東南約400ｍには、黒髪式土器・土師器・須恵器を出土する中ノ尾遺跡があり、これとの混同を避けるため中ノ尾製塩遺跡とした。

7．沖の原遺跡　⑨〔天草郡五和町二江字沖の原〕

天草下島の北端に形成された三角形の砂嘴に立地する。砂嘴の北側には通詞島が浮び、現在は通詞大橋で結ばれている。

砂嘴の基部と東西に走る国道324号線より北側は全面遺跡であるといっても過言ではなく、縄文時代の貝塚（沖の原貝塚）、古墳時代の製塩遺跡、古墳などがある。

沖の原の遺跡は、昭和33年頃から地元の柳原高太郎氏により注目され、昭和34年8月の第1次調査を始めとして4次にわたる調査が実施されている。

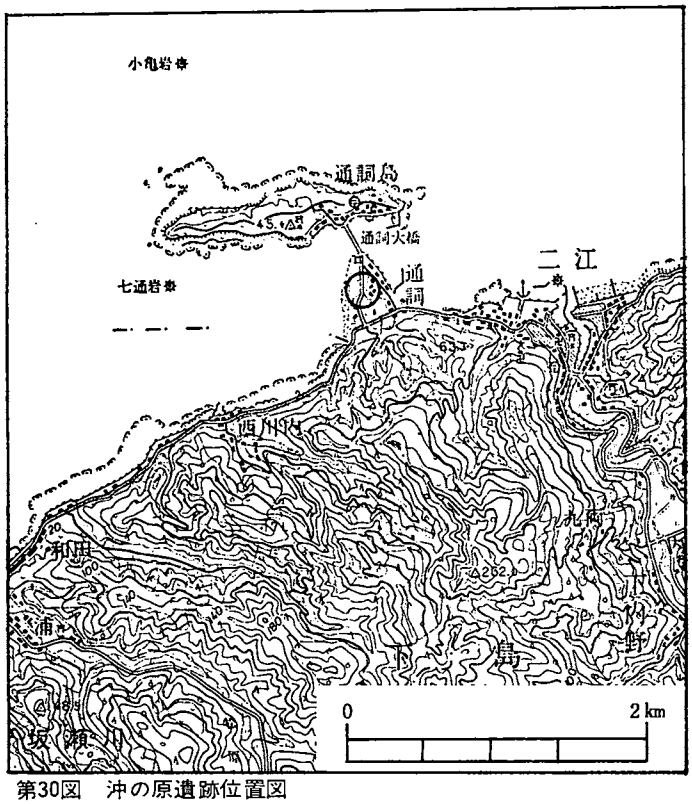
昭和39年には、近藤義郎氏らにより製塩遺跡を中心とした調査が実施され、多量の製塩土器とともに土師器・須恵器が出土している。この報告の中で、天草式（製塩）土器が設定された。

近藤氏の報文によれば、製塩土器片の散布の中心は砂嘴の北端に近い西側の、南北190ｍ、

東西約40～80 m の範囲で、その南側にも点在するとのことである。

すなわち、現在国道324号線から通詞大橋に至る取り付け道路が走っているが、この道路に沿う北側の一帯、砂嘴の北西部分が製塩土器出土の中心である。

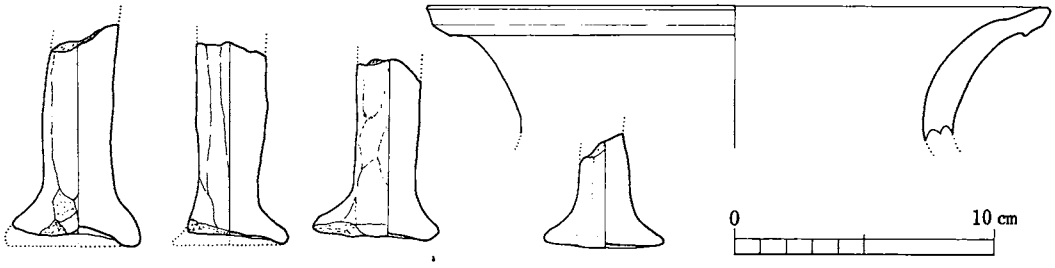
出土した製塩土器は脚部の高・径により２群(第Ⅰ群・第Ⅱ群）に分類され、第Ⅰ群から第Ⅱ群への変遷、そして沖の原遺跡における製塩の盛行は第Ⅱ群の時期であるとされている。その時期は６世紀中葉で、第Ⅰ群はわずかに先行するとされた。



第30図　沖の原遺跡位置図

沖の原の砂嘴には２基の古墳があり、北側のものを沖の原西古墳、南側の基部に位置するものを沖の原東古墳と呼ぶ。いずれも破壊を受けており、詳細は不明である。

また、砂嘴の先端から約 170 m 幅の瀬戸を隔てた通詞島の東端にも２基（通詞島北古墳・通詞島南古墳）の古墳がある。



第31図　沖の原遺跡採集製塩土器・須恵器実測図

現在でも砂嘴一帯には広範に遺物の散布がみられる。第31図に示したのは、昭和53年6月現地踏査の時採集したもので、他に縄文式土器・石錘・獣骨・貝類、計50点を採集した。

遺跡の大半は畑地として利用されているが、近年、通詞大橋の架橋、国道324号線からの取付道路の建設等もあり、宅地造成等が徐々に増加しつつある。沖の原貝塚（縄文時代貝塚）・沖の原遺跡（古墳時代製塩遺跡）ともに重要な遺跡であり、何らかの保護策を講じる必要があろう。

8．出来町遺跡 ⑩〔天草郡苓北町富岡字首塚〕

天草下島の西北端に突出した富岡半島の砂丘上に営まれた遺跡である。

昭和45年、電話柱埋設工事に伴って天草式製塩土器片が採集されており、今回確認調査を実施した。詳細については第Ⅲ章－Ⅰを参照されたい。

註1　近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。

註2　専門調査員・近藤義郎氏の指摘があった。

註3　5基が開口している。他にも埋没しているものがあるようである。

註4　宅地造成によって消滅しているが、金環・鉄剣が出土したという。高木恭二氏教示。

註5　坂本経堯「古代の生産」『不知火町史』、昭和47年。

註6　坂本経堯・経昌『天草の古代』、昭和46年。

阿部堅二・今井義量・三島格・松本健郎他「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号、昭和52年。

II　製鉄遺跡

1．小岱山製鉄遺跡群（1－2図）

(1)　栗木谷遺跡　①〔荒尾市上平山字栗木谷〕

小代山北西麓の金屋地区に栗木谷・古川・竜光寺の3遺跡があり、さらに詳細な踏査を実施すれば遺跡数は増加するものと思われる。

関川の一支流の上流部に位置し、水路の中にスラグの散布がみられる。標高約50ｍの丘陵裾部の平担面にもスラグの散布がみられるが量は多くない。遺跡の大半は埋没している可能性が強い。

(2)　古川遺跡　②〔荒尾市上平山字古川〕

栗木谷遺跡の下流約250ｍ、矢札池の西方に位置し、標高は40ｍ強を測る。遺跡地一帯は水田化されており、水田の耕作土下に焼土面が観察される。散布するスラグの量は多くなく、小塊が多い。

なお、栗木谷遺跡と古川遺跡のほぼ中間点の、矢札池の北東からもスラグが出土したと伝えられ、遺跡の存在が考えられる。

(3)　竜光寺遺跡　③〔荒尾市上平山字東小松原〕

県道荒尾・南関線の金屋橋から関川の支流をさかのぼると、高野山真言宗の竜光寺という行場がある。その竜光寺に至る道筋に2地点にわたってスラグの散布、焼土がみられる。遺跡の北側は10ｍ前後の谷となり、谷川が流れている。

上流側をA地点と仮称し、A地点採集のスラグの分析を依頼した結果は砂鉄を原料とした製錬滓との判定[註1]が出されている。B地点はA地点の北西方約80ｍにあり、焼土や炭灰層が路面に露呈している。

A・B2地点は、あるいは別個に遺跡を成す可能性もある。

(4)　古城谷遺跡　④〔荒尾市平山字薬師上〕

荒尾市小路から小岱山の主峰・筒ケ谷の北西方に深い谷が形成され、谷川が流れ関川に注いでいる。この谷に古城谷・薬師前の2遺跡がある。

古城谷遺跡の位置する一帯は金糞谷とも呼ばれ、多量のスラグ・ふいごの羽口片が散乱する。標高160～200ｍ、長さ約200ｍの広範囲にわたっており、小岱山製鉄遺跡群の中では最大の規模である。ただし、4～5地区に細分はできる。

昭和50年、市道拡幅工事に伴ってその一部が発掘され、柱穴・炉跡をはじめ多量のスラグ・ふいごの羽口・土師器・瓦器・砂鉄等が出土している。とくに炉跡は、平面形が円又は楕円形を呈するボール炉の形態で、中には一方からふいごの羽口を装着した痕跡がみられたという[註2]。

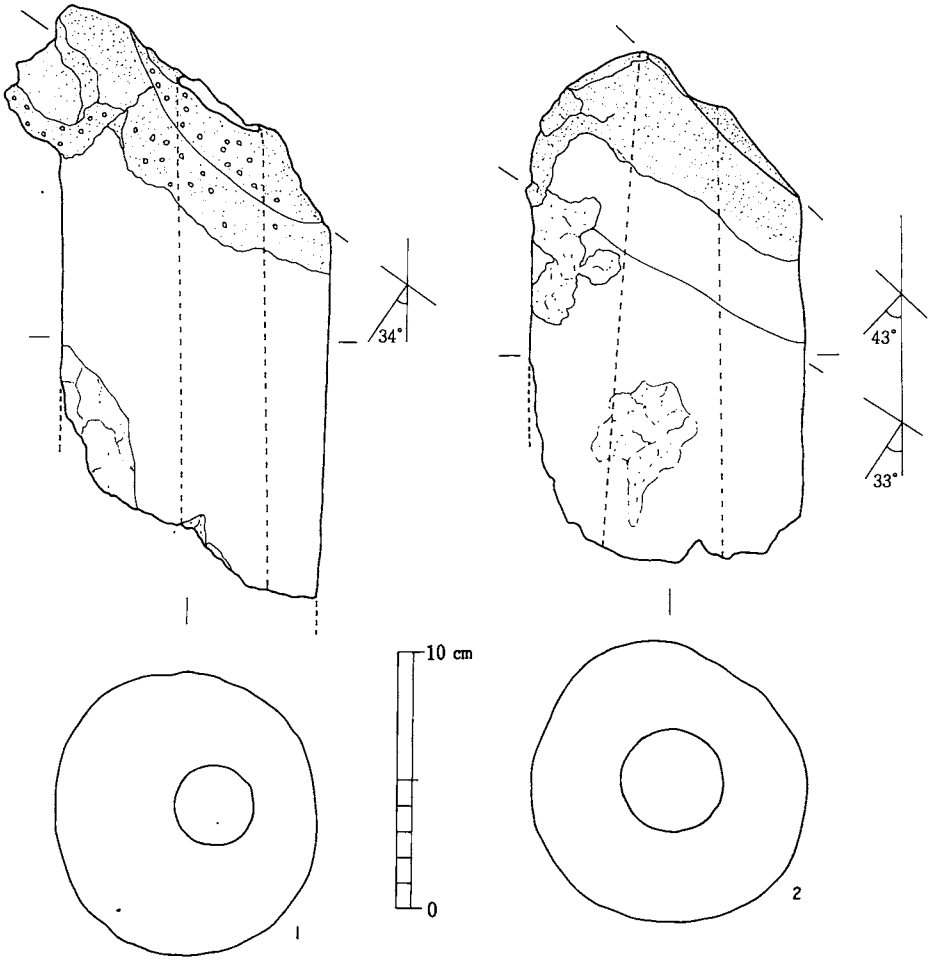
出土した土器類はたたらもとA遺跡と同様のもので、13世紀代に比定されよう。

(5) 薬師の前遺跡 ⑤〔荒尾市平山字薬師の前〕

古城谷遺跡の西方約600 ｍに位置する。「阿蘇どんの墓」と呼ばれる阿蘇惟富の供養碑や中世古塔群のある薬師前寺跡の南方に隣接する。

遺跡地一帯はミカン園に開墾され、崖の断面に焼土や炭灰層が観察される。開墾によって切り崩された土が一カ所に積みあげられており、スラグや多量の須恵器片を含んでいる。年代の前後関係は不明であるが、須恵器窯と製鉄跡が複合している遺跡である。

開墾時に出土したという大型のふいごの羽口（第32図）が荒尾市教育委員会に保管されている。第32図１は外径が10～11㎝、孔径は3.2㎝前後を測る。２は外径10.5㎝前後、孔径4.5～3.1㎝前後を測る。スラグの付着状況や変色の状態から装着角度を測定すると、１は約34°、２は測定場所によって異なり、33°と43°を測る。



第32図　薬師の前遺跡採集ふいごの羽口実測図

(6) **松尾遺跡** ⑥〔荒尾市平山字松尾〕

前岳の北西麓、浦池という溜池の東南約110 mに位置する。水路にスラグ・須恵器の散乱がみられ、製鉄遺跡は南側の一段高い丘陵先端部に位置するものとみられるが水田化されている。須恵器の破片はさらに上流部約100 mに位置する松尾窯跡からの流失と考えられる。坂本経堯氏によればふいごの羽口も出土[註3]したという。

(7) **南山浦遺跡** ⑦〔荒尾市府本字南山浦〕

坂本経堯氏により北山浦遺跡とされていたものであるが、小字を確認のうえ南山浦遺跡と改称した。

前岳の西南麓の府本の谷に所在する遺跡群の一つである。

遺跡地一帯は農道や果樹園造成によって大幅に改変されているが、付近一帯にはスラグ・ふいごの羽口・須恵器片が散布している。遺跡の南側には須恵器の窯跡が重複しているが、これも破壊が進んでいる。

(8) **山田遺跡** ⑧〔荒尾市府本字山田〕

府本小群の一つで、前岳の西南の丘陵にある。洗出窯跡群に登る農道の崖面にスラグが含まれ、スラグの小塊が少量散乱している。

(9) **前岳遺跡** ⑨〔荒尾市府本字前岳〕

坂本経堯氏によればスラグとふいごの羽口が出土したという[註4]が、現状では所在を確認できない。

(10) **山の神A遺跡** ⑩〔荒尾市府本字小代〕

府本の谷の奥の道路脇に文化11年（1814）に建立された山の神が祀られている。この山の神の南側一帯が遺跡であるが、遺跡の大半は農道により削平され、路面にスラグやふいごの羽口片が散乱している。中には炉跡とみられる焼土とスラグの集合した場所が2～3カ所ある。これらの散布する範囲は路面でみるかぎり南北約10 m、東西約50 mの広範囲に及ぶ。

かって、坂本経堯氏により瓦器椀片が採集されており、平安末～鎌倉前半の可能性が強い。

(11) **山の神B遺跡** ⑪〔荒尾市府本字小代〕

山の神A遺跡の所在する谷と、その北側の谷が合わさる地点で、A遺跡とは約60 mの距離を有する。一部にスラグの散布をみるが、大半は昭和37年の水害、その後の土砂採取で埋没してしまっている。

(12) **麻畠A遺跡** ⑫〔荒尾市府本字小代〕

山の神遺跡からやや西へ下った所から、北に向けて細長い谷が派生する。この谷は通称麻畠と呼ばれており、3カ所に製鉄遺跡が所在する。最も奥のものを麻畠A、中位の谷が大きく東へ屈曲する地点のものを麻畠B、谷の合流点近くのものを斧磨遺跡と呼ぶ。

麻畠A遺跡は、合流点から約350 m程さかのぼった地点で、標高は180～190 mを測る。谷

底の平担面に多量のスラグがあり、ふいごの羽口片・炉壁片が混じっている。

奥地にあるため遺跡の保存はきわめて良く、スラグも40～50cmの大塊をはじめ量が多い。幅約20m、長さ約30mの平担面の一面に遺物が散布し、30m程南の崖の断面には長さ約15m、厚さ約50cmの黒色炭灰層の断面が露呈している。

遺跡の規模、遺存状態からみて第一級の遺跡である。

⑬　麻畠B遺跡　⑬〔荒尾市府本字小代〕

谷の合流点から約140mさかのぼると、麻畠の谷は大きく東へカーブする。このカーブする地点がB遺跡で、スラグの散布があり、山道の崖面には黒色炭灰層が露呈している。遺跡の保存状態は良い。

⑭　斧磨遺跡　⑭〔荒尾市府本字小代〕

谷の合流点からわずかにさかのぼった地点を俗に斧磨（ちゅんとぎ）と呼んでいる。この地点に2カ所にわたって遺物の散布を認める。

上流側のA地点は、山道の崖面に黒色炭灰層が露呈し、スラグの散布が認められる。A地点の方は保存状態も良い。

B地点は遺物量もきわめて少なく、道路等で壊滅している。わずかにスラグの細粒を認める程度である。

斧磨遺跡はかって坂本経堯氏により試掘され、滑石製石鍋、用途不明の滑石製品が出土している。

⑮　苑瓦音寺（かんのんじ）遺跡　⑮〔荒尾市府本字土井内〕

麻畠の谷の一つ西側の谷に位置する。谷をわずかにさかのぼると、苑瓦音寺池があり、この池の北東端一帯が遺跡である。

遺跡の中心は南北にのびる丘陵の西側斜面から丘陵裾部にかけてと考えられる。丘陵の西斜面を開削して農道が設けられており、遺物の散布は農道の西側に多いが、地形等から考えて炉跡等の遺構は東側の斜面にあると考えられる。この斜面には適当な広さの平担面があり、遺構の遺存する可能性がある。

採集される遺物にはスラグ・ふいごの羽口・土師器がある。スラグはかって分析を行ったが砂鉄を原料とした製錬滓との結果[註5]が出ている。ふいごの羽口は細片が多いが、島根県の和鋼記念館には完形に近いものが1点展示されている。採集した土師器は細片であるが、糸切底の土師器皿で、年代を暗示するものといえよう。また、かって坂本経堯氏により瓦器椀片数点が採集されている。これらの土器類から、やはり平安末～鎌倉前半の可能性が強い。

⑯　苔谷遺跡　⑯〔荒尾市樺字小葉山〕

菜切川の流域の樺地区には5遺跡が数えられるが、昭和35年頃からミカン園造成がさかんで所在不明なもの、消滅したものも多い。

苔谷遺跡は、坂本経堯氏によればスラグ・ふいごの羽口が出土したとある。[註6] 2日間を費して現地一帯を踏査したが所在を確認できなかった。ミカン園造成のとき金糞が出たとの話もありあるいは消滅したのかもしれない。

(17) 金糞谷遺跡 ⑰〔荒尾市樺字芦葉敷〕

坂本経堯氏によりスラグの出土が指摘されているが、[註7] 苔谷同様所在が不明である。

(18) たたらもとA遺跡 ⑱〔荒尾市樺字鑪納本〕

樺の集落から　観音岳に向けて市道昆沙門・四反田線がのびている。たたらもとA遺跡は、北から南にのびる丘陵がこの市道によって切られる地点に位置し、南東約200 mに妙巌寺が位置する。

坂本経堯氏によれば

> 40年程前に開墾[註8]して畑とした際、「四つのかま」があったが、こわされて、その一址の一部が残っている。丘陵裾の花崗岩を穿りぬいたもので約1 mの側壁と床の一部がある。深さ約70cm、床は中くぼみ上端幅70cm、下端幅25cm、27度の登りである。側壁の一部は積石し内面を粘土で固めてある。内面は強い火気をうけて暗赤褐色となり、下方ほど厚く鉄滓が付着している。

とあるが、現状では炉跡は確認できない。

遺跡の南側の丘陵端の部分は、昭和52年1月～2月、市道拡幅工事に伴って約60m²が調査され、東西約20 m、厚さ2.5 m以上にわたるスラグ・炭灰層の堆積が確認され、ふいごの羽口・土師器・瓦器等が出土している。[註9]

出土したふいごの羽口は、径約10～11cm、孔径4～5cmのもの（第33図1～2）と、径12cm前後、孔径約4cm前後のもの（第33図3～5）との2種がある。さらに、採集品（第33図6）の完形品は一端がラッパ状に開く形態を示している。装着角度の測定できる資料は5点あり、1は39°、2は36°、4は37°、5は37°、6は44°を測る。

遺跡の年代は、出土した土器類から12～13世紀と考えられ、調査時に出土したスラグの分析結果は製錬滓と判定されている。[註10]

(19) たたらもとB遺跡 ⑲〔荒尾市樺字鑪納本〕

A遺跡の西方約200 mの丘陵南裾に位置する。

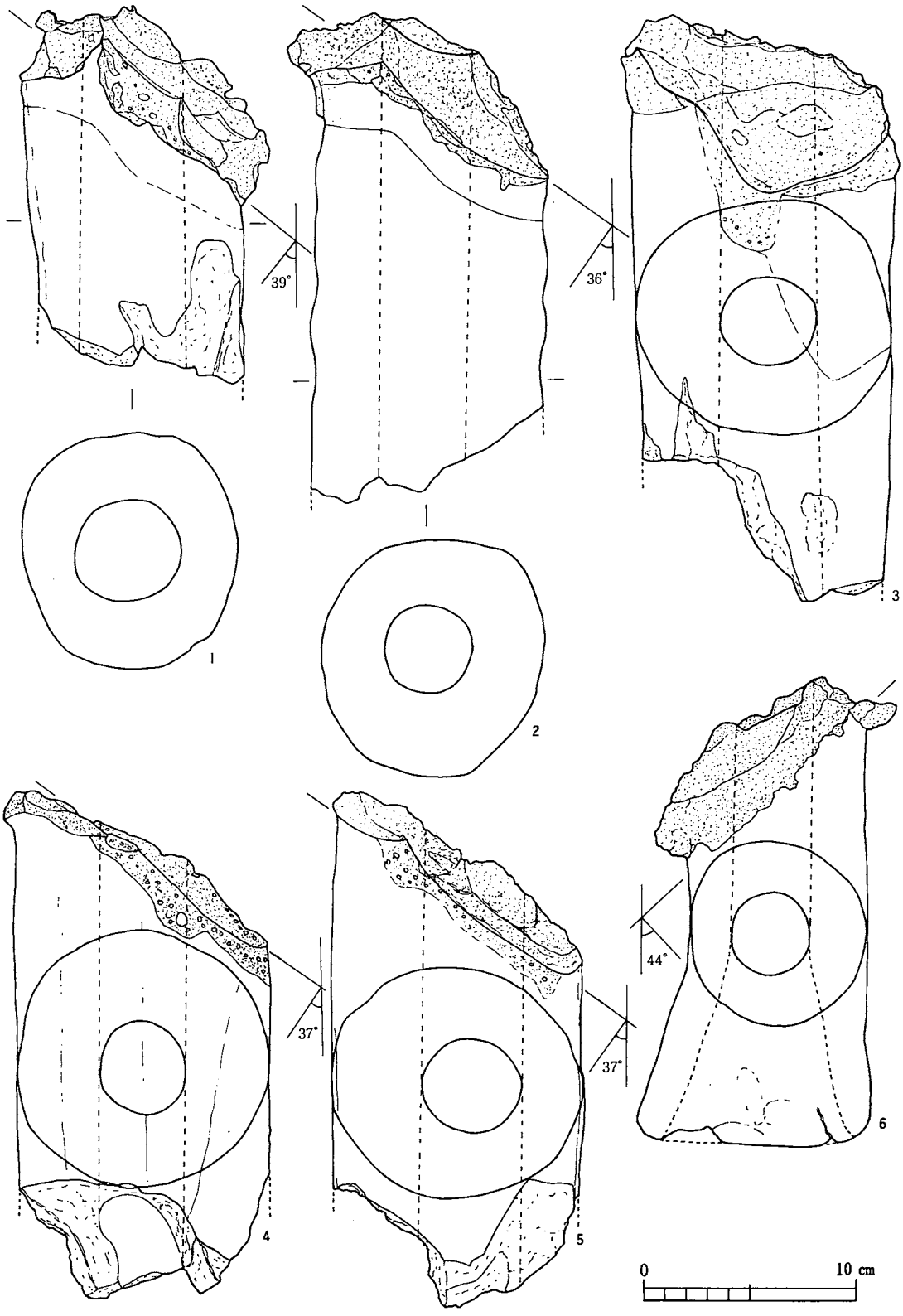
遺物の量は多くなく、わずかにスラグの小塊が採集される程度である。丘陵裾から南側一帯は水田化されており、遺跡が削平されたのか埋没しているのか判定できない。

(20) 金塚遺跡 ⑳〔荒尾市樺字榎原〕

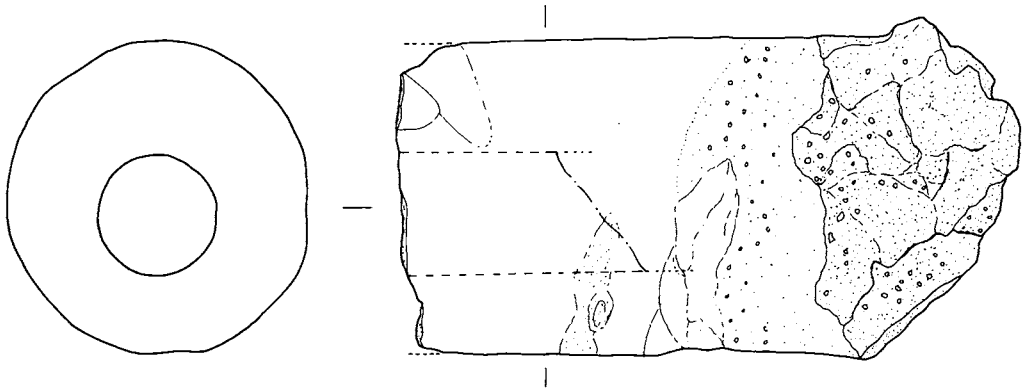
小岱山製鉄遺跡群の中で特異な立地を示す遺跡である。

菜切川の支流である硯川流域の比較的低地に立地し、最も平野部に近い製錬遺跡である。

現地には「金糞天神」と呼ばれる堂が建ち、スラグの散布が認められる。硯川に面する南側



第33図　たたらもとA遺跡出土ふいごの羽口実測図



第34図　金塚遺跡採集ふいごの羽口実測図

の斜面にはスラグの大塊の一部が露出している。

福島作蔵氏によって大型のふいごの羽口（第34図）が採集されており、径12～12.5㎝、孔径4.7㎝前後を測る。他にもふいごの羽口や土器の細片も出土したというが、詳細は不明である。

採集したスラグの分析結果は、砂鉄を原料とした製錬滓と判定[註11]されている。

(21)　ごまのき遺跡　㉑〔荒尾市金山字上焼石〕

小岱山の南端の日の岳（標高208ｍ）の西裾に南北にのびる金山の谷に、坂本経堯氏により2カ所の遺跡が確認[註12]されているが、いずれも所在を確認することができない。

(22)　幸徳田遺跡　㉒〔荒尾市金山字幸徳田〕

金山の谷の奥まった場所とされている。再三にわたって踏査したが所在を確認できない。

(23)　築地小代遺跡　㉖〔玉名市築地字小代〕

日の岳の東側に開析された築地の谷の奥に、築地小代・斧砥の2遺跡がある。

上流部の築地小代遺跡は、小川に沿ってスラグの散布がみられるが、遺跡の詳細については不明である。

(24)　斧砥遺跡　㉗〔玉名市築地字斧砥〕

以前「築地上遺跡」と称していたものである。

丘陵を東にひかえた谷の緩斜面に立地する。現在は杉の植林のために地形が改変されているが、スラグ・ふいごの羽口・土器片・炉壁片が採集される。

昭和46年、偶然の機会に松本が発見し、その後玉名高校考古学部・田添夏喜氏らの踏査があり、それぞれ遺物が採集されている。

今回の踏査でも、スラグ・ふいごの羽口・土器片・炉壁片が採集された。ふいごの羽口は破片が多いが、1個は径9.7㎝前後、孔径4㎝前後を測る。採集した土器には土師器が2点あるが、いずれも細片である。糸切り底の皿と高台坏で、中世まで下降するものと考えられる。

㉕ 蛇ケ谷遺跡 ㉘〔玉名市立願寺字小代〕

玉名市街の北方、標高約160 mの観音岳南側中腹に位置する。

遺跡地一帯は俗に金糞谷と呼ばれる国有原野で、40～50 mの間隔をおいて3地点にわたって遺物が散布する。

昭和27年12月、昭和28年1月、昭和33年に、坂本経堯・田辺哲夫・乙益重隆氏らによって第1地点の発掘調査が実施され、炉跡状の遺構をはじめ多量のスラグ・ふいごの羽口・土器類が出土している。[註13]

検出された炉跡状の遺構は、坂本氏によれば『A3区の基盤に穿たれた「ルツボ形」炉は、径30cm、一角が丕んだ隅丸四角形の平面で、深さ約15cm、倒四角錐状の穴となり、内壁に厚く鉄滓が付着している。炉壁は8cm位の厚さに火熱で固まり、暗赤褐色を呈する。この炉床は熔鉱炉の「湯たまり」であろう。』とある。しかし、長谷川熊彦氏によれば[註14]、田辺哲夫氏提供の資料として「地山の粘土層を楕円（33×22cm）の皿状に掘りくぼめた部分（深さ7cm）に層状をなして多孔質の鉄が付着していたという。」とされ、わずかな差異がある。ともあれ、この構造は荒尾市・古城谷遺跡の遺構と類似したものと考えられる。

スラグは湊秀雄・佐々木稔氏によって分析され、製錬滓との結果が公表されている。[註15]

坂本氏は出土した土器類を大型の土師器、薄手・磨研・堅質の台付碗、糸切底の土師器皿に分類し、奈良時代を中心とした年代と考えられた。長谷川氏報文に掲載された土器の図及び坂本報文の説明によれば、薄手・磨研・堅質の台付埦は最近体系化された瓦器埦と考えられ、長谷川氏が指摘されたとおり平安中期を遡るものではない。厳密な比定は困難であるが、平安後期～鎌倉の範囲に含まれることは確実である。

㉖ 広福寺裏遺跡 ㉙〔玉名市石貫字仁田尾〕

小岱山の東麓に曹洞宗広福寺がある。この裏手の農道工事に際してスラグが出土し、広福寺の仲野俊良住職によって採集されている。

㉗ 六反遺跡 ㉚〔玉名市三ツ川字西原六反〕

小岱山の東側中腹に位置する遺跡の一つで、現状で炉跡の観察できる唯一の例で、昭和51年に県指定史跡となっている。

丘陵の斜面に築かれた炉（第47図）はシャフト型の構造で、長軸120～130cm、短軸約50cmの楕円形プランを呈する。床は約20度の勾配を有し、炉壁の高さは最も良く残っている部分で約85cmを測る。炉壁は強熱によって変質し、内壁にはスラグが付着している。

炉の周辺部は開墾によって削平され、その他の遺構については不明であるが、かって田辺哲夫氏が調査された時、スラグ・ふいごの羽口・土器類が出土したという。炉の構造が明らかな遺跡として注目すべき遺跡である。

⑵⑻ **大谷遺跡** ㉛〔玉名郡南関町宮尾字大谷〕

小岱山の北側中腹の谷に位置し、玉名郡南関町に含まれるが、小岱山の北西側に位置する荒尾市の金屋地区の遺跡群（栗木谷・古川・竜光寺）とは近距離に位置し、これらと一連の遺跡と考えられる。

江戸時代の小岱焼の窯跡の残る南関町宮尾から、筒ケ岳に向けて深い谷が開析されているが、大谷遺跡はこの谷の支谷の谷頭に立地する。

現地踏査では所在を確認できなかったが、坂本経堯氏によれば、[註16]

（前略）丘陵の裾に「三つのかま」があったが、1個を残して開墾された。丘陵斜面の花崗岩を穿りぬいた炉で長さ1.8 m、幅約50cm、下端は崩れているが上端は弧状を呈する。深さ約80cm、床は中くぼみで15度の傾斜をもっている。内壁は強い火気を受けて固い暗褐色に変質し床に近い程濃く鉄滓が付着している。(以下略)

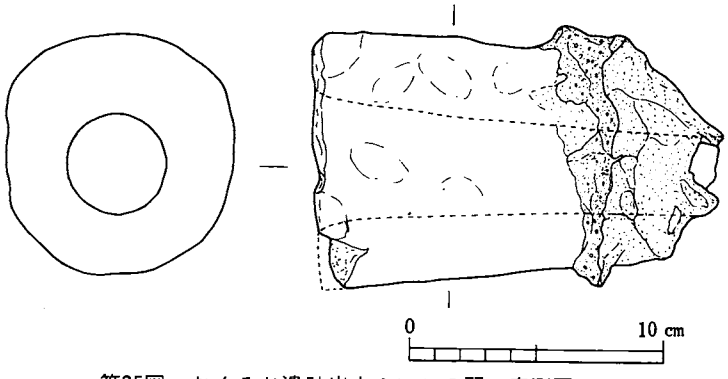
との記載があり、たたらもとA遺跡や六反遺跡との類似性が考えられる。構造としてはシャフト型炉と考えてよかろう。

2．三の岳製鉄遺跡群（1－2図）

金峰火山群の一つ、三の岳（標高681.3 m）の北側中腹から山麓部にかけて分布する遺跡群で、現在の行政区ではすべて玉名郡玉東町に含まれる。現在6遺跡が判明しているが、さらに精密な踏査を実施すれば遺跡数は増加するものと考えられ、東側の植木町、西側の天水町方面にも発見される可能性が強い。

(1) **むくろじ遺跡** ㊳〔玉名郡玉東町原倉字荒強当〕

三の岳の中腹のステップ状の平担面に位置し、多量のスラグが散布している。次の金糞谷とともに、標高300 m前後の高位に位置するものである。



第35図　むくろじ遺跡出土ふいごの羽口実測図

昭和43年、坂本経堯・田辺哲夫・三島格氏らによって調査が実施され、炉体は確認されていないが、炉から流れ出た状態のスラグをはじめ、多量のスラグ・ふいごの羽口・土師器が出土している。

第35図は玉東町教育委員会所蔵のふいごの羽口であるが、先細りの形態を示している。

遺跡の立地やスラグの散布状態から製錬遺跡と考えられていたが、同所採集のスラグの分析結果も砂鉄を原料とした製錬滓という判定[註17]が得られている。

昭和53年9月、現地踏査の折土師器甕片を採集し、それは三角町・柳迫遺跡で出土したものに近似し、平安時代の可能性が強い。

(2) **金糞谷遺跡** ㊴〔玉名郡玉東町原倉字藤原〕

玉東町と天水町の境界に近い、三の岳北西中腹に開析された谷の谷頭に立地する。

昭和43年、むくろじ遺跡と同時に調査が実施され、ほぼ完全な姿の炉体が検出されているがふいごの羽口は装着されておらず発掘区からも出土していない。近接のむくろじ、釜の口両遺跡ではふいごの羽口が出土しており、むくろじ遺跡は量も多い。精錬工程の炉なのか、製錬でも技術系統の異なるものなのか、スラグの分析が望まれるところである。

年代は、出土した土師器から平安時代に比定されている。

調査後炉体は埋め戻され、遺跡全体も良く遺存している。

(3) **釜の口遺跡**㊵〔玉東町原倉字小場〕

標高約200 mの浅い谷の緩斜面に位置する。

付近一帯はミカン園に造成され破壊を受けているが、約50 m四方以上の広範囲に多量のスラグの散乱がみられ、ふいごの羽口片も混じる。一部には焼土・炭灰層も観察される。ミカン園造成時にはふいごの羽口が数本出土したという。

遺跡の立地、スラグの大きさ・量等から製錬遺跡の可能性が強く、しかもかなり大規模な遺跡であったと考えられる。

昭和54年3月の踏査時に土師器の細片を採集したが、積極的な年代論の資料とはなり得ない。

(4) **西原遺跡** ㊶〔玉名郡玉東町原倉字西原〕

上記3遺跡が三の岳中腹の比較的高位に立地するのに対して、以下の3遺跡は山麓に近い丘陵や谷に位置する。

西原遺跡は標高約80 mの丘陵斜面に立地する。付近一帯にはスラグが多量に散布し、杉の植林時に削られたわずかな段差の断面には焼土・炭灰層が露出している。地形からみて、遺跡の中心は東側の丘陵緩斜面にあるものと考えられ、そこは雑木林となっている。おそらく、遺跡の遺存は良好であろう。

(5) **太郎丸権現山遺跡** ㊷〔玉名郡玉東町上白木字太郎丸〕

木葉川の支流・白木川によって開析された谷の東側丘陵斜面に位置する。遺跡地の標高は約60 mで、西側には水田が開けている。

玉東町教育委員会、坂田幸之助氏（玉東町文化財保護委員長）らによって最近新たに発見されたもので、畑の段差の中に多量のスラグが積み込まれている。付近の丘陵斜面にもスラグの

散布がみられ、ふいごの羽口も出土している。

(6) **西安寺寺中尾遺跡** ㊸〔玉名郡玉東町西安寺字寺中尾〕

野田の集落の南側に東西に開けた谷の谷口近くに位置する。

付近一帯は水田化されており、水路や水田面にわずかにスラグの小塊が認められる程度である。遺跡の立地や遺物の状態から、鍛冶遺跡の可能性が強い。

3．大岳製鉄遺跡群（第1－3図）

(1) **鑪鞴平遺跡**（たたらびら） ㊼〔宇土市上網田町字鑪鞴平〕

宇土半島脊梁山地の主峰・大岳（標高478 m）の北側中腹に位置する。

小さな谷川にスラグの散布が見られるが、量は多くない。年代や遺跡の性格等詳細は不明である。

(2) **上床遺跡** ㊽〔宇土市下網田町字上床〕

上記鑪鞴平遺跡の西方、大岳の西側に連なる雄岳（標高329 m）の北裾に位置する。

同所の水口泉氏により工事中にふいごの羽口とスラグが採集[註18]されている。雄岳の北側中腹には中世の寺院跡・長福寺跡があり五輪塔等が多い。北側山麓の上床や堂園も長福寺関係の地名と考えられるが、ふいごの羽口やスラグとの伴出土器が不明で、これらの遺物の位置づけも現状では困難である。

(3) **五田田遺跡** ㊿〔宇土郡不知火町永尾字五田田〕

宇土半島の南岸、永尾神社の鎮座する丘陵に位置する。この丘陵を横断して県道松橋・三角線が走っており、この県道の南北両側にスラグの散布がみられる。北側のものは径数cm以内の小塊で、数も少ない。南側は大きなスラグも多く、遺跡の中心は県道から南側の丘陵東斜面と考えられる。

同地の坂口和子氏採集のスラグには40～50cmの大塊が含まれており、スラグの散布量も多いことから製錬遺跡と考えられるが、スラグの分析結果は鍛冶滓と判定されている。

年代については不明であるが、坂口氏採集品に須恵器高台杯片・須恵質土器（摺鉢）片が含まれているのは参考となろう。

(4) **たたらん平遺跡** (71)〔宇土郡不知火町永尾字川添〕

西の浦川により開析された谷の東側の丘陵の西側斜面に位置する。五田田遺跡とは同一丘陵上にあり、直線距離にして約400 mの距離がある。

現地は水田化されており、水田の石垣にスラグが積み込まれている。

遺構やスラグ以外の遺物については不明で、遺跡の性格や年代については手掛かりが得られなかった。

(5) **石だたみ遺跡** ⑫〔宇土郡不知火町大見字角石〕

大岳の南麓を流れる大見川の流域には3カ所の製鉄遺跡がある。これらの遺跡のうち最も上流部に位置する。

大見川の水源地、一般に石だたみと呼ばれる所のやや下流の小川の底にスラグの散乱がみられ、侵食された崖面にもスラグの露出がみられた。かって、ふいごの羽口も出土したという。[註19] 真近に製鉄遺跡が埋没していると考えられ、立地の点からみれば製錬遺跡の可能性が強い。

(6) **川原(こら)遺跡** ⑬〔宇土郡不知火町大見字刎持(はねもつこ)篭〕

大見川の東側丘陵の西側斜面、大見集落の北端に位置する。

『不知火町史』[註20]によれば、「大見部落の北端の坂路の右（東）側の溝や路面に、たたら製鉄の鉄滓が多量に包含・散布している」とあり、遺跡の近景・スラグの写真が掲載されている。

(7) **はねもっこ遺跡** ⑭〔宇土郡不知火町大見字神の元〕

大見川流域製鉄遺跡の1つで、大見の集落の東側丘陵の西斜面に位置する。

殿川(どんこ)の古塔群から東に丘陵を登り、標高40㎞前後のミカン畑にスラグの散布がみられる。スラグは20㎝前後のものが多く、地主の杉本正義氏のところにふいごの羽口片2点も採集されている。

遺跡の立地やスラグの形状からみると製錬遺跡の可能性が強いが、遺跡はミカン園造成によって壊滅している。

(8) **山田遺跡** ⑮〔宇土郡三角町郡浦字道芳木〕

雄岳の南側中腹に源を発する郡浦川の本流域には、郡浦神社から上流部にかけて5遺跡がある。郡浦川によって形成された谷は宇土半島では大きな谷に数えられ、この谷の北側（右岸）丘陵裾部に4遺跡、南側（左岸）丘陵裾部に1遺跡が知られている。

これらの遺跡は人里に近いこともあって壊滅状態に近く、資料的にも不明な点が多い。

山田遺跡は最も上流に位置するもので、かって水田からスラグが出土したというが現状では確認できない。

(9) **たたらん迫遺跡** ⑯〔宇土郡三角町郡浦字城山〕

郡浦神社の北東約950㎞に南面している谷をたたらん迫と呼んでいる。付近一帯は畑地化されており、現状では遺構・遺物は確認できない。

(10) **城山遺跡** ⑰〔宇土郡三角町郡浦字城山〕

前記たたらん迫の両側に隣接する城山と呼ばれる丘陵の南端に位置する。

枝森久一氏によれば、かって炉の断面が露呈していたというが、農道の拡幅工事によって消滅している。炉の断面は幅1.2～1.3㎞、高さも1㎞程で、下底面に大石を敷き、その上に礫や木炭があり、その上の床面には粘土が敷かれ全体に赤変していたという。

現地にはわずかな平担地が観察される他には遺物の散布もみられない。

(11) **なぎさこ遺跡** ⑱〔宇土郡三角町郡浦字宮ノ脇〕

郡浦神社の西側に隣接する谷に位置する。谷口の部分は宅地・水田となっており、奥は果樹園となっている。この果樹園の石垣の中にスラグの積み込みがある。かってふいごの羽口も出土したというが判然としない。

スラグは20～30cmの大きさのものが多いが、炉等の遺構は果樹園造成時に破壊されたものと考えられる。

(12) **平野遺跡** ⑲〔宇土郡三角町郡浦字平野〕

郡浦川の左岸、小さな谷の谷口に位置する。民家の横の排水路にスラグが露呈しているということであったが、最近コンクリートで固められており観察できない。

(13) **湯殿遺跡** ⑳〔宇土郡三角町郡浦字上湯殿〕

郡浦川の支流である湯殿川の上流に２カ所の遺跡がある。

上流部に近い東側丘陵斜面にスラグの堆積があるというが、現地は未確認である。

(14) **北平遺跡** ㉑〔宇土郡三角町郡浦字北平〕

湯殿遺跡のやや下流の左岸から、昭和10年頃開墾する際多量のスラグやふいごの羽口が出土したというが、現状では確認できない。

これら湯殿川流域の２遺跡は、伝承どおりスラグの量が多ければ、遺跡の立地とも合せて製錬遺跡の可能性が強い。

(15) **官迫遺跡** ㉒〔宇土郡三角町中村字大平〕

郡浦川の支流、河内川の上流にも２遺跡がある。また、下本庄の集落にある専行寺近くの河内川に大鉄塊があったということで、枝森久一氏が探索されたが発見できなかった。

官迫遺跡は河内川の中流右岸に位置する。西から東へと傾斜する斜面の裾にあり、適当な平担部にある。河内川が侵食した川岸の崖面にスラグや木炭の堆積層が現われており、川底にもスラグが散布する。

スラグは１mにも達するような大塊の一部も見えており、製錬遺跡の可能性が強い。

昭和53年11月現地踏査の時、崖面の包含層から須恵器の細片（２×４cm）を採集した。この土器の外面には荒い平行叩きがあり、内面は横ナデ整形である。焼成はよく比較的固く、黒灰色を呈する。年代推定のための数少ない資料であるが、如何せん細片すぎる。叩きの状態では古墳時代ではなく、古代か、あるいは中世に下る須恵質土器の可能性が強い。

遺跡は、河内川の侵食による他は良く遺存しているものと考えられ、上記の年代論も保留し、将来の資料に待つべきであろう。

(16) **古郷池遺跡** ㉓〔宇土郡三角町中村字段源田〕

官迫遺跡のさらに上流の左岸から、山芋掘りの時スラグが出土したという。

地表面での観察では遺物の散布等はみられない。

⑰　**中河原遺跡**　㉞〔宇土郡三角町中村字中河原〕

金桁川流域に属するもので、この流域では現在までのところこの遺跡だけがある。

金桁川上流の中河原開拓地の一角にあり、枝森久一氏らによってスラグが採集されているが、道路拡幅や開墾によって消滅してしまっている。

⑱　**柳迫遺跡**　㉟〔宇土郡三角町中村字柳迫〕

河川流域別にみると波多川流域になるが、位置的には湯殿・北平遺跡から丘陵１つ越えた谷に位置する。詳細は第Ⅲ章（発掘調査の記録）を参照されたい。

⑲　**千房遺跡**　㊱〔宇土郡三角町郡浦字千房〕

柳迫遺跡と同じく波多川流域に属するが、さらに北側の丘陵を１つ越えた千房の谷の南斜面に位置する。

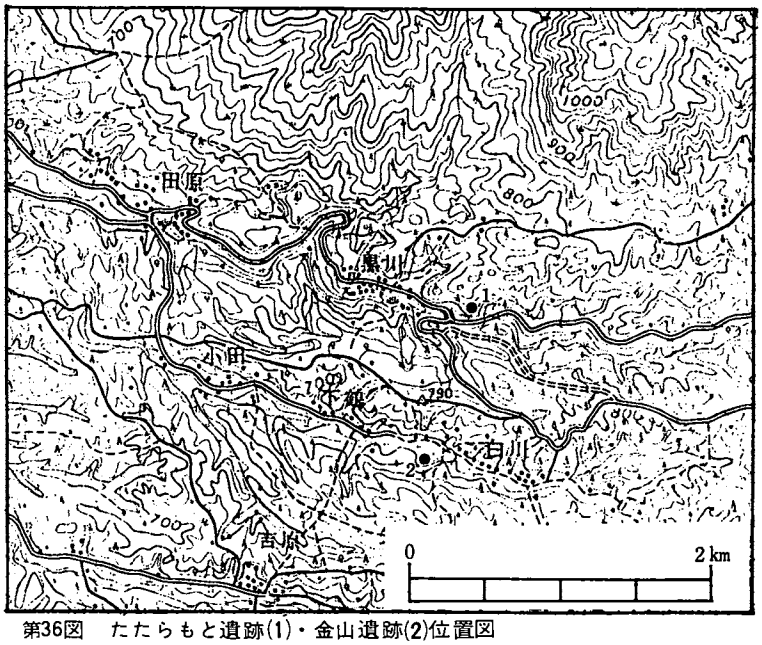
一帯はミカン園に造成されており、遺跡は壊滅しているが、石垣の中にはスラグが積み込まれている。採集したスラグは20～30cmのものであったが、開墾の時には大きな塊もあったということである。

４．その他の製鉄遺跡

(1)　**たたらもと遺跡**　㊷〔阿蘇郡南小国町満願寺字黒川〕

阿蘇外輪山の北麓と久住山（標高1787ｍ）の西麓の合わさる地域に、たたらもと・金山・滝の下の３遺跡が知られている[註21]が、ほとんど壊滅状態にある。

たたらもと遺跡は、田の原川の上流、黒川温泉の北側に開けた谷に位置する。二つの谷に挟まれた丘陵端が遺跡とされ、坂



第36図　たたらもと遺跡(1)・金山遺跡(2)位置図

本経堯氏によれば「丘陵端から下の水田の一部にかけて多量の鉄滓と炉壁のくずれたものが堆積し、かつ散布されている。」とある。現地一帯を踏査したが遺物等の散布は確認できない。ただ、遺跡の横を流れる幅約1～2 mの小川には、黒々とした砂鉄が多量に沈積している。

(2) **金山遺跡** ㊸〔阿蘇郡南小国町満願寺字金山〕

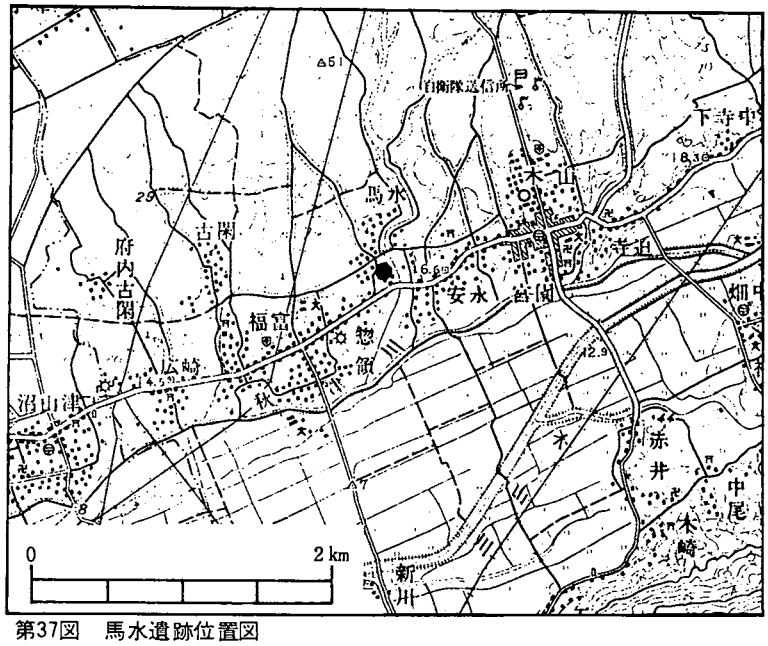
田の原川の支流・小田川の河岸段丘に位置し、かってスラグやふいごの羽口が出土したというが、水田化により遺跡は消滅してしまったものと思われる。

小田川には、たたらもとの場合と同様に砂鉄が沈積しているが、たたらもと程には多くない。

(3) **馬水遺跡** ㊾〔上益城郡益城町馬水字駿河原〕

熊本市街の東方、加勢川の支流の鉄砂川に面した丘陵の先端部に位置する近世たたらである。

遺跡の大半は昭和39年頃の宅地造成によって削平され、崖の断面に長さ約10 m、厚さ1.2～1.4 mにわたって地下構造の一部の断面が露呈している。断面の埋土には炉壁片や木炭、河原石を積み重ねたもの等が観察され、全体に強熱を受けて変色している。



第37図　馬水遺跡位置図

「熊本藩年表稿」[註22]によれば、文政12年（1829）4月14日の項に「沼山津手永馬水村砂鉄鋳造」とあり、嘉永2年（1849）操業開始の八代鉄山（今泉製鉄遺跡、第Ⅲ章－Ⅲ参照）より20年早く操業を始めている。

八代市・八代神社（妙見宮）に奉納された刀剣に次の銘がみられる。

（表）　肥後八代住藤原直行

（裏）　奉剣応求全身流勢之求以馬水鉄鍛之　天保三年辰八月吉日

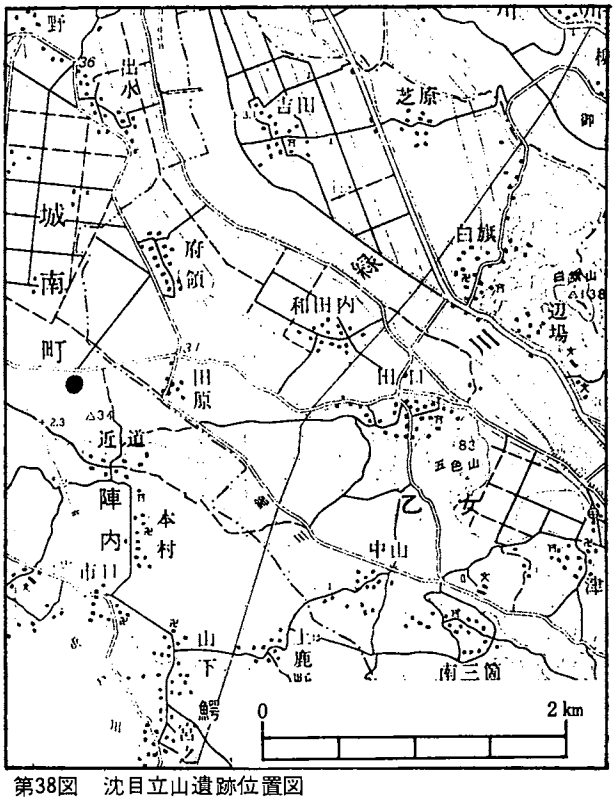
関連資料の調査を進めれば、さらにその実像が明らかにされるものと思われる。

(4) **沈目立山遺跡** ⑥〔下益城郡城南町沈目字立山〕

浜戸川を間において塚原古墳群と対持する台地に立地する。遺跡地は標高約30ｍ程の「舞ノ原台地」の辺縁部で、この付近には益城国府推定地等の古代遺跡も多い。

沈目立山遺跡は縄文時代～古代の複合遺跡であるが、平安時代中期頃と考えられる鍛冶炉とスラグ・ふいごの羽口が出土している。

鍛冶炉は２基が検出され、１基（２号遺構）は径60cm弱の不正円形プランを呈し、中からスラグ・鉄片・木炭等が検出されている。他の１基（１号遺構）は攪乱により一部を削平されているが、径約70cm、残りの深さは中央部で10cmを測る。



第38図　沈目立山遺跡位置図

出土したスラグは鍛冶滓と判定されており、古代の鍛冶を知る上で貴重な資料である。

遺跡は県道改修工事に伴って調査後消滅したが、調査報告書が刊行[註23]されているので参照されたい。

(5) **嵐口鞴遺跡** ⑩〔天草郡御所浦町字鞴〕

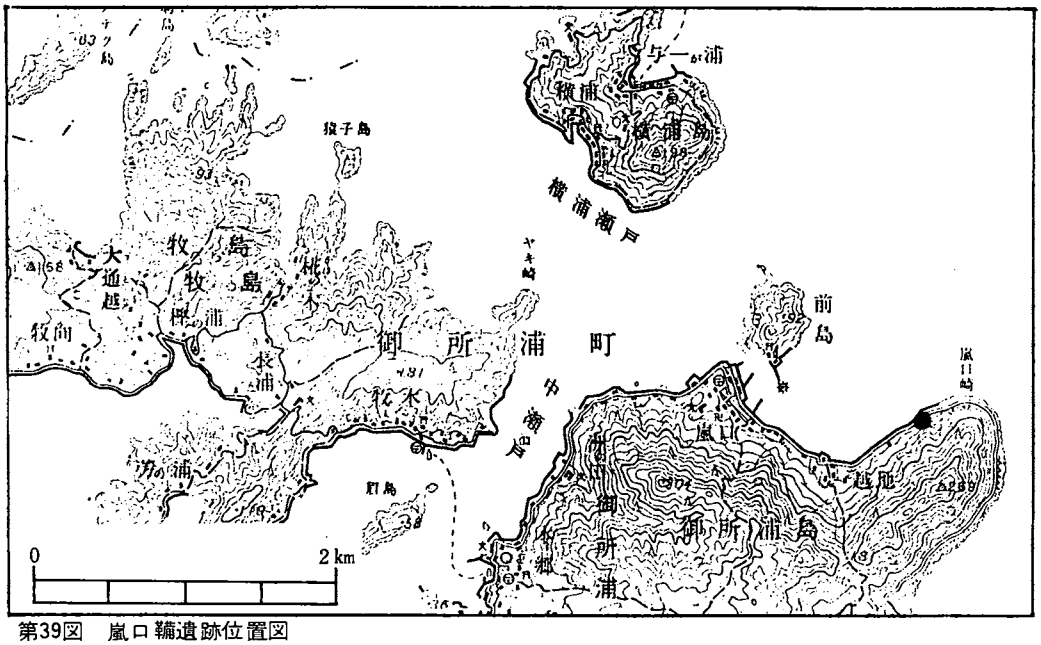
天草上島の南方に浮ぶ御所浦島の北端に位置する。天草諸島では数少ない製鉄遺跡の一つである。

海岸に面する山の斜面にスラグが埋没しており、海岸線にも散布している。かってふいごの羽口・土師器も採集[註24]されている。

昭和53年９月、現地踏査の時にはふいごの羽口は散逸して実査できなかったが、スラグ・土師器片を採集した。土師器は甑の把手で、赤色顔料が塗布されている。

現在知られている資料での年代判定は困難であるが、土師器が遺跡と結びつくものであれば中世にまでは下降しないものと考えられる。

採集したスラグの分析では製錬滓[註25]との判定が出ている。



第39図　嵐口鞴遺跡位置図

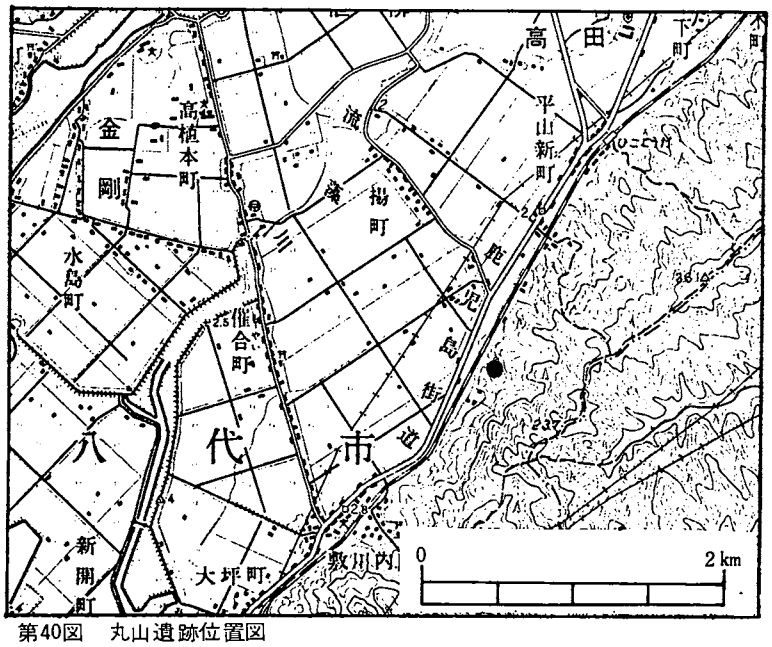
(6)　**丸山遺跡**　⑫〔八代市敷川内町字丸山〕

八代市街の南方、官民山（標高 241.2 m）の西側中腹の浅い谷に位置する。遺跡の標高は約 50 m を測り、西南方には平安時代の須恵器窯・丸山窯跡、西方には地下式板石積石室墓群・丸山古墳群がある。

昭和35年、ミカン園造成に伴って多量のスラグが出土し、現在も散布を認めるが、遺跡はかなり破壊を受けているようである。

スラグの量や遺跡の立地から製錬遺跡と考えられるが、年代を示す資料は得られていない。

尚、採集したスラグの分析では製錬滓との判定が出ている。



第40図　丸山遺跡位置図

註1　昭和52年2月、松本が採集した資料を八幡郷土史研究会・大澤正己氏に依頼して分析した。分析結果の詳細は次年度報告書に収録の予定。

註2　田添夏喜「肥後のたたら製鉄の1例」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表会要旨』、昭和52年。

註3　坂本経堯『肥後における製鉄遺跡の研究』第1編、プリント版、昭和28年。

註4　註3に同じ。

註5　註1に同じ。

註6　註3に同じ。

註7　註3に同じ。

註8　註3に同じ。

註9　平島広幸・松村道博・松本健郎『たたらもと製鉄遺跡調査報告書』、荒尾市文化財調査報告第2集、昭和53年。

註10　註1に同じ。

註11　註1に同じ。

註12　註3に同じ。

註13　註3に同じ。

註14　長谷川熊彦・和島誠一「たたら製鉄鉱滓の研究」『資源科学研究所集報』第68号、昭和42年。

註15　湊秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』第14号、昭和43年。

註16　註3に同じ。

註17　註1に同じ。

註18　富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』、宇土半島研究会、昭和50年。

註19　坂本経堯「古代の生産」『不知火町史』、昭和47年。

註20　註19に同じ。

註21　註3に同じ。

註22　細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』、昭和49年。

註23　緒方勉・斉藤林次『沈目立山遺跡』、熊本県文化財調査報告第26集、昭和53年。

註24　坂本経堯『天草・御所浦－自然と人文－』、昭和45年。

註25　今回採集の資料を、日本磁力選鉱に依頼して分析。解析は大澤正己氏（八幡郷土史研究会）による。

註26　註25に同じ。

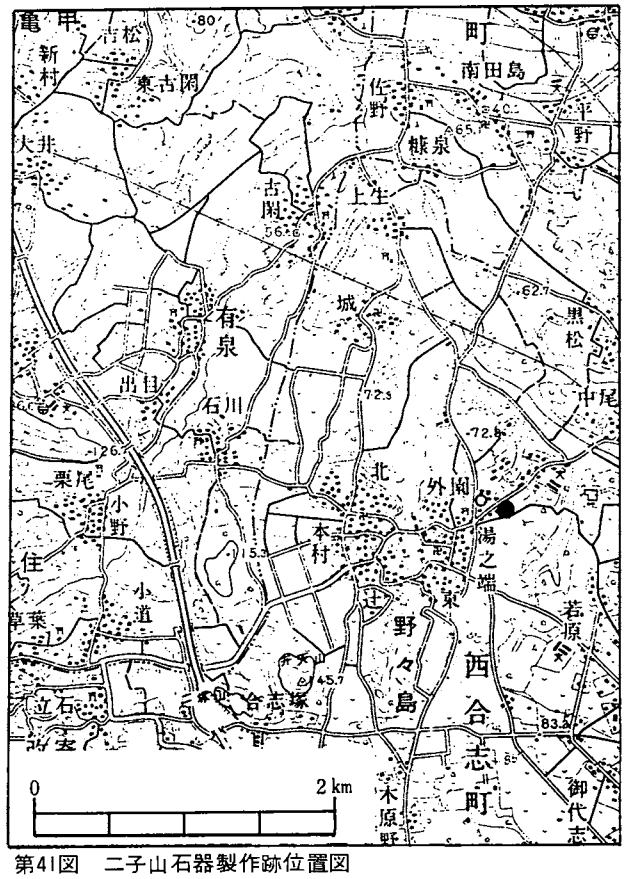
III　石器製作跡

(1)　二子山石器製作跡　①〔菊池郡西合志町野々島字天神免〕

標高50ｍ前後の黒石台地の一角に二子山がある。周辺一帯は畑作地で、その中に独立した丘陵となっている。周辺の畑地との比高は約15ｍを測る。

二子山には東西２つの丘頂があり、ともに古墳（西側が１号墳、東側が２号墳）[註1]となっている。

昭和の初期、この二子山の周辺に多くの打製石斧・石材片が散布することについては故大塚了城・坂本経堯氏らが注目されていたという。さらに昭和39年、新産都市埋蔵文化財調査によって遺跡が再確認され、翌昭和40年１月の第１次調査をはじめ、第２次（昭和40年２月）、第３次（昭和42年３月～４月）、第４次調査（昭和45年４月～５月、７月）が実施されている。



第41図　二子山石器製作跡位置図

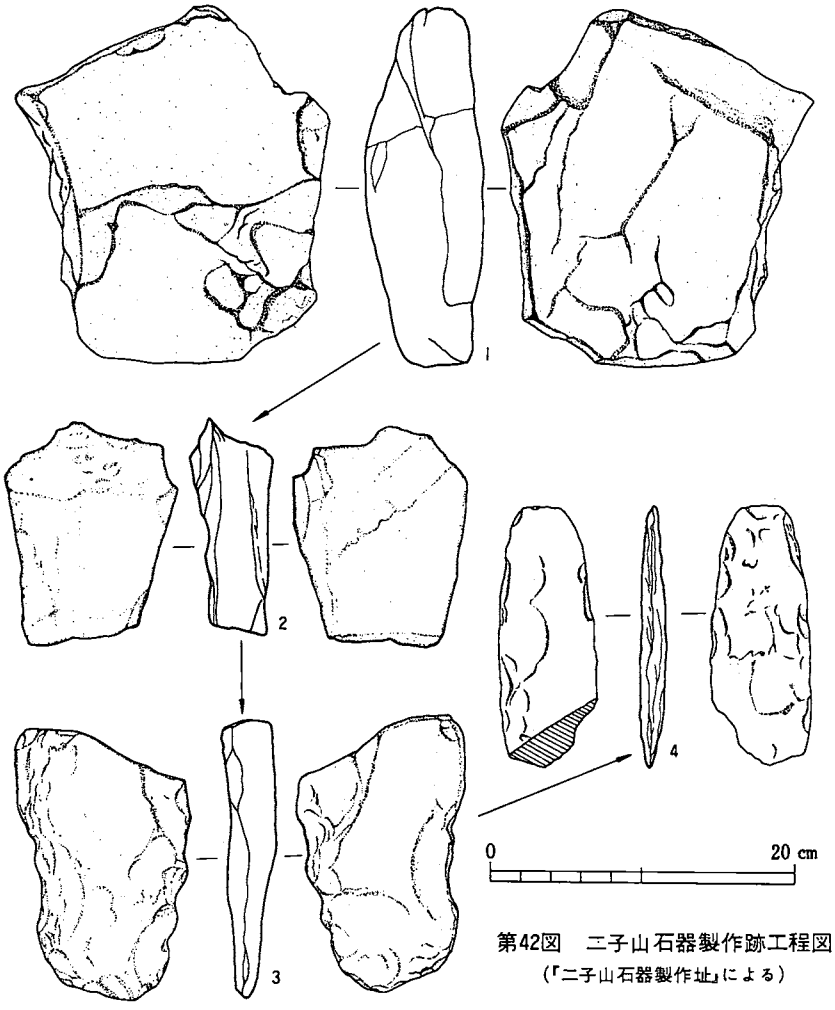
調査の結果[註2]、二子山丘陵の全域（東西約200ｍ、南北約180ｍ）に石材の散布を認め、中でも東西約120ｍ、南北約110ｍの範囲に濃密に分布していることが判明した。さらに数ケ所に母岩が確認され、それらの母岩には剥離痕が認められている。

出土した石器に完成品は少なく、大半は石材・剥片である。それらから石器の器種を推定すると、十字形石器が１点出土している他は、すべて所謂扁平打製石斧である。

石器の製作工程は４工程（第42図）が考えられ、工作台や工具と考えられるものもある。

遺跡の年代は、第四次調査で出土した土器から三万田式－御領式の中間的な時期が考えられている。

さらにこの調査では、二子山の石器・石材の需給圏について追跡調査が実施され、最も遠距



第42図　二子山石器製作跡工程図
（「二子山石器製作址」による）

離は菊池市伊野遺跡の約20㎞（直線距離）をはじめ、55遺跡がリストアップされている。その結果、二子山の石器・石材は、伊野遺跡を除けば半径約15㎞の範囲に供給されていることが判明している。

二子山の石材は金峰山火山系の火山活動によって形成された玄武岩質安山岩と同定されている。

なお、この遺跡は、西合志町教育委員会、調査関係者の努力によって昭和47年国指定史跡となって全面保存がなされている。

(2)　大谷石器製作跡　②〔玉名郡玉東町原倉字大谷〕

金峰火山群の一つに三の岳（標高681.3 ㎞）がある。熊本市西部の金峰山を一の岳とも呼び、それから北へ二の岳、三の岳へと続く一連の山塊である。

大谷石器製作跡は三の岳の北側斜面にあり、同じく三の岳北斜面及び山麓には立岩石器製作跡や製鉄遺跡群がある。

遺跡はかなり広範囲におよび、安山岩の露頭や石材の散布に混じって石器も点在する。石器の大半は所謂扁平打製石斧である。石器の器種からみたこの遺跡の特色は、長さ30～40㎝、幅20㎝にもおよぶ大型品がみられることである。

石材は安山岩であるが、二子山のものとはある程度肉眼でも判別できるが、厳密にはプレパラートを作成して判定すべきであろう。

遺跡の大半は国有林になっていることもあって、調査は進んでいないが、国有地の遺跡の遺存は良い。遺跡の西側の一部は民有地で、ミカン園に造成されている。

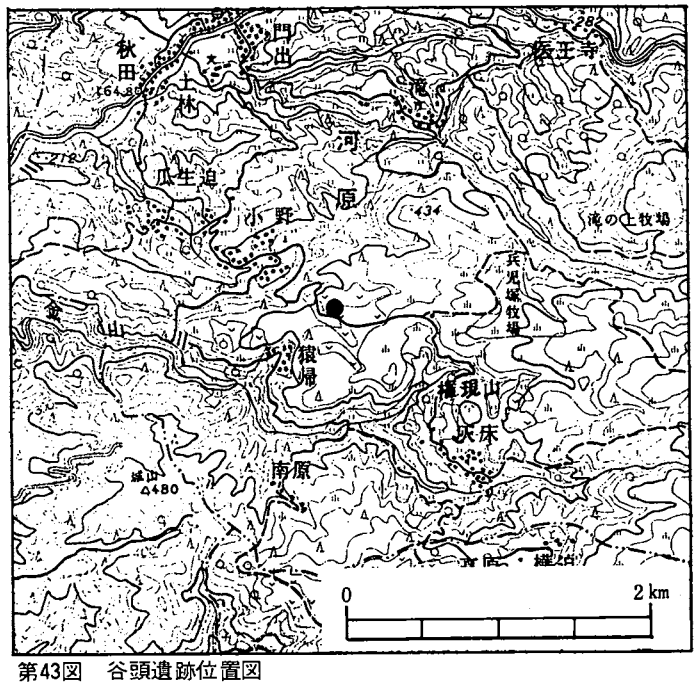
(3) **立岩遺跡** ③〔玉名郡玉東町原倉字立岩屋敷〕

大谷遺跡と同じく三の岳の北側斜面に位置する縄文時代石器製作遺跡であるが、大谷遺跡よりも低位に位置する。

大谷の集落を間に、南北2地点に遺物の散布がみられるが、大半はミカン園に造成されている。安山岩の露頭や転石はいたるところにみられ、石器が採集される。地元にはかなりの採集品もあり、これらの追跡調査とあわせて遺跡の基礎調査が必要であろう。

(4) **谷頭遺跡** ⑥〔阿蘇郡西原村河原字谷頭〕

昭和51年、ゴルフ場建設に伴って調査された遺跡で、黒髪期の住居址11基（円形7、方形4）と木棺墓・貯蔵穴等が発見された。円形住居址は大型で径7～8 m を測り、中央に工作用と考えられる大型ピットを有し、さらには壁にそって円形に柱穴が7～10個確認される。ほとんどの円形住居址で石器が製作されていることが判明した。



第43図　谷頭遺跡位置図

遺跡の立地する西原村は阿蘇外輪山の西斜面に立地し、遺跡は標高約400 m の丘陵中腹の突端に位置し、熊本平野から有明海を一望に見わたせる高地遺跡である。

谷頭遺跡において製作が確認されたのは、磨製石鏃と石包丁であるが、数量のうえからは磨製石鏃が圧倒的に多く、約500個体余を数える。形態は正三角形、あるいはそれに近いものが主体を占める。基部は一例の平基を除き半月状の凹基である。製作工程は荒割→小割・形態調整→研磨の段階を経て完成品となる。研磨は両面加工を最初に行い、その後両側研磨をし、基

部から刃付と一連の規則的製作を実施している。中央のピットは不整円形で、両端に小ピットを有する。その内部および周辺からは石屑、未製品が集中する傾向がうかがえ工作用と考えられる。

磨製石鏃の石材は粘板岩を使用しているが、遺跡の立地する阿蘇外輪山は、主に凝灰岩、安山岩で構成されており、石鏃の石材には適さない。近くに同様の石材産出地を求めようとすれば、上益城郡甲佐町～御船町の粘板岩地帯であり、15～20㎞ほど隔っている。以上のように、各住居跡内から石材、未製品、石屑・工作台、砥石等がセットとして出土しており、磨製石鏃の製作工程が明らかにされた意義は大きいものがある。

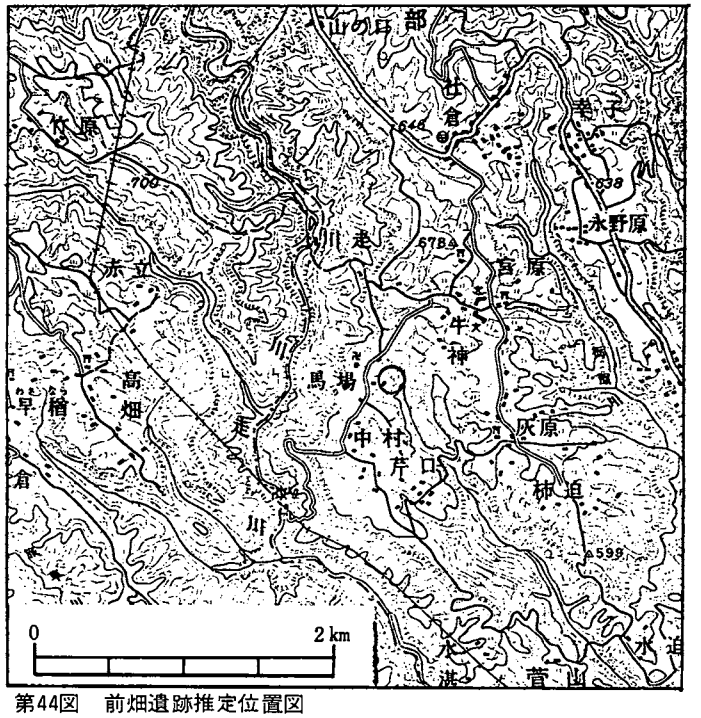
尚、遺跡は調査後消滅したが、調査の詳細については調査報告書[註3]が刊行されているので、参照されたい。

(5) **前畑遺跡** ⑦〔阿蘇郡高森町芹口字前畑〕

大正５年、水利事業に伴う開墾によって出土した資料で、大分県竹田市・加藤武氏所蔵のものを長山源雄氏が報告[註4]し、森本六爾「日本青銅器時代地名表」[註5]にも登載されているものである。

具体的な地点を確認することはできず、第44図に示したのは推定地点であるが、今回確認調査を実施した柿迫遺跡に近接する同種類の遺跡として注目される。

長山氏の報告によれば、「数個の土器が出土し、その中の１つに石鏃の原料たる扁平な石片が両手に盛りあげる程あり、その中の20点と土器片６点を加藤氏が所蔵している。石片の大きさは長さ３寸～２寸、幅１寸～５分、厚さは１分～１分５厘で、一見緑泥片岩に似て少し淡く、質は比較的堅い。」とあり、「この小石片を以て磨製石鏃の材料としたものと考えたい。」と結んでいる。

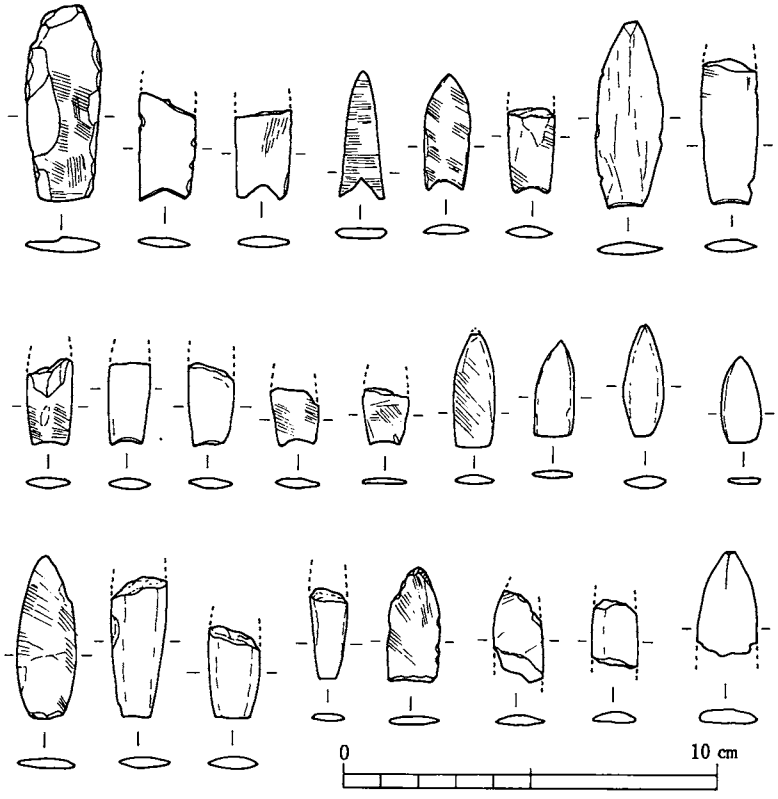


第44図　前畑遺跡推定位置図

(6) 下長尾野遺跡 ⑨〔阿蘇郡産山村下長尾野〕

大分県との県境に近い阿蘇外輪山の東側の高原に位置する。

戦後の開墾に伴って下長尾野一帯から採集された資料（第45図）があるが、遺跡の地点は不明である。採集資料には未完成品も含まれており、磨製石鏃製造遺跡の存在する可能性が大きい。



第45図　下永尾野遺跡採集石器実測図
（島津義昭・松村道博氏原図）

註1　西側の1号墳は家形石棺、東側の2号墳は横穴式石室を内部主体とする円墳である。ともに自然の丘陵を利用して築かれているが、墳丘の築成状態等については調査を実施していない。

隈昭志・松本健郎「二子山古墳」『二子山石器製作址』、西合志町文化財調査報告第1集、昭和46年。

註2　三島格・隈昭志・古川博恭・井上兼利他『二子山石器製作址』、西合志町文化財調査報告第1集、昭和46年。

註3　松村道博・柴尾俊介・瀬丸敬二『谷頭遺跡』、谷頭遺跡調査団、昭和53年。

註4　長山源雄「磨製石鏃の材料を容れたる弥生式土器」『人類学雑誌』44－2、昭和4年。

註5　森本六爾『日本青銅器時代地名表』、昭和4年。

第Ⅴ章　調査の成果と問題点

Ⅰ　製塩遺跡について

熊本県の製塩遺跡については、近藤義郎氏の調査研究[註1]によってその研究基礎が確立されている。今回の事業は、遺跡の確認及び基礎資料の作成に重点をおいたため、その成果から多くを論じることはできないが、２～３の問題点を列記して将来の課題としたい。

製塩遺跡として地名表に掲げた10遺跡のうち、確実に製塩遺跡と認定できるのは大田尾・沖の原・出来町の３遺跡で、他は厳密な意味では参考遺跡としなければならない。したがって、これらの遺跡の確認・性格づけは早急に取り組むべき課題である。

宇土半島・天草地域における土器製塩の年代と系譜については、すでに近藤義郎氏の所論[註2]があり、年代については古墳時代後期、６世紀中葉を中心とする時期が考えられている。今回の調査結果もそれに矛盾するものではなく、近藤氏の年代感はさらに強化されたといえる。ただ第Ⅲ章－Ⅰで指摘したように、製塩土器そのものの類別と変遷については再検を要しよう。

宇土・天草地域には多くの古墳があり、従来から坂本経堯[註3]・松本雅明[註4]・井上辰雄[註5]氏らによって古墳被葬者の海洋性が指摘されている。今後の具体的な作業として、各古墳についてどのような点を海洋性の投影とみるのかという個別論が展開されるべきである。その事例として、三島格氏による千崎古墳群の考察がある。このような例証が蓄積された後、海洋性という表現はより具体性をもったものとなろう。

海洋性の例証として、製塩遺跡（製塩活動）はしばしばとりあげられてきた。そこで、これらの製塩遺跡が、どの程度の古墳と対応するのかを検討してみたい。

製塩遺跡とその周辺の古墳の概要については第Ⅳ章－Ⅰで述べたが、大田尾遺跡では２基の箱式石棺、横穴５基が近在する。沖の原・出来町では２基の円墳と結びつくと考えられる。

これら製塩遺跡と古墳の関係は、とくに古墳資料が明らかではなく、年代的に直結するものかどうか速断できない面もあるが、１製塩遺跡が２～３の古墳を生み出したと考えてよかろう。もっとも、これは特定地域集団内での対比であって、さらに総括的な集団関係の中でどのような関わりをもってくるのか、大きな課題である。

註１　近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集、昭和49年。

註２　註１に同じ。

註３　坂本経堯・経昌『天草の古代』、昭和46年。

註４　松本雅明「古墳文化の成立と大陸」『古代アジアと九州』、昭和48年。

註５　井上辰雄『火の国』、昭和45年。

II　製鉄遺跡をめぐる諸問題

1．はじめに

県内における製鉄遺跡研究の歴史は古く、学史的に特記すべきことがある。

すなわち、昭和20年代後半～30年代前半における故坂本経堯氏を中心とする乙益重隆・三島格・田辺哲夫氏らの調査活動は注目すべき業績で、その成果は『肥後に於ける製鉄遺跡の研究・第1編』[註1]、「肥後上代の鉄」[註2]として公表されている。

坂本氏の活動は始め小岱山を中心として展開し、のち県内各地の製鉄遺跡の発見や調査に尽力され、さらには大分県国東半島や鹿児島県大隅半島の製鉄遺跡の踏査にまで発展している。

この時期の調査活動としては、昭和27・28・33年の玉名市・蛇ケ谷遺跡の発掘調査、昭和31年の三角町・柳迫遺跡の発掘調査、昭和37年の玉名市・六反遺跡の調査があり、ともに大きな成果を収めている。その後、三の岳周辺における坂田幸之助氏、宇土半島における枝森久一氏、八代周辺における盛高靖博氏、球磨盆地における前田一洋氏らの活動により遺跡数は増加の一途をたどった。

昭和40年代の調査活動としては、昭和44年、日本考古学協会生産技術研究特別委員会・玉東町教育委員会共催による玉名郡玉東町のむくろじ遺跡・金糞谷遺跡の発掘調査が和島誠一・坂本経堯・乙益重隆・三島格・田辺哲夫氏らによって実施され、金糞谷遺跡では完好な炉跡が検出されている。

昭和50年、市道拡幅工事に伴って荒尾市・古城谷遺跡[註3]の一部が田添夏喜氏によって調査され、遺構・遺物の検出により大きな成果を収めている。

また、昭和52年、同じく市道拡幅工事によって荒尾市・たたらもとA遺跡[註4]の丘陵端部の調査（調査担当松村道博・松本健郎）が行われ、遺跡の年代が12～13世紀であることが判明した。

その他、各地の調査地においてスラグやふいごの羽口等の資料が出土しているが、遺構が検出された例は少なく、性格としては鍛冶関係のものが大半を占めている。

以上の成果及び今回の調査資料により、製鉄遺跡研究の現状と課題について述べてみたい。

2．弥生時代の鉄生産

縄文時代の鉄生産あるいは鉄器使用の問題[註5]については、木器の加工痕や技術的な問題からの追求がある程度行われているが、直接的な遺構・遺物[註6]がみられず確証を得るまでにはいたっていない。しかし、福岡市・板付遺跡[註7]で夜臼式土器期の水田遺構が検出され、稲作の起源について新たな問題を提起しているのと同様に、縄文時代の鉄についても今後深化されるべき問題で

あろう。

ここでは、今回の調査対象とした遺跡で最も年代の古い弥生時代の鉄生産について述べる。

鉄器の使用が弥生時代前期に遡ることは異論のないところで、玉名郡天水町斉藤山貝塚出土の鉄斧をはじめ類例も増加しつつある。しかし、鉄器の製作や鉄の生産（製錬）については意見の一致をみていない。

かって潮見浩氏[註8]が整理されたように、弥生時代の鉄生産については二つの立場があり、現在もそれに変りない。

すなわち、その一は岡崎敬氏[註9]の所論に代表されるもので、鉄素材は朝鮮半島からの移入に依存し、鉄器への加工は国内で行われていたとの立場である。他の一つは、鉄の国内生産を肯定する立場で、近藤義郎氏[註10]らによるものである。

これらの論議の中に、本県資料がしばしば引用されている。弥生前期に比定される斉藤山貝塚出土の鉄斧や、弥生後期の下前原6号住居跡出土の鉄滓がそれである。

とくに下前原の鉄滓は製鉄起源論に深く関わり、「鉄生産に関しては、熊本県玉名郡岱明町下前原の後期の堅穴から出土した鉄滓が分析の結果、製錬滓であることが確認され、すでに後期の段階で鉄生産がおこなわれていたことがあきらかにされ、鉄生産の存否について一応の終止符がうたれたが……」[註11]、「熊本県下前原の弥生後期の堅穴の外側からスラッグ（鉱滓）が出土し、化学分析で製錬滓であることが確められた。これによって、鉄生産そのものがこの時期に行われていたことは確実であるが、消耗品である鉄鏃などが日本各地で製作使用されていることからすると、さらに中期にまでさかのぼる可能性がある。」[註12]等と、かなり重要な問題を含んでいる。

下前原と同時期、あるいはわずかに後続すると考えられる遺跡に、玉名郡菊水町・諏訪原遺跡[註13]がある。九州縦貫道建設に伴い昭和45年に調査され、弥生後期を主体として一部古墳時代初頭におよぶ住居跡や溝等が検出された。70余基の住居跡のうち4基に強熱を受けた状態が認められ、その状態から火災によるものではないと考えられる。さらにC区1号住居跡、B区5号住居跡等から多量の鉄器・鉄片を出土している。とくにC区1号住居跡からは鉄鏃・鉇とともに鉄片が200点余も発見され、A区7号住居跡からは小さなスラグを出土している。

調査主任の緒方勉氏は出土遺物の一部を紹介[註14]し、その解説文の中で「鉄器生産に関する明確な遺構は検出されなかったが、住居址の内外各所に赤く焼爛した焼土がみられ、A区7号住居址等から少量のスラグが発見されているので、小鍛冶の存在は当然推測できる。」との見解を示されている。筆者も諏訪原遺跡の調査に一時参加し、住居跡の状態、出土した鉄器・鉄片・スラグなどから、鉄生産に関わるものとして注目し、緒方氏の見解に賛意を示すものである。

そこで下前原6号住居跡にかえるが、調査者の概要報告[註15]によると「6号では中心部に炉がなく、狭いベッド部に接して焼土があって、その中に採集不可能な鉄片の腐触が一面にあり、外

側からは鍛冶の原料たる玉鉄が一個採集されたし、この竪穴が他と著しく異なる形態を示す点などから、作業小屋であったと考えられる。」と、諏訪原遺跡との類似性が指摘できる。

下前原6号住居跡のスラグは湊秀雄・佐々木稔氏によって製錬滓と判定[註16]され、長谷川熊彦・和島誠一氏によっても製錬滓として紹介[註17]されている。これらの判定により上述のような論拠となっている。

筆者は従来から下前原遺跡と諏訪原遺跡の類似性に注目し、その状況からともに鍛冶遺構ではないかと考えていた。昭和51年12月、緒方氏の厚意により、諏訪原A区8号住居跡出土のスラグの分析を新日本製鉄八幡製鉄所の大澤正己氏に依頼し、鍛冶滓との結果[註18]を得ている。しかも、大澤氏は下前原遺跡出土のスラグについても鍛冶滓ではないかとの指摘[註19]をされている。

下前原遺跡出土のスラグが製錬滓であるのか鍛冶滓であるのかの判定は、一つには分析を実施する科学サイドでの再検討が必要であり、さらには考古学的な方法による検討がなされるべきであることは言うまでもない。しかし、少なくとも、鍛冶遺構（鍛冶滓）ではないかとの疑いが多分にある以上、これをもって日本における製錬開始の時期とするには躊躇を覚える。ただし、このことは、日本における弥生時代製鉄を否定するものではない。

3．古墳時代の鉄生産

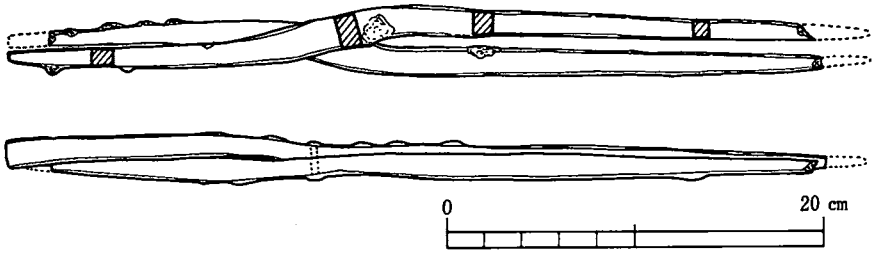
福岡平野の最近の成果[註20]によると、古墳への供献としてスラグが出土した古墳が32例にのぼり、スラグを出土した遺跡はその他に88カ所を数えている。そして、これらのスラグの分析により製錬滓と判定されたものの上限は、伴出土器等から古墳時代後期（6世紀）に比定され、この地域における鉄生産の開始時期を現状では6世紀代に求めている。

本県においては、古墳時代に比定できる製錬遺跡は知られておらず、古墳や集落から出土する鉄器の供給の問題とあわせて今後の課題である。

古墳時代に属する製鉄関係遺跡としては塚原古墳群、野原古墳群、野原八幡古墳群がある。

野原古墳群[註21]は小岱山西南麓に位置し、昭和28年に坂本経堯氏らによって調査された。9号墳の横穴式石室内に鉄塊と未完成の刀身が副葬されていたことが報告されている。古墳は終末期のもので、7世紀～8世紀と考えられる。野原古墳群と製鉄遺跡群の群在する小岱山は指呼の間にあり、報告者の坂本経堯氏は古墳の被葬者と小岱山製鉄遺跡群との関係を指摘されている。

野原八幡古墳群[註22]は野原古墳群の東北方に隣接する終末期群集墳で、本来は野原古墳群と一連のものと考えられる。昭和47年、荒尾市教育委員会の依頼により筆者らが5基の古墳を調査した。古墳はすべて破壊されており、墳丘や石室の一部を残していたにすぎないが、1号墳の墳丘下からスラグ1点、4号墳石室近くの耕作土からスラグ2点を検出した。1号墳・4号墳とも年代を示す遺物はなかったが、古墳群としては7世紀～8世紀の年代が考えられる。



第46図　丸山３号墳出土鉄鉗実測図（『塚原』による）

これらの３点のスラグのうち、最も出土状態の良好な１号墳丘下出土のものは、その後の所管の移動によって所在が不明であるが、４号墳石室近くから出土したものの１点については現在分析を依頼[註23]中である。後述するように、小岱山製鉄遺跡群の中で明らかに古墳時代に属する遺跡は判明しておらず、この分析結果が注目される。

下益城郡城南町に所在する塚原古墳群のうち、丸山３号墳[註24]は直径約17ｍの円墳であるが、その周溝から鉄鉗（第46図）が１点出土している。スラグ・ふいごの羽口等、他の製鉄関係の遺物の出土はない。出土土器から古墳時代後期、５世紀代後半に比定されている。

このように、熊本県においては、野原八幡古墳群の例は保留するとしても、古墳時代製錬を確定する資料は見られない。鍛冶については、未完成の刀身や鉄鉗の出土等によりその一端を窮うことができるが、鉄器生産の具体相を復原するまでには資料的にも恵まれていない。

４．小岱山製鉄遺跡群の年代と性格

小岱山は熊本県の西北端に位置し、標高501ｍのなだらかな山である。地質的には白亜紀末から第三紀にかけて形成されたと考えられる花崗閃緑岩や花崗岩からなっている。山麓には多量の真砂が堆積して山麓扇状地を形成し、山肌は侵食されやすいため大小の起伏が多い。

この小岱山の中腹から山麓にかけて約30カ所の製鉄遺跡が所在し、とくに西側の荒尾市に多い。

これらの遺跡を小岱山製鉄遺跡群と総称し、その概要については第Ⅲ章において述べているが、ここでは先学の学恩によりながらこれまでの成果を総合し、再検討を行い、とくにその年代と性格を明らかにしたい。

発掘や踏査で、年代推定のできる資料が得られている遺跡は以下のとおりである。

	市町村名	遺　跡　名	遺　　物	備　　考
1	荒尾市	古城谷遺跡	瓦器・土師器・滑石製石鍋	
2	荒尾市	山の神A遺跡	瓦器・土師器	
3	荒尾市	斧磨遺跡	滑石製石鍋・滑石製品	
4	荒尾市	苑瓦音寺遺跡	瓦器・土師器	
5	荒尾市	たたらもとA遺跡	瓦器・土師器・瓦質土器	
6	荒尾市	金塚遺跡	瓦器	
7	玉名市	斧砥遺跡	土師器	
8	玉名市	蛇ケ谷遺跡	瓦器？・土師器	
9	玉名市	六反遺跡	瓦器？	
10	南関町	大谷遺跡	土師器	

このように、年代推定の資料となるものは瓦器・土師器・滑石製石鍋である。

瓦器はすべて埦であり、年代判定の重要資料として九州でも近年注目[註25]されてきている。土師器は底部糸切り離しの皿・坏の類である。

これらの遺物についてはほとんど公表されておらず、またすべてを実見する機会に恵まれず、具体的な年代決定は困難であるが、大略的にみて古代末～中世前半と考えられ、より中世的であることが指摘できる。さらに、出土遺物に共通性がみられ、互いに大きな時間差はないものと考えられる。

これらの限られた資料をもって、小岱山製鉄遺跡群の年代を決定することはかなりの危険を伴うことは承知しているが、現在の見通しとして古代末～中世前期という年代観を与えておきたい。

このことは従来の年代観とは多少のずれを示している。すなわち、坂本経堯氏[註26]によって提示された年代感「これら（小岱山）の製鉄遺跡は共存土器によって古墳時代から奈良平安期に亘り、一部は釉薬ある陶の所属する中世に比定される。」が踏襲されていたと考えられるからである。

小岱山製鉄遺跡群のうち、調査によって遺構が確認されているものは表のとおりである。

これらの遺構の細部については不明な点も多いが、ボウル型炉とシャフト型炉とがある。

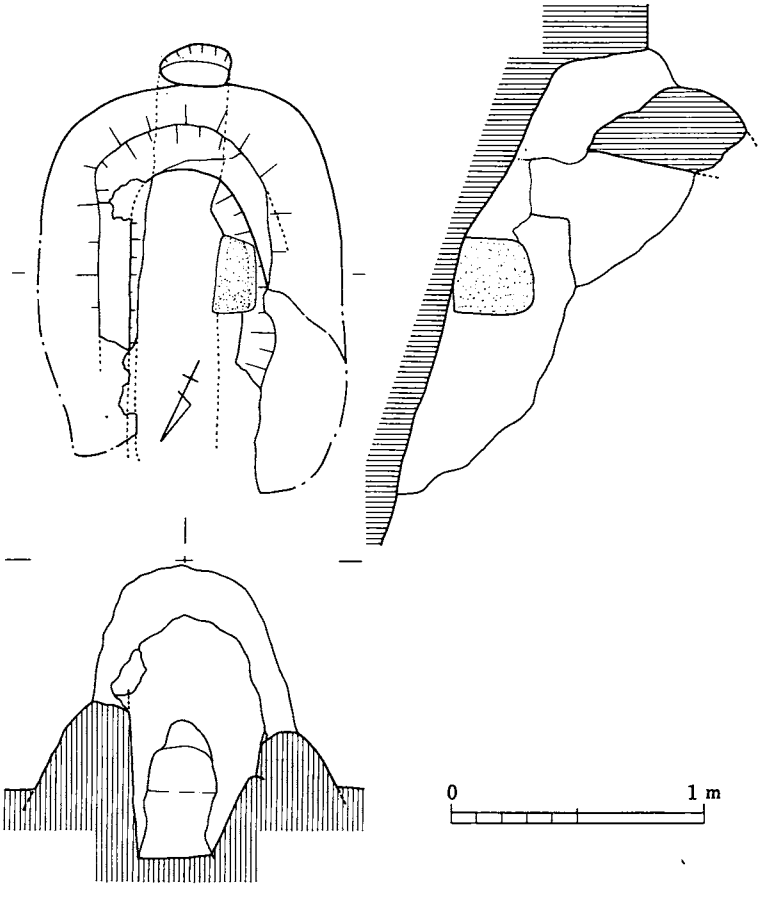
	市町村名	遺　跡　名	遺　構　の　概　要	備　　考
1	荒尾市	古城谷遺跡	ボウル型炉	
2	玉名市	蛇ケ谷遺跡	円形炉状遺構（ボウル型炉）	
3	玉名市	六反遺跡	シャフト型炉	第47図

古城谷遺跡[註27]では径60～140㎝、深さ20～40㎝前後の円形ないしは隅丸方形の遺構が6基検出されており、中には羽口を装着した痕跡があったという。

蛇ケ谷遺跡[註28]では、「径30㎝、一角が歪んだ隅丸四角形の平面で、深さ約15㎝、倒四角錐状の穴となり、内壁に厚く鉄滓が付着している。」と報告され、古城谷遺跡よりやや規模が小さいが、構造としては同様なボウル型炉と理解してよかろう。

六反遺跡[註29]は、現状で炉体の観察できる唯一の例であるが、前記2遺跡とは異なった構造を示している。炉体（第47図）の一端は破損しているが、長さ120～130㎝、上端推定幅50㎝、下端幅30㎝前後の楕円形プランを呈し、遺存部の深さは85㎝（北側）を測る。長軸の南側には煙道状の穴が通じている。東西壁の遺存部には羽口装着の痕跡はみられない。炉壁は強熱を受けて変色しているが、煙道状の部分はほとんど変色していない。床面には約20°の傾斜がある。

これらの遺跡の他、坂本氏によって報告[註30]されているたたらもとA遺跡・大谷遺跡の炉は六反遺跡の炉に類似したものと考えられる。



第47図　六反遺跡炉跡実測図

すなわち、たたらもとA遺跡では「丘陵裾の花崗岩を穿りぬいたもので約1㎡の側壁と床の一部がある。深さ約70㎝、床は中くぼみで上端幅70㎝、下端幅25㎝、27度の登りである。」、大谷遺跡では「丘陵斜面の花崗岩を穿りぬいた炉で長さ1.8㎡、幅約50㎝、（中略）深さ約80㎝、床は中くぼみで15度の傾斜をもっている。」と記

述されており、六反遺跡と同様なシャフト型炉と考えられる。

遺構の性格、すなわちどのような作業工程を行ったかについては、遺跡の立地、出土した遺構・遺物等から総合的に判定されることであるが、資料的にその判定を下せる遺跡はきわめて少ない。また、遺跡の大半はスラグ・ふいごの羽口の散布がみられることによって製鉄遺跡と認定している場合が多く、中には開墾等によって遺跡は破壊され、スラグ・ふいごの羽口が採集されるような場合も少なくない。そこで、扁析等の問題点があるとしても、鉱滓の科学分析が有効な手段として活用されている。

次に、小岱山製鉄遺跡群で科学分析が実施されている遺跡名と分析結果の概要を記す。

	市町村名	遺跡名	分析結果の概要	備考
1	荒尾市	竜光寺遺跡	製錬滓・砂鉄原料	註31
2	荒尾市	苑瓦音寺遺跡	製錬滓・砂鉄原料	〃
3	荒尾市	古城谷遺跡	製錬滓・砂鉄原料	〃
4	荒尾市	たたらもとA遺跡	製錬滓・砂鉄原料	〃
5	荒尾市	金塚遺跡	製錬滓・砂鉄原料	〃
6	玉名市	蛇ケ谷遺跡	製錬滓・砂鉄原料	註32

以上の分析結果は、すべて砂鉄を原料とした製錬滓と判定されており、これらの遺跡において、製鉄作業の工程として製錬が行われていたと考えられる。このことは、遺跡の立地や出土遺構とも矛盾するものではなく、首肯できる結果といえよう。

以上概略的に述べたように、小岱山製鉄遺跡群は古代末～中世前半に年代の中心があり、製錬を主として行っていたと考えられるが、最後に問題点を記して結びとしたい。

小岱山製鉄遺跡群のスラグの分析結果はすべて製錬滓と判定され、遺跡の状況とも矛盾しない。しかし、古代～中世の製鉄における製錬と精錬の区別は判然とせず、とくに精錬遺跡の状況は不明である。今後の調査・分析によって明らかにすべき課題である。

次に、先に述べた小岱山製鉄遺跡群の年代観は当時の背景社会の問題と深い関わりをもってくる。

井上辰雄氏は菊池川流域の古代豪族「日置氏」の研究[註33]の中で、菊池川流域の日置氏が「製鉄とむすびつくことは、玉名郡の菊池川流域が砂鉄の産地であり、この北部にある小岱山の山麓一帯が古代製鉄遺跡であることから首肯されるであろう。」とされ、日置氏の経済的背景の一つに小岱山における製鉄を考えられている。この推論は、全国の日置部の分析の中から導き出されているが、小岱山製鉄遺跡群の年代が、日置氏の全盛時代をすぎた平安末～中世前半にあるとすれば、製鉄の開始に日置氏が関与していた余地はあるとしても、日置氏の経済基盤と考えることは年代的に合致しないとみなければならない。

一方、小岱山の西側一帯は、平安時代末に成立した野原荘[註34]で、宝治元年（1247）に小代重俊が地頭に補任され、文永12年（1275）に下向したという。のち、小代氏は府本を拠点にして荒尾・玉名地方に勢力を拡大していく。したがって、小岱山における製鉄の開始は小代氏とは無関係で、その間に空白の期間がある。また、小代氏とその後の製鉄についても判然としない点が多い。

小岱山製鉄遺跡群の背景社会の追求は、今後年代観の確立とともに解明しなければならない大きな課題である。

5．大岳製鉄遺跡群の年代と性格

宇土半島の大岳周辺に位置する製鉄遺跡については絶対的な資料不足で、その年代や性格について論じるには限界がある。また、ミカン園造成等で消滅してしまった遺跡も多い。加えて調査が実施されているのは柳迫遺跡だけで、基礎資料の作成が急務である。

今回の調査で明らかになった大岳製鉄遺跡群は19遺跡を数え、将来の増加も充分予想される。

これらの遺跡で、比較的資料が整っているのは柳迫遺跡である。昭和31年に坂本経堯氏によって調査され、昭和54年１月に当該事業の一環として確認調査を実施した。

柳迫遺跡の調査結果についてはすでに述べた（第Ⅲ章）とおり、平安時代の製錬遺跡であり、昭和31年の調査では規模は不明であるが楕円形プランの炉が検出されたという。

その他、年代推定の資料となる土器類が出土している遺跡に五田田遺跡・官迫遺跡がある。五田田遺跡からの坂口和子氏採集品には須恵器高台坏片、須恵質土器（摺鉢）片があり、時期差が認められる。遺跡の年代幅なのか、いずれか一方の時期に属するのか、判定は困難である。いずれにしても、平安～鎌倉時代に含まれる可能性が強い。

官迫遺跡での採集品は須恵器で、スラグや木炭等の推積層の断面から出土し、遺跡の年代を示すことは疑いの余地はないが、細片であるため具体的な比定は困難である。可能性として強いて述べるなら、平安時代の可能性が強い。

その他の遺跡の年代については手掛りがない。

遺跡の性格についても不明な点が多いが、大半が製錬遺跡と考えられる。その論拠は遺跡の立地、遺物の量（とくにスラグ）等による主観的な判断である。柳迫遺跡のスラグはかって湊秀雄・佐々木稔氏によって分析され、製錬滓と判定[註35]されている。今後、より多くの試料の分析によって、この問題は大きく前進するものと考える。

宇土半島の製鉄遺跡群（大岳製鉄遺跡群）についても、当該地の古墳文化の経済基盤の一つと考える井上辰雄[註36]・松本雅明[註37]氏の論がある。

しかし、大岳製鉄遺跡群の年代は小岱山の場合と同様に古代末～中世に中心があると考える

のが妥当で、年代的に合致しない。むしろ、古代末～中世における武家勢力の動向との関係でみる方が、より現実性をもつものと思われる。

ただ、大岳製鉄遺跡群の大半は資料的には年代を決定できず、年代の判定の結果次第では流動的な要素が大きいと言わねばならない。

6．肥後藩における近世たたら製鉄

肥後における近世たたらの研究は進んでおらず、行政的な取組もおくれている。

今回の調査で、遺跡として把握できた近世たたらは上益城郡益城町・馬水遺跡、八代郡坂本村・今泉製鉄遺跡（八代鉄山）の２カ所である。

今泉製鉄遺跡は、所在確認から確認調査・関連資料の調査（詳細は第Ⅲ章参照）によって、近世たたら解明の糸口を与えたものといえる。しかし、馬水遺跡の方は遺存状態も悪く、関連資料も少ない。

今後、考古・文献・民俗などの多方面から肥後の近世たたらの解明をすすめていかなければならないが、その指針ともなるべく、肥後藩における鉄生産、流通に関する動向を記す。

鉄関係「熊本藩年表稿」抄

天正17年（1589）

１月16日　清正、飽田郡河内村鍛治石見に正国の名を遣わす（筑歴古）。

文禄２年（1593）

５月29日　清正、鍛治、大鋸、黒鉄、堂田貫の至急調達、兵糧輸送、塩噌、畳、苧の調達、阿蘇へ大友の牢人を抱え開発させることなど、二十三ケ条を国元留守家老に指示命令す（覚林寺）。

６月１日　清正、持鑓、堂田貫、造船、直轄領伊倉の問題、小給人知行の代官納付などについて留守居家老に指示す（県中・下川）。

６月６日　清正、召抱えの侍の選択、檜物、刀、鍬の調達を留守居家老に指示す（県中・下川）。

文禄３年（1594）

７月11日　清正、鉄砲500丁の製造、大豆の輸送、薬種の調達を命ず（越中）。

慶長３年（1598）

９月９日　清正、留守を後藤勘兵衛に申付け、大木織部に内検させること、良質な鉄砲の製造、隈府にての鎗の製造などを指示命令す（渡辺）。

慶長6年（1601）

11月3日　清正、関ケ原乱後の農民政策七ケ条を出す。百姓還住、材木の売買、鍛治炭の取扱い、百姓への麦種貸しなどを規定す（県中・熊本市立博物館）。

慶長9年（1604）

8月20日　蔵米の内1,000石炭鉄料として上野介に宛行う（小山・清正伝366）。

寛永10年（1633）

4月7日　海手、河手、綿、漆、茶、楮、その他の上納を先代の半額とし、鉄砲札を従来の三分の二とし、庄屋の筆紙墨料を定め、その他目安の事、還住者の取り扱いらの規定を定む（藩法・井田174・本）。

寛永11年（1634）

6月23日　堺にて10匁玉鉄砲100丁買入れ、国元より玉薬、火縄らの上方輸送を命ず（奉書）。

寛永12年（1635）

8月　塩、農具以外の振売りが在郷に入り込む事を禁ず（県近3－466）。

寛永15年（1638）

3月18日　小国鉄山試掘す。島原乱のための一時中止を再開す（奉書）。

寛永16年（1639）

2月17日　林隠岐守、鉄砲袋、口薬入500、番刀脇差1,000腰、番具足174領らと、塩硝1万斤、鉛の調達についての覚書を提出す（神雑200）。

寛永17年（1640）

4月12日　林隠岐守、今年中に800目玉石火矢1挺500目玉石火矢2挺の製作許可を家老に提出す（神雑200）。

寛永20年（1643）

3月17日　石火矢鋳師の前崎仁兵衛、25石10人扶持にて召抱える（奉書）。

正保2年（1645）

3月　長崎より南蛮はがねを取寄せ、刀2腰の製造を高田鍛治に命ず（奉書）。

正保3年（1646）

12月2日　八代城に置く鉄砲鋳形、鋳鍋について、沢村宇右衛門書上ぐ（神雑178）。

寛文7年（1667）

3月11日　鉄商売天野屋左太郎1人に免許の処、川尻横町鍛治共13人連名で商売自由を願出る（奉日）。寛文11年7月鉄商売自由となる（奉日）。

寛文10年（1670）

4月　豊後高田鍛治の刀脇差値段付（奉覚）。

寛文12年（1672）

1月　鍛治永国に10人扶持を与え細工を仰せ付けらる（奉覚）。

天和元年（1681）

9月　高田鍛治勝手逼迫につき忠行に10人扶持国平に8人扶持（花奉）。

天和2年（1682）

9月22日　（前略）当地鍛治所にて唯今迄は直釘迄打せたが向後は請込の御銀之内で新鉄物、新釘共に打申様。（以下略）（奉日）。

元禄4年（1691）

6月　鉄並白粉問屋新二丁目米屋権左衛門に被仰付、はがね商売は呉服町七右衛門商売付筈之段沙汰の事（触）。

元禄6年（1693）

是年　八代新田村の者へ鉄山採掘を許され、この鉄御国鉄問屋の外に売方も許される（大覚）。

元禄12年（1699）

5月　領分の銅并に古地金を長崎へ差越し、商売する者を沙汰する事（触）。

享保4年（1719）

12月16日　本藩命により打物細工鍛治の名簿を呈出す。之に依り明年3月25日命あり、同5月28日豊後高田住大和守藤原忠行の刀一腰を差出す（家譜続）。

天文2年（1737）

11月　御用釘に目印を付す、商売釘に目印釘あるときは仕事方役人より吟味（式稿69）。

宝暦3年（1753）

3月　古鍋釜地金他国への流出禁止（式稿60・会旧）。

宝暦6年（1756）

5月　小国宮原町武右衛門鋳物師屋願の通達（覚合）。

5月　目付差止。詰所目付10人となり、算用所、総銀所、切米所、東西蔵、御銀所、鍛治方6ケ所請持。6ケ所目附という（旧章）。

宝暦12年（1762）

4月6日　深川手永水次村川筋に鉄砂あり、御用に付古町鋳物師方に付出す様との達（覚）。

5月　領内海辺の鉄砂を鉄に吹立試しの沙汰（年合）。

9月　菊池水次村前に今度鉄吹所仕立の為、家一軒建るに付郡代直触、西寺村七兵衛寸志願の通り村中百姓共一同も寸志にて御用場へ出夫仕度くとの事（年合・年覚）。

9月　鉄砂吹方に付松炭焼方山床は中村手永矢谷村百姓手立山にて焼方致し、それに付

斉藤長左衛門より達す（年合・年覚）。

明和元年（1764）

1月　菊池鉄砂場使用の炭の焼出に付御山并切畑にて焼方を指示（年覚）

8月　深川手永水次村の鉄砂吹方を差止む（年覚）。

明和2年（1765）

9月　坂下手永同田貫村鍛治共、刀脇差を鍛える者の有無を調べたが、現在は鉄鎌等を作成するのみで該当者なし。尚同村元禄年中亀甲村と改称（年合）。

明和5年（1768）

9月　鍛治職札改て支給、釘鉄物類製造に付ての達（藩法848）。

安永2年（1773）

6月　定鍛治不足につき町中の鍛治の者4人あて毎日御鍛治方へ出頭し加勢すべく命ず（藩法854）。

安永4年（1775）

10月　町鍛治等の内頭取を選任し、鍛治方御用はすべて頭取を通じて行う（藩法855）。

安永5年（1776）

2月　河江手永東小川村鍛治九郎左衛門、野津原手永の御仕立百姓の農具の内鍬を100工請負ったが、その内50工分は寸志として差し上ぐべく申し出あり、願の通り許す（覚）。

安永6年（1777）

11月　横手手永中椎田村懸の内川尻岡町裏梅答分田3反1畝7歩のうち、6畝20歩を鋳物吹屋の場所にしておりたところ、この場所は洪水の際に難儀するので、川尻新田町裏行畑に場所を移したく、もっとも梅答分は元通に返還する旨願い出（年覚）。

天明2年（1782）

2月　備後国三次、西城鉄売買について御触（町日目）。

天明3年（1783）

2月　本庄手永本山村、夫平次、中山手永岩下村にて鉄吹方の試みを願により命ず（年覚）。

是年　本庄手永本山村、夫平次、中山手永岩下村の緑川支流小川で製鉄試し願い出る（覚）。

天明8年（1788）

4月　天守方御用の砂鉄、荒尾手永より1貫目差し出す（年合）。

寛政4年（1792）

8月21日　深川手永水次村に宝暦年中鉄吹場仕立られたるを廃止するに付、預置いた品品惣庄屋達によってお払（年合・年覚）。

寛政５年（1793）

１月　木倉手永御船町、林徳兵衛鋳物師職許可（年合）。

４月　尾州で使用の鍬便利ゆえ下国の際求めるよう指示（年覚）。

寛政９年（1797）

３月　鍛治頭取在勤中は丁頭列とす（市雑乾58）。

寛政10年（1798）

７月　玉名郡亀甲村の者鉄砂吹を許さる（肥）。

寛政11年（1799）

７月９日　坂下手永亀甲村宇平鉄砂試吹差支えぬよう入用松木渡下さる（覚）。

文化２年（1805）

10月　御鍛治方廃止、町鍛治に御用受負わす。御用つとめぬ鍛治は運上銀を杣方へ上納のこと（市雑乾、136）。

文化４年（1807）

５月24日　湯浦手永大野村懸鉄山え同手永杉園村用四郎と申者を山番に派遣、空地・野地木場作許されるに付家床ならびに木場作畝数等報告を命ず（年合）。

文化10年（1813）

５月10日　諸郡鍛治運上此節より小物成方の扱いとなる（覚）。

８月10日　去丑（文化２）年鍛治方差止、柿方引受けとなっていたのを作事所付属とす（覚・年覚）。

文化12年（1815）

10月　矢部手永小中島村清助鍛治炭焼方10ケ年許可、運上銀12匁宛小物成方納、職札は郡代渡（年合）。

文政９年（1826）

４月　町在鋳物師に職札渡し（肥・覚）。

是年　御国入職御免の隅州鋳物師及忰内田手永杜家村人数入（覚）。

文政12年（1829）

４月　沼山津手永馬水村砂鉄鋳造（肥）。

４月　坂下手永亀甲村鍛治共鉄買入願（覚）。

５月　坂下手永鉄買入代金払、郡代手付横目中山宇兵衛立会のこと（覚）。

８月　亀甲村鍛治へ売渡の地鉄運上について達（覚）。

弘化元年（1844）

９月　古鉄地金の他領移出を禁ず（肥）。

嘉永２年（1849）

7月10日　八代鉄山取起に付、小物成方物書1人増員仰付らる（難稜）。

嘉永5年（1852）

是年　八代鉄山用の杉木、下松求麻村山より引渡分代銭上納（年合）。

八代鉄山用杉、高田手永下松求麻村より引渡（年合）。

安政元年（1854）

1月16日　本藩警備地用として大小50挺の砲器新鋳を幕府に申告す（国事）。

3月25日　御船の造炮家増永三左衛門製造の80ポンド炮出来る、6月5日御船町妙見山にて試射（肥）。

安政2年（1855）

是年　坂下手永亀甲村にて西洋流鉄砲製作（年覚）。

安政5年（1858）

5月　西洋法操練稽古御取起に付、電撃銃見本筒差下され、500挺製造仰付らる（肥）。

文久元年（1861）

9月　南関会所小頭鉄砲鍛治源太郎、鉄砲細工功熟につき、郡代直触仰付らる（難稜）。

文久2年（1862）

是年　長州鉄御試につき、川尻町根取へ値段等問合せ（覚）。

文久3年（1863）

8月11日　山川亀三郎、森屋龍彦等に砲器製造係を命ず（国事）。

10月6日　吉田少右衛門に砲器製造係を命ず（国事）。

是年　本庄会所を鉄砲製造所とし、会所を春竹村に移す（肥・年覚）。

是年　蒲原敬助、御用鉄買上のため芸州へ派遣（覚）。

是年　御用鉄、芸州より鶴崎へ廻着（覚）。

元治元年（1864）

5月1日　幕府は武備充室のため、鋼鉄の器物を廃し、砲器に改鋳すべきを達す（国事）。

8月22日　砲500挺の鋳造を決し、原料の鉄購入のため人を大阪・広島等に派遣す（国事）。

10月8日　白石清兵衛等に砲器製造懸を命ず（国事）。

11月20日　白木五兵衛等に砲器製造懸を命ず（国事）。

是年　手当方御用鉄芸州より取寄につき諸懸物、払米代上納のこと（覚）。

是年　八代鉄山用杉木の残分八代町の者へ代銭上納にて引渡（年覚）。

是年　芸州より取寄の鉄鶴崎より川尻へ船廻のこと（覚）。

慶応元年（1865）

是年　本庄製作所鉄砂ゆり場を白川筋水道より1町半下とす（年覚）。

慶応2年（1866）

是年　南関口防禦備として元込筒100挺製造のため立木伐採願不許可（年覚）。

是年　本庄手永本庄村にて会所床鉄砲製造場に成る（年覚）。

明治2年（1869）

是年　八代歩入所鉄代年賦催促（覚）。

備考1. この年表稿抄は、細川藩政史研究会（森田誠一代表）編『熊本藩年表稿』(昭和49年）により作成した。

2. 文末の（　）は出典略号で、凡例は下記のとおりである。尚、詳略は上記「熊本藩年表稿」によられたい。

筑歴古－筑後歴世古文書、覚林寺－覚林寺文書、県中－熊本県史料中世編、越中－越中家文書、渡辺－渡辺家文書、小山－小山家文書、清正伝－加藤清正公伝、藩法－藩法集7熊本藩、本－本藩年表、奉書－御奉行奉書抄出、県近－熊本県史料近世編、神雑－神雑、奉日－御奉行所日記抄出、奉覚－御奉行書覚帳、花奉－御花畑御奉行所日記抄出、触－触状扣頭書、大覚－大覚帳頭書、家譜続－御家譜続編、式稿－市井式稿、会旧－会所旧記、覚合－覚帳合類頭書、旧章－旧章略記、覚－覚帳頭書、年合－年々覚合類頭書、年覚－年年覚頭書、町日目－町方日帳目録、市雑乾－市井雑式草書乾、肥－肥後近世史年表、難稜－覚帳難稜分類頭書、国事－肥後藩国事資料。

この年表稿抄の作成を思い立ったのは昭和54年1月で、この成果は今年度調査には充分反映されていない。これらの動向は、今後の調査に大きな示唆を与えよう。

近世たたら製鉄に限ってみると、寛永15年（1638）の小国鉄山試掘が注目される。実際たたら製鉄が行われたかどうか不明であるが、小国地方の南小国には年代不明のスラグ出土地が3カ所（たたらもと、金山、滝の下）知られており、これらの遺跡の年代判定と上述の記事との関係を明らかにする必要があろう。

また、元禄6年（1693）にも八代における鉄山採掘の記事がみえ、たたら製鉄の可能性を示している。

宝暦12年（1762）の深川手永水次村におけるたたら製鉄は、明和元年（1764）までの短期間であるが、確実なものとしては最も古い時期のものである。深川手永水次村は現在の菊池郡七城町水次で、砂鉄を採取した川は迫間川と考えられる。この地域には製鉄遺跡は判明しておらず、地点の解明は今後の課題である。

同年5月には「領内海辺の鉄砂を鉄に吹立試しの沙汰」があり、たたら製鉄に対する藩の姿勢がうかがえる。

天明３年（1783）には中山手永岩下村（現在の下益城郡中央町岩下）での試し吹き、寛政10年（1798）には坂下手永亀甲村（現在の玉名市亀甲）での製鉄許可がある。後者は同田貫鍛冶の拠点とされる所で、その原料確保のための製鉄と考えられるが、文政12年（1829）には「坂下手永亀甲村鍛治共鉄買入願」があり、この時期にはすでに製鉄が廃絶していたのであろうか。

文政12年（1829）には馬水の砂鉄鋳造の記事があり、20年後の嘉永２年（1849）に八代鉄山取起の記事がある。

以上、肥後藩におけるたたら製鉄の大要であるが、実態解明については今後の課題である。

たたら製鉄の原料砂鉄の採取方法として、中国山地を中心とした鉄穴流しによる山砂鉄採取がある。肥後藩においては鉄穴流しの痕跡はみられず、上記の資料でも川砂鉄・浜砂鉄の利用が考えられる。福岡・黒田藩でも浜砂鉄の利用が指摘[註38]されており、あるいは九州には鉄穴流しの手法が導入されなかった可能性が強い。

藩内におけるたたら製鉄は、それによって需用を充足するものではなく、とくに幕末には他国よりの鉄買入れの記事が文久３年（1863）、元治１年（1864）にみえる。また、武井博明氏の研究[註39]によれば、石見国邇摩郡久手浦竹下家廻船による鉄販売先として、肥後小島の芦北屋茂平寺（買付高、安政元年91束、同５年43束）、肥後八代の米屋清兵衛（同じく 106 束、219 束）、肥後長岡の茶屋恒八（安政５年のみ 157 束）、があり、他国産鉄の流入の一端を示す資料である。[註40]

また、圭室諦成氏による郡村誌解説[註41]の中で、明治初年の御幸津（小島津）への移入品目に鉄18,000斤があることを指摘されている。

すでに述べたように、近世たたら製鉄については今後に負う課題が多く、考古学的にはその遺構の解明が第一に求められる。さらに流通機構の問題等はもはや単独の領域では解明できない要素をもっている。関連分野の連携が切に望まれる。

７．ふいごの羽口について

製鉄遺跡あるいは製鉄関係遺跡から出土する遺物の大半はスラグとふいごの羽口である。

ふいごの羽口については村上英之助氏の論考[註42]があり、材質でみると土製・石製・金属製があり、形態の上から単式羽口・複式羽口・彎曲式羽口に分類されている。

今回得られた資料は土製と石製のもので、形態的には単式羽口と複式羽口である。量的には土製の単式羽口が最も多い。遺跡から出土する羽口の完形品は少なく、多くは破損品あるいは細片の状態で出土するため資料的に充分とはいえないが、その類型と系統の一端にふれる。

弥生時代後期の鍛冶遺跡と考えられる下前原遺跡・諏訪原遺跡においては羽口の出土はない。

古墳時代・奈良時代の羽口については資料的に空白であり、弥生時代の鍛冶工程とともに今後の課題である。

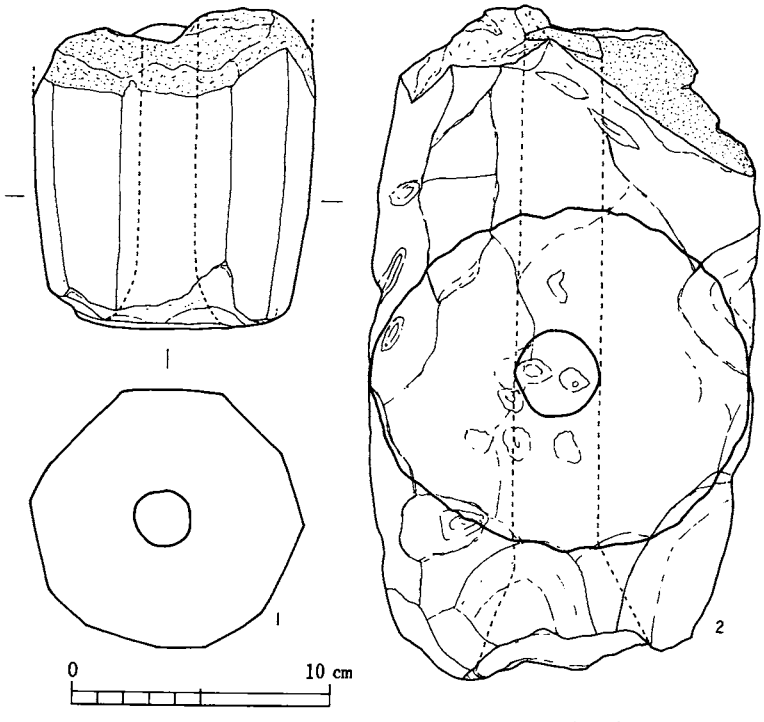
平安時代の製錬遺跡と考えられる玉東町・むくろじ遺跡、三角町・柳迫遺跡では多量の羽口が出土している。ほとんどが土製単式羽口のようであるが、むくろじ遺跡ではやや先細りのもの（第35図）も出土している。

その他、年代が確定できないが、古代～中世と考えられる小岱山製鉄遺跡群・三の岳製鉄遺跡群・大岳製鉄遺跡群からも羽口の出土がみられるが、ほとんどが土製単式羽口である。

これらの土製単式羽口は、長さ20cm前後、径９～12cm、孔径３～５cm前後のもので、同一遺跡においてもわずかな個体差が認められる。

土製複式羽口は、近世のものを除けば、12～13世紀と考えられる荒尾市・たたらもとA遺跡の１点（第33図６）が管見にふれただけで、土製単式羽口と共存している。たたらもとA遺跡出土の土製複式羽口はほぼ完形品で、長さ約20cm、炉体に装着される側の径8.5cm前後、ラッパ状に開く一端の径11.5cm前後を測る。

石製羽口は宮崎県出土のものが石川恒太郎氏によって報告[註43]されているが、本県でも宇土城[註44]・西岡台遺跡[註45]・無田原遺跡[註46]・相良頼景館跡[註47]から出土しており、他に球磨郡内出土品という凝灰岩製羽口がもと八代厚生病院に所蔵されていたという[註48]。これらの石製羽口はすべて単式羽口で、複式の石製羽口は知られていない。



第48図　石製ふいごの羽口実測図

1．宇土城（砂岩）
2．相良頼景館跡（凝灰岩）

石製羽口には凝灰岩製と砂岩製のものがあり、宇土城では砂岩製の多面体の羽口、西岡台遺跡・無田原遺跡では凝灰岩製、相良頼景館跡では凝灰岩製と砂岩製の羽口が出土しており、西岡台遺跡・相良頼景館跡では土製羽口とともに出土し、スラグはすべての遺跡から出土している。

これらの石製羽口が出土している遺跡は、年代が不明な無田原遺跡を除けば中世～近世初頭に属する。製鉄に関する遺構は検出されていないが、遺跡の状況から鍛冶に伴う羽口やスラグと考えられる。すべての遺跡についてのスラグ分析は行われていないが、相良頼景館跡出土のスラグは鍛冶滓と判定[註49]されている。

このように、本県の石製羽口は、中世から近世初頭にかけて鍛冶に伴って使用された可能性が強い。

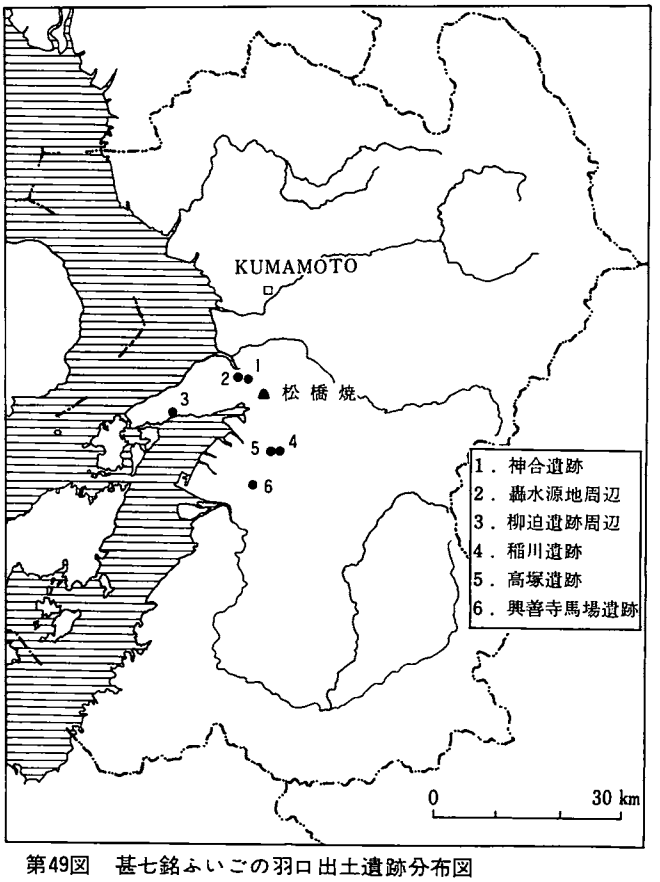
明らかに近世以降と考えられる土製複式羽口（第50図）が県内の各地から出土している。径7～8㎝、孔径3㎝前後のやや細身で、一端はラッパ状に開く。最も長いものは34㎝を測るものもあるが、20㎝前後のものが多い。

これらの土製複式羽口の中に、「甚七」という刻銘があるものが6カ所（第49図）から出土しており、同一工人あるいは同一工房で製作されたものと考えられる。これらの羽口のラッパ状に開く部分は明らかにロクロ整形されており、陶工の製作の可能性が強い。

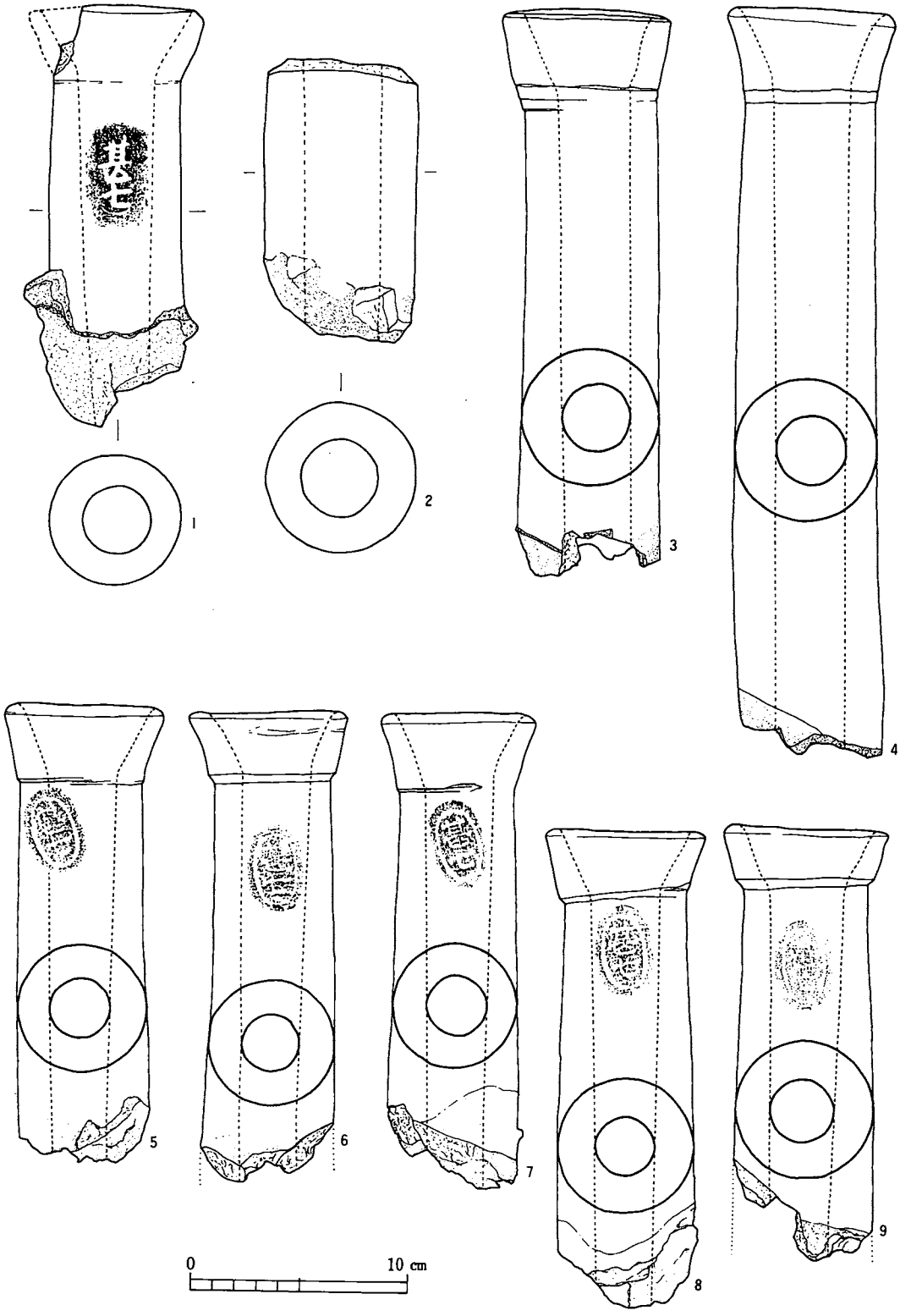
甚七銘のふいごの出土している地域は第49図に示すように宇城・八代地方に限定されており、この地域の近世陶磁器窯・松橋焼で焼かれた可能性が強い。

松橋焼[註50]には釉薬をかけたものと素焼のものとの二系統があり、幕末に始まる。素焼系統の窯は七輪・火消壺・焙烙・ふいごの羽口・こたつ火鉢・植木鉢等を焼き、明治40年代に最盛期をむかえ8戸が従っていたが、いずれも大正から昭和初期にかけて廃業している。

この窯跡の調査は来年度事業として実施する予定であり、これらの羽口



第49図　甚七銘ふいごの羽口出土遺跡分布図



第50図　ふいごの羽口実測図　　1～2．神合遺跡　3～9．高塚遺跡

が果して松橋焼窯で焼かれたものかどうかの検証ができよう。

註1　坂本経堯『肥後に於ける製鉄遺跡の研究・第1編』、プリント版、昭和28年。

註2　坂本経堯「肥後上代の鉄」『熊本史学』第4号、昭和28年。

註3　田添夏喜「肥後たたら製鉄の一例－荒尾市薬師の上遺跡－」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』、昭和52年。

註4　平島広幸、松村道博、松本健郎『たたらもと製鉄遺跡調査報告書』、荒尾市文化財調査報告第2集、昭和53年。

註5　盛高靖博氏は縄文時代製鉄論者で、その所論は直接拝聴する機会を得た。
山本博『古代の製鉄』　昭和50年。

註6　長崎県の小原下遺跡・筏遺跡で縄文晩期の鉄器（鉄鏃）の出土、製鉄遺構の検出が報じられているが、年代、遺構の性格については検討を要するとの見方が一般的である。

註7　山崎純男・沢皇臣・山口譲治・原俊一『板付遺跡調査概報』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、昭和54年。

註8　潮見浩「わが国古代における製鉄研究をめぐって」『日本製鉄史論』、昭和45年。

註9　岡崎敬「日本における初期製鉄品の問題」、『考古学雑誌』42－1、昭和32年。

註10　近藤義郎「弥生文化論」『岩波講座日本歴史』第1巻、昭和37年。

註11　藤田等・川越哲志「弥生時代鉄器出土地名表」、『日本製鉄史論』、昭和45年。

註12　川越哲志「鉄器の生産」、『古代史発掘』第4巻、昭和50年。

註13　緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』、昭和46年。

註14　緒方勉「諏訪原遺跡出土遺物」、『熊本史学』第37号、昭和50年。

註15　田辺哲夫・田添夏喜「ベッドを有する弥生末期の方型竪穴住居址群－肥後下前原遺跡」、『日本考古学協会第19回総合研究発表要旨』、昭和32年。

註16　湊秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」、『たたら研究』第14号、昭和43年。

註17　長谷川熊彦・和島誠一「たたら製鉄鉱滓の研究」、『資源科学研究所集報』第68号、昭和42年。

註18　分析結果の詳細については、次年度報告書に収録の予定である。

註19　大澤正己「蓮花寺跡出土鉄滓の調査」、『蓮花寺跡・相良頼景館跡』、熊本県文化財調査報告第22集、昭和52年。

註20　柳沢一男「福岡平野を中心とした古代製鉄について」・大澤正己「福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析」、『広石古墳群』、福岡市埋蔵文化財調査報告第41集、昭和52年。

註21　坂本経堯『荒尾野原古墳』、プリント版、昭和28年。

註22　松本健郎「野原八幡古墳群調査概報」、『玉高考古学部報』第31号、昭和48年。

註23　註18に同じ。

註24　野田拓治他『塚原』、熊本県文化財調査報告第16集、昭和50年。

註25　森田勉「九州地方の瓦器碗について－型式分類と編年試案－」、『考古学雑誌』59－２、昭和49年。

註26　註１に同じ。

註27　註３に同じ。

註28　註１に同じ。

註29　昭和37年に田辺哲夫氏により調査され、炉跡が検出されている。炉跡は現存しているが、自然風化もあり、図に示したのは昭和54年時の現状実測である。また、県指定史跡でもあり、実測にあたっての発掘は行わなかったため、図の細部については不明な点もある。

註30　註１に同じ。

註31　昭和52年、筆者が採集した資料を新日本製鉄八幡製鉄所・大澤正己氏に依頼して分析を行った。分析結果の詳細については次年度報告書に収録の予定。

註32　註16・17に同じ。

註33　井上辰雄『火の国』、昭和45年。

井上辰雄「日置考－その職掌と性格－」『古代史論叢』上巻、昭和53年。

註34　野原荘は永久２年（1114）頃までには、宇佐八幡弥勒寺喜多院を領家とし、石清水八幡善法寺坊を本所とする荘園となっていたという。

杉本尚雄「武士団の発展」『熊本県史・総説論』、昭和40年。

註35　註16に同じ。

註36　井上辰雄『火の国』、昭和45年。

註37　松本雅明「古墳文化の成立と大陸」、『古代アジアと九州』、昭和48年。

註38　北九州郷土史研究会編『真名子鉄山発掘調査報告書』、昭和44年。

中山光夫「タタラ製鉄と芦屋鋳物」、『郷土八幡』第２号、昭和54年。

註39　武井博明「化政天保期における鉄の流通について」、『日本製鉄史論』、昭和45年。

註40　１束＝10貫。

註41　圭室諦成解説・田辺哲夫校訂『肥後国王名郡村誌』、昭和33年。

註42　村上英之助「ふいごと羽口の系統序説」、『日本製鉄史論』、昭和45年。

註43　石川恒太郎『日本古代の銅鉄の精錬遺跡に関する研究』、昭和34年。

註44　宇土市教育委員会蔵。

註45　註44に同じ。

註46　前田一洋氏採集。同氏の教示による。

註47　杉村彰一「相良頼景館跡」『蓮花寺跡・相良頼景館跡』、熊本県文化財調査報告第22集、昭和52年。

註48　前田一洋氏教示。

註49　大沢正己「相良頼景館跡出土鉄滓の調査」『蓮花寺跡・相良頼景館跡』、熊本県文化財調査報告第22集、昭和52年。

註50　松橋焼については、熊本県教育委員会編『熊本県文化財ハンドブック』、松本雅明「西南九州の陶磁器」『九州の絵画と陶芸』、昭和48年を参照した。

図版 1　出来町遺跡空中写真

(1) 遺跡遠景

(2) 遺跡近景

図版 2 出来町遺跡

(1)　発掘区断面

(2)　出土遺物(須恵器)

図版 3　出来町遺跡

図版　4　出来町遺跡出土製塩土器

図版　5　出来町遺跡出土製塩土器

図版 6　出来町遺跡出土製塩土器

(1)　遺跡遠景（中央杉林が遺跡）

(2)　発掘区断面

図版 7　柳迫遺跡

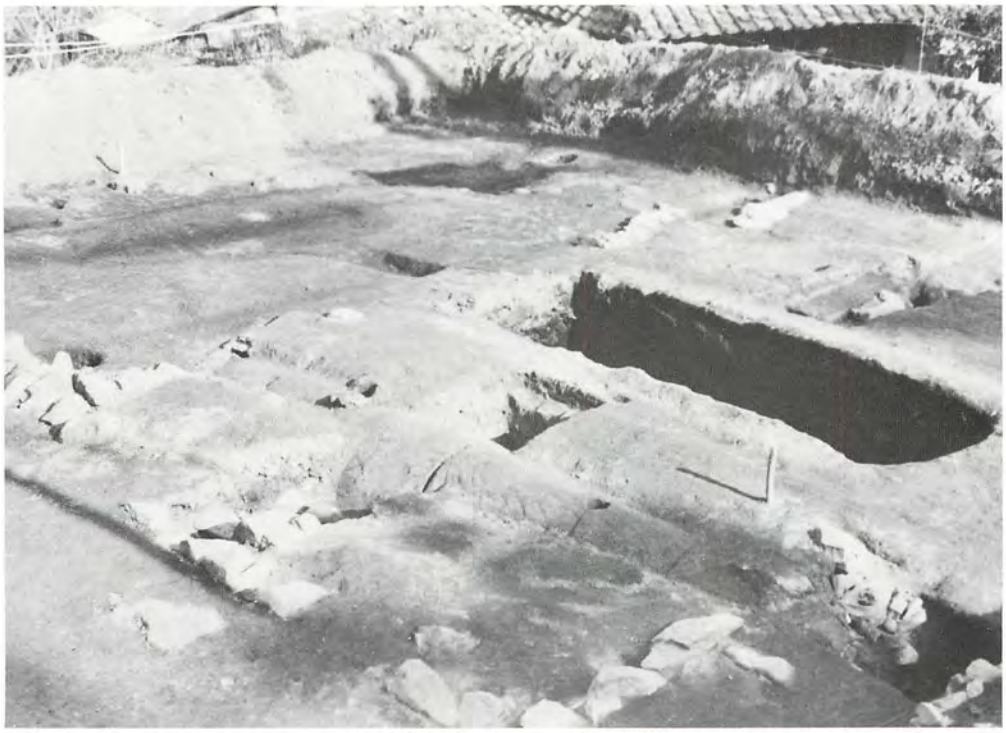
図版 8　柳迫遺跡出土遺物

(1) 遺跡遠景

(2) 発掘区全景

図版 9 今泉製鉄遺跡

(1) 遺構全景



(2) 遺構（本床・西小舟・石列）

図版 10 今泉製鉄遺跡

(1)　遺構（本床・西小舟）

(2)　西小舟の天井部

図版 11　今泉製鉄遺跡

(1)　本床北側断面

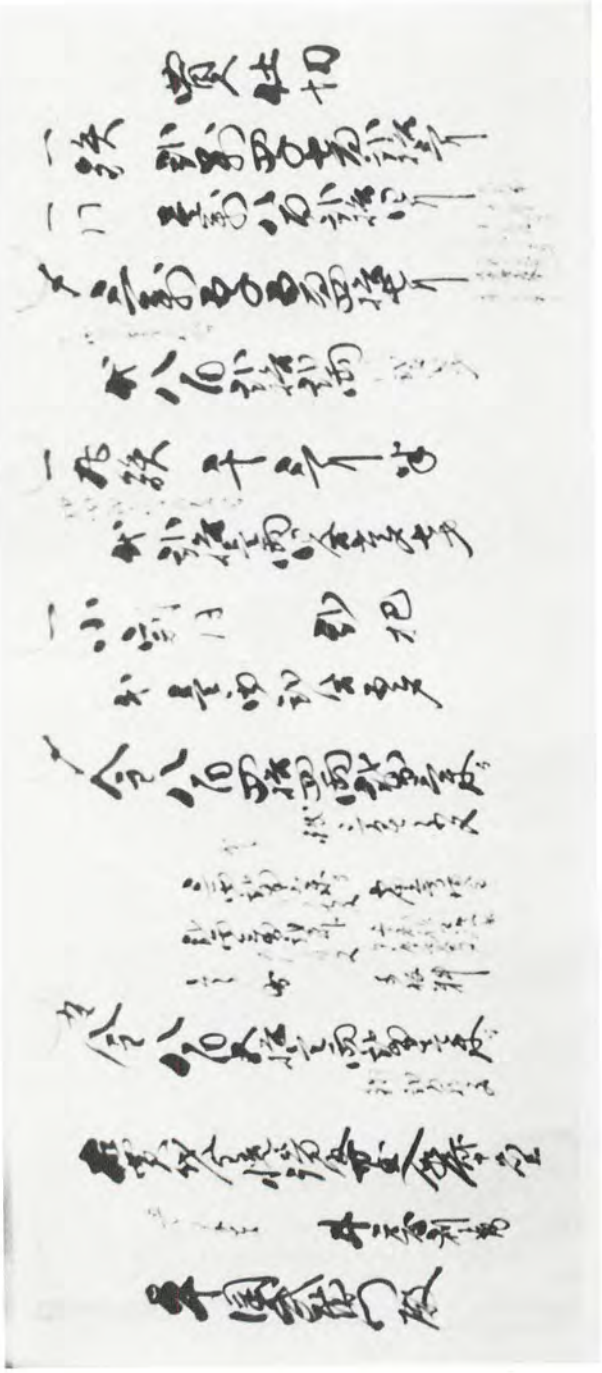
(2)　本床南側断面

図版 12　今泉製鉄遺跡

(1)　東小舟の補修部分

(2)　西小舟北側の閉塞

図版 13　今泉製鉄遺跡



図版 14　金屋子神・平岡家文書

(1) 遺跡遠景（北東から）

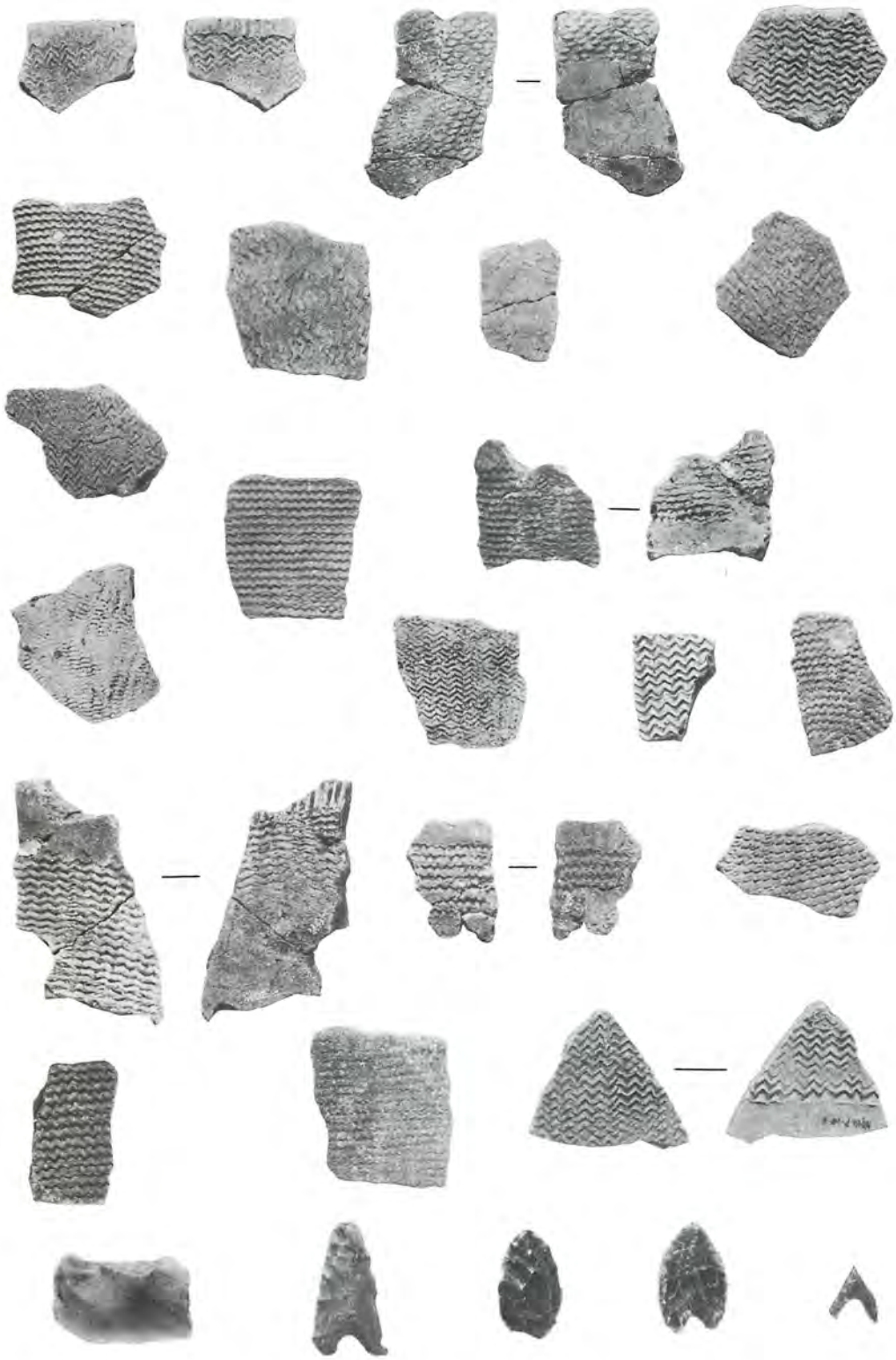
(2) 遺跡遠景（西から）

図版 15 柿迫遺跡

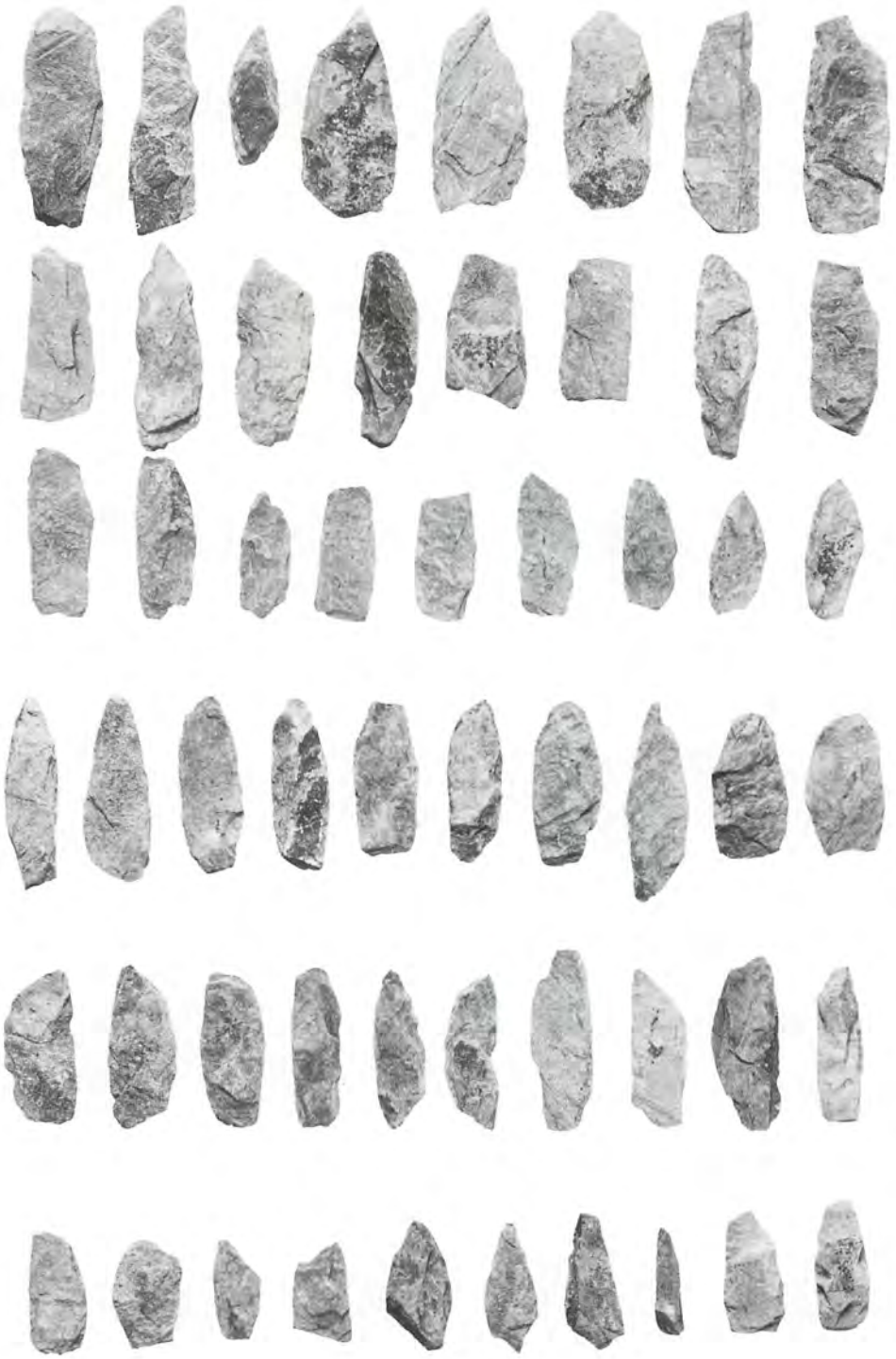
(1) 遺跡全景

(2) 発掘区の層序（A－10区北壁）

図版 16 柿迫遺跡

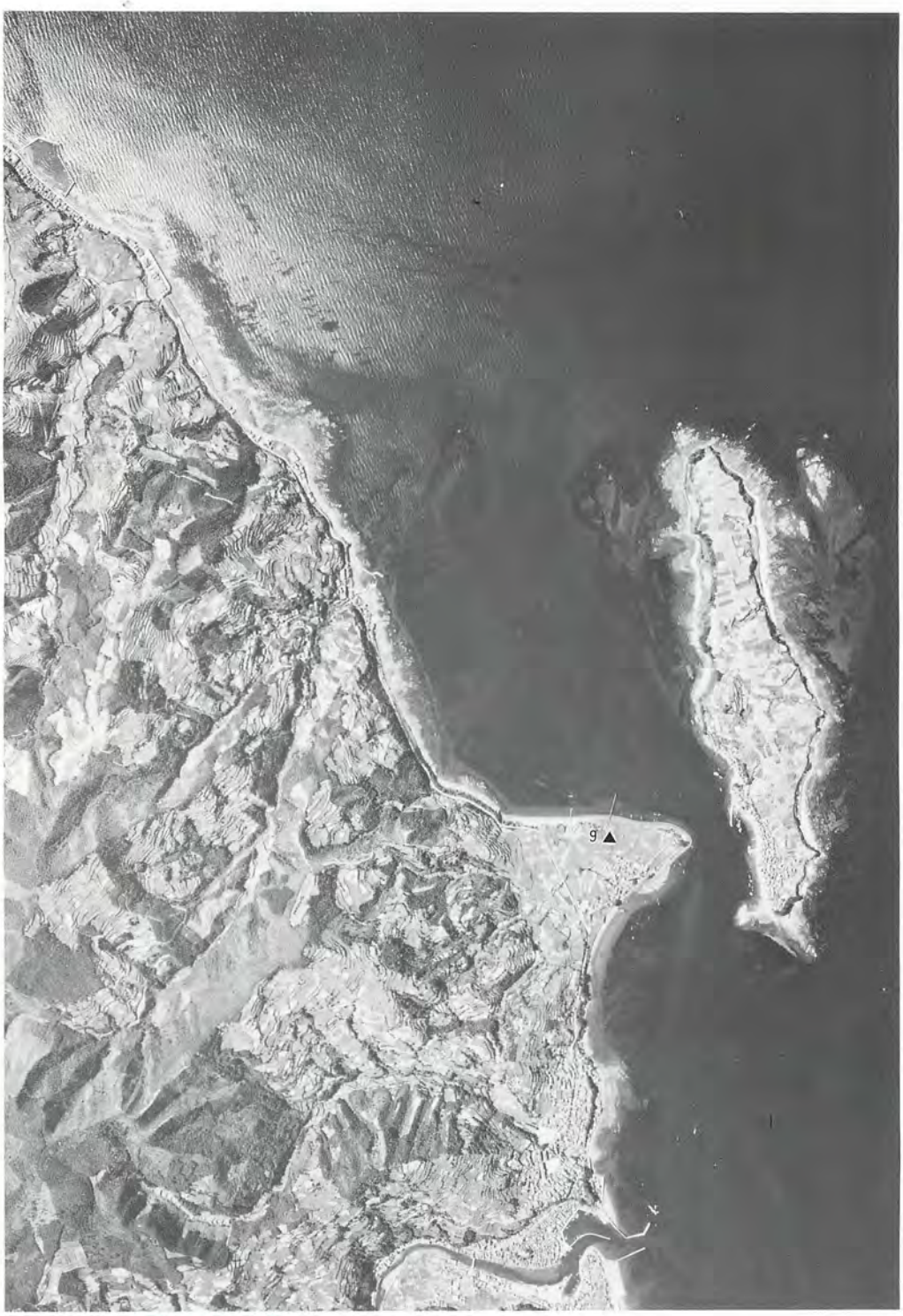


図版 17　柿迫遺跡出土遺物



図版 18　柿迫遺跡採集石器

図版 19　大田尾遺跡・塩屋浦遺跡空中写真

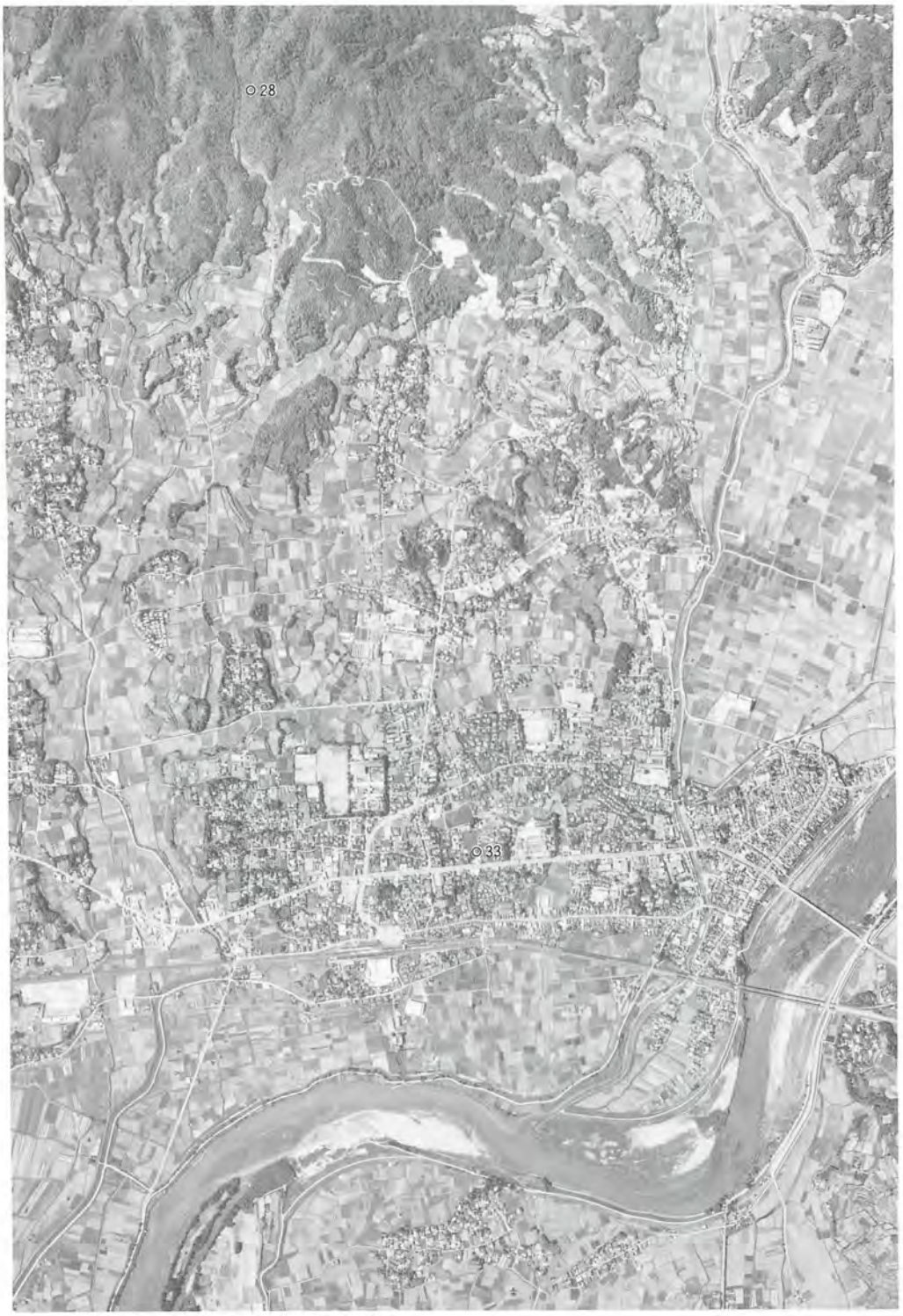


図版 20　沖の原遺跡空中写真

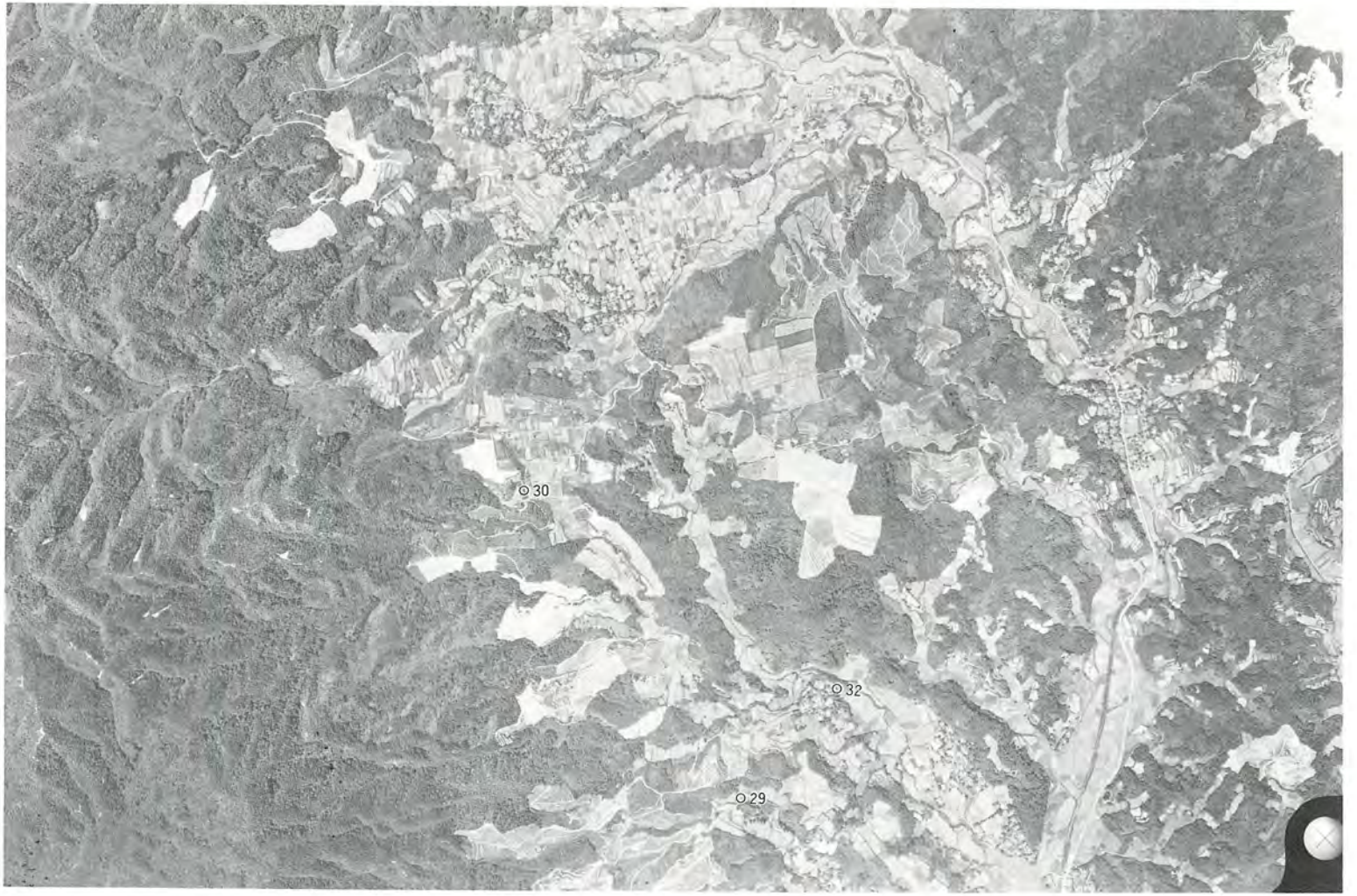
図版 21　小岱山製鉄遺跡群空中写真（1）

図版 22　小岱山製鉄遺跡群空中写真（2）

図版 23　小岱山製鉄遺跡群空中写真（3）



図版 24　小岱山製鉄遺跡群空中写真（4）



図版 25　小岱山製鉄遺跡群空中写真（5）

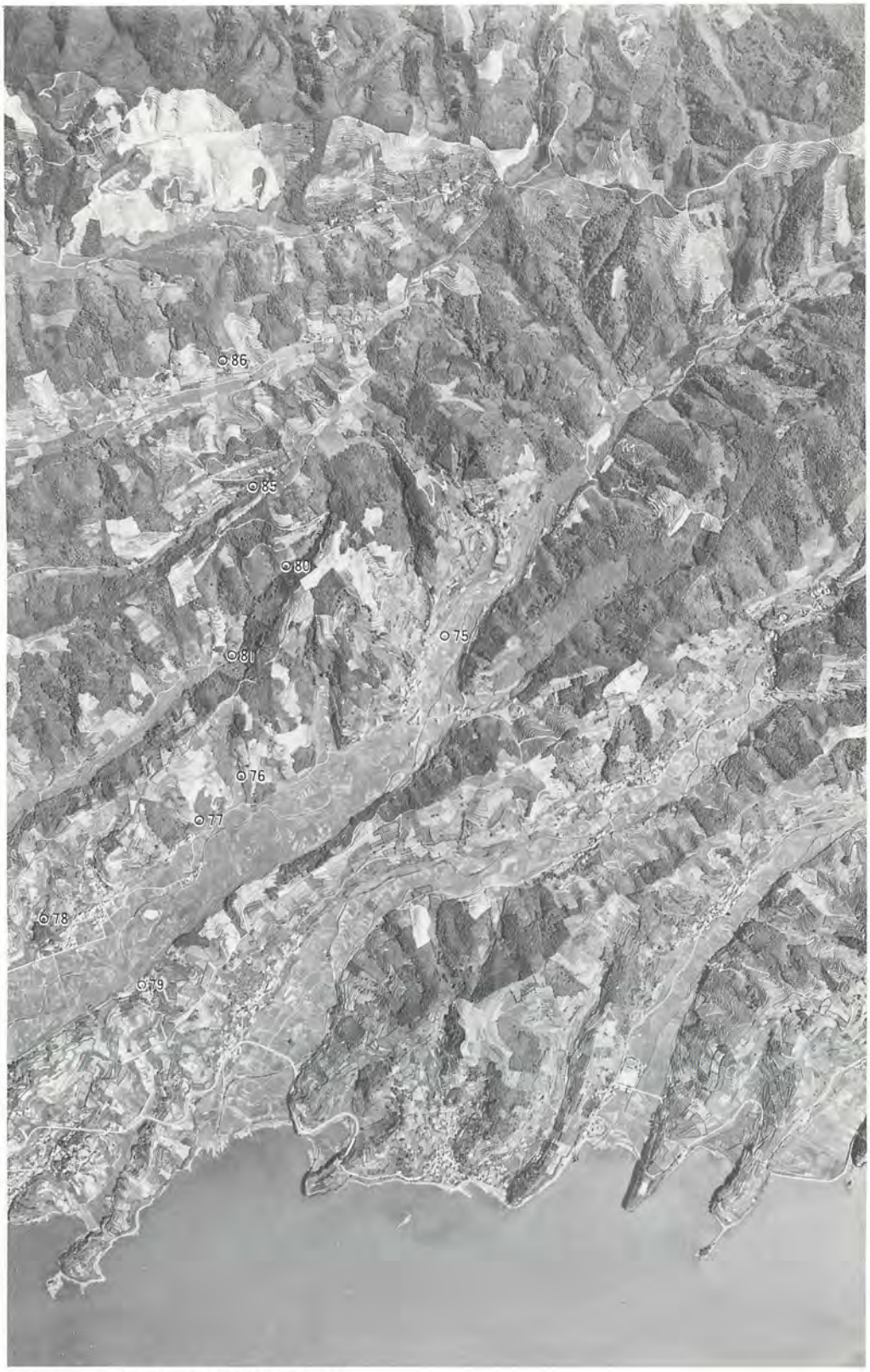
図版 26　三の岳製鉄遺跡群・石器製作跡空中写真

図版 27　大岳製鉄遺跡群・製塩遺跡空中写真（1）

図版 30　ふいごの羽口

1～2．荒尾市薬師前遺跡　3．同金塚遺跡
4．同たたらもとA遺跡

図版 27　大岳製鉄遺跡群・製塩遺跡空中写真（1）



図版 28　大岳製鉄遺跡群空中写真（2）

図版 29　大岳製鉄遺跡群空中写真（3）

図版 30　ふいごの羽口

1～2．荒尾市薬師前遺跡　3．同金塚遺跡
4．同たたらもとA遺跡

1
2
3
4
5
6
7
8
9

熊本県文化財調査報告　第38集

生産遺跡基本調査報告書　I

昭和54年3月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒 862　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合 サン・カラー
〒 862　熊本市御領町　☎80―8131

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 38 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：生産遺跡基本調査報告書 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日